魔法少女リリカルなのは～この瞳で見る世界ともう一つの違うセカイ～

予耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜この瞳で見る世界ともう一つの違う世界〜

【Nコード】

N6922T

【作者名】

予耶

【あらすじ】

この話は魔法少女リリカルなのはの世界でオリキャラを作り自分がやりたい事をただ書いた物語である。

…があまり期待してはならない作品。

つまり原作キャラはほとんど出てこない。

という点。

とことん オリジナルです。

けど ころいっ話しかけるなんて ツイてる

第一話 「また会いたくなかったのなら…」

「ねえええ - さあああ - ん」

蒼く晴れたそらに一人の少女が大声で叫んだ。

その子は久遠・クオン - という可愛らしい？。名前をもった少女である。

なぜ 久遠が叫んでいるのかは、一人の姉を捜しているからである。

「ク・オ・ン~~~~!!うるさい - 」

紹介しよう。今部屋に入ってきた子は イーターと名乗る半妖怪。

あっ ちなみに女の子だ!!

「ああ そんなに怒鳴らなくてもいいだろう! イーター」

「こつちからすれば迷惑なのよ!! これは何回目よ 毎朝騒ぐの!」

「ええ〜1、2、3・・・6回目?」

「ちがーう!! 12回目でしょう!!」

ああ そうか姉さんが消えてから そんなに経つんだ。

「ちよつと、クオン?」

「あっ ゴメン何だっけ?」

「もしかして、またあの事を、考えてたの?」

「まあ・・・いろいろ・・・」

二人の間で小さな沈黙の時間がながれた。

「ねえ。久遠、学校いこ!」

「学校?、朝?、朝、あさ!!!今イーター時間何時?」

「時間。7時40分」

「遅刻だ〜〜!!」

時間まだある。と思っただけと言わなかったイーターなのでした。

「ああ 遅刻だ遅刻〜これららつていこ〜(ダアーシュ)」

慌てて 出て行った久遠に手を振る優しいイーターなのでした。

今日も平和な一日が始まります。

ガン、ガン、

なにもないところで 乾いた打撃音が全体に響く。こだま。する。

コノ二人ハ 訳モ無ク 戦ッテイルノデハナク

タダ 明日トイウモノニハイズクバリタイ トイウ 一心デ戦ッテ
・
・

4

「はぁ・・・はぁ遅刻!!」
あれ?

時計に目を向けた久遠は、はてな顔になる。

「あら!久遠さん。今日は、やけ早いですね?。」

こんな 混乱している私に声をかけてきたのは

私の大親友の「ミー」だ

本名は、泉 水波 - みなみ - で! 単なる、私が面倒だったため、

「ミー」と呼んだのがきつかけで、今現在にいたるといっわけ！

「どうしたの？ こんな 時間に？」

「いやー。私の時計の読みまちがいつて、やつな。 ははは（棒読み）」

「もう クウーちゃんたら！」

「ふふふ」「あはは」

笑っているのは顔だけで・・・ 内心はとても 「恥ずかしい／＼／＼」

じゃあ イーターがあんな誘いをしたのは、私を・・・と思いつつ 教室に向かう。

・・・ザッ、ザッ・・・ザッ

「・・・」

ヒトリノ 少女ガ 砂浜ヲ 歩ク ソコハ カツテ 自分ノ 存在ガ 証明デキタ 唯一の場所ダッタ。

ソナナ 少女ガ ココ離レ次ニ歩キ求メル 場所ハ・・・

「さあ そろそろ いくかな！ 何で 久遠はあんな早くに家を飛

イーターは言葉が詰まった。なぜなら、相手は女の子だ。しかも同じ学園の制服を着た、可憐な少女で、すごく丁寧に扱わないとすぐに壊れてしまいそうなほど、細い体。そんな捨てられた子猫のように見てくるその碧眼はとてとても胸が苦しくなる。そこで私は思った。この娘は私が守る。この娘を守るんだー

以上 イーター 心の叫びでした。

「あの大丈夫？」

「はい 大丈夫なのです。」

その少女はテンパってしまい。つい萌えてしまいそんな発言をします。

「あっ………／／／」

「あっあっ……あの、僕と結婚してください。」

「えっ？」

二人の沈黙。

シーーン。

(やばい つい テンションがMAXになっちゃっちゃって あんなことを 言ってしまった。)

頭に手をつけ 落ち込むが 実際は心のなかの話。

「あのーもしもーし」

「はい？」

「もし、よろしければお名前を教えてください、くれませんか？」

「あつ名前ね！ イーター、時・とき・イーター よろしく。」

「私は、宇名路・うなじ・璃音火・りとび・と申します。よろしくね イーちゃん」

そんな お互いが ぶつかったのは何かの縁って念ったのは、言うまでもない

コツ・コツコツカ

一人ノ少女ノ次ノ目的地ハ、一ツの大キナ「城」

ソコニ 用ガアルノハ、一ツノ 「決着」

コツ カツカツカツ

少女ハ 闘イ何ヲ掴ムノカ？・・・

「あはは！ そうなんだ。意外だなあ」

「そうなんですの。」

楽しそうに学校に入って来たのが、例のイーターと璃音火だ。

「ん。誰かがこっちを見てるような？」

「どつかしましたの？」

そう！。 イーターを見つめているのは久遠。 しかいないと言っても過言ではない！！

「何で、あんなに楽しそうなんだ？ うん？隣にいるのは、誰だ！ 見たことないな。」

イーター。 新しい友達ができてよかったな。 と悟った久遠だった。

ガラガラ

ドアが開いた。

「久遠。」

「イーター！！ お前な 私をハメたな！」

「ハメた 覚えはないよ。 君のはやとちり。」

「うっ・・・」

「私の勝ち」

勝者は、イーター。 どうしても勝つことが出来ないんだよな！

「ああ そうそう イーターさ。 さっき娘は誰だ？」

「・・・その、ぼくの新しい友達・・・」

珍しく イーターの顔色が悪い。

熱でもあるのか？

鈍感な久遠はそれがなんなのか分からなかった。

カーン！、カキン！、ガンガン！！

城ノ中デ 戦闘ガ 始マツテイル。ソノ戦闘ハ小サナモノ、デハナク ーツノ 決別。

「・・・・・・・・」

「ふふ・・・・」

二人ノブツカル 勢イハ、脆イ城ヲ壊シテユク

ボロ・・・・ボロ・・・・

「！」

床ノ崩壊。

コノ時少女ハ、下ニ飲ミ込マレ、

勝敗ハ引キ分ケニナッタ。

ソノ時 少女ハ、

時を越えた。

「さっ！！やっと授業だ！ 待ちくたびれた。」

そんな気持ちで授業を受けようとする、久遠がいた。

第二話 「この世界の私と 異界の女の子」

「ふあゝあゝなんか眠くなっ・・・て・・・きた・・・な・・・ここ
の紹介をしないと・・・」

すうゝ。

私は、この瞬間 - とき - 眠りについてしまったようだ。

じゃ、この居眠りさんの代わりにこの学園の紹介をしようと思いま
す。

ここ「私立 夢ノ風学園」は、はっきり言うと夢が叶う場所である。
なぜ夢が叶うかというところこの学園には、三つの魔法石があるからな
のです。

一つ・・・赤い宝石 - アント - この宝石の能力は「身体強化」文
字通り、力を求める人が、使うべき宝石です。

二つ・・・青い宝石 - リソナ - この宝石の能力は「創造具現強化」
つまり、あれがしたいゝこれがしたいゝ。などと言った事が、現実
に作ることができるようになる宝石です。

三つ・・・緑の宝石 - ブレン - この宝石は「知能強化」といった能
力で、よく使われる宝石のひとつです。

と言っても、この宝石を使えるのは、学園一位にならないと使えま
せん。

ちなみに、久遠さんは、二度学園一位になって、リソナを二度使ったそうです。

すう〜

そんな 噂をしても 久遠さんは起きることはありません。

「あら！、ちよつと・・・ちよつ久遠さん、久遠さん、先生がこちらを見て、何かを言ってますよ！」

と言つても、久遠には、ナレーションの声は、聞こえません。

「じゃあ、後説明するのは、征服のこゝ、こつちじゃなくて、こつち「制服」についてです。ここ 夢ノ風学園は、改造ができる制服です。最初に本人にセーラー服か？ブレザーか？を選んでもらい購入してもらいます。そこからは、本人の自由となります、かっこよくするのも、ヨシ！！。かわいくするのも、ヨシ！！。それを自分色に染め上げるの面白いですね！」

「じゃあ・・・最後に学校の設備についてです。この学園は創立今年で23年目になります。建てたのは、何処にでもいる「人」でさつき話をした宝石を見つけたことから始まりました。その何処にでもいる「人」は、この宝石を一人で使うのは、もつたいたい。よし、いろんな人にも この宝石の力を分けてあげよう。と言ったのが今の学園がある理由です。学園の設備は、何処にでもあるようなアイテムを学校に設置しているならなのです。それは・・・」

「ん？・・・それ・・・言わなくて・・・いい。」

余計なことは、言わなくていい。

すうゝ

再び眠りについた久遠は、不思議な夢を見る。

「・・・・・・・・」

周りヲ見ル。 キヨロ キヨロ

辺り、暗イ。 見エナイ。

「此処ハ、ドコ？」

ソシナ 言葉ニ答エテクレル人ナド此処ニハイナイ。

少女ハ、タダ知ラナイ道ヲ歩クコトシカ、今ハ、デキナカタ。

ソシナ、少女ハ、ヒトリニナレテイルハズナノニ、ドコトナク 恐
怖ヲ感ジテイタ。

ソウ。 ソレハ、家族ヲ亡クシタ、アノ日のヨウニ。

「ハツ・・・ハツ・・・誰カ、助ケテ・・・」

ただ・・・見てることしか出来なくて、あの時 手を伸ばしていれば、
助けられたかも知れないのに、それは、ただの仮定の話、現実はず
と違う。 そんなに優しくくない。

「うわああーん」

「うわあ！！はっはっ・・・はっ・・・は」

誰だ！！私のなかに入り込んできたのは・・・

「随分 苦しいお目覚めだな！！ 時 久遠！！」

悪夢を見た時見たいに、呼吸を直している最中に 誰かが私に声をかけてくる。その人は、初めて見た時、何か裏があるように見えてしまった。残念な先生こと、「榛原 - はいばら - 凜子 - りんこ - 先生」だ

「はい？何でしょう りんこ先生」

「なあに 気持ち良さそうだったから、ちょっと悪戯してやろうかとおもっただけだ！」

先生。生徒に悪戯は、まずいっすよ。

「それは、冗談だ！！」

なんか 笑顔って感じたが、なんかすごく怒ってない。後ろに何か見えるぞ！ そんなに悪戯したかったのか！そうならそうと言ってくれれば！。言ったところで、やらせないけどね！！

「じゃ この問題解いてみる、寝てなければ できるはずだが・・・」

ちなみに、周りを見ると、皆が曇り顔をしていた。そんなに難しいのか？どれどれ、あっ すっげえ簡単じゃん。

答えは、くですね！！

言い忘れていたが、この授業は、「推理」ところで、この授業っているのか？もっと 当たり前前の授業とか 無いわけ？

「正解だ」

正解した瞬間、曇り顔の皆の顔が一気に晴れ顔に変わった！ってみんな 簡単じゃんか！もしかして、みんな推理小説読まないの

それと もうひとつ言い忘れていたが、歓声があちこちから聞こえる。「久遠様」 「久遠姉様」 とか、もう訳が分からない。

（早く学校、終わらないかな。 退屈だな〜 終わったら、あれやりたいな〜じゃあ あれ終わったら、これしよ〜なんて 計画していると 次第に足をバタバタと動かして楽しんでいる久遠。）

気が付いたら、昼休み！！

「さあ〜GO・HA・Nの時間だよ〜」

なんてこと言っていると、周りには、女子が久遠を囲んでいる状態です。

「弁当、忘れた〜（心からの叫び）」

久遠は、SHOCKの余り、膝から「ガクッ」どこかのアニメでありそうな落ち方をしてしまう。

「今日1番の楽しみだったのに・・・」

「久遠姉様 私の弁当でよろしければ食べてください／＼」

「ずるい。姉様が食べるのは、私のお弁当ですわ!」

「・・・いや私。私の・・・」

女子たちが久遠を囲んでいるなか、久遠は、一人落ち込んでいた。

「あーもう!!!久遠。手を上に上げる。ほらっ!」

イーターが久遠に向けて投げた物は、久遠が忘れた弁当だった。が!!!弁当は、本来 投げてはいけない物なので、ちよつとの傾きが弁当の命を左右する。だが大丈夫!!!久遠の弁当の中身は、ビッチリ詰まっているのでちよつとした、傾きでも 何ともないのである。

「その弁当。受けとつた!!!」

たかが、弁当のはずなのにここまで喜ばれると、作った人は大喜びだろう!!!

「いっただきます!!!」

久遠は、礼とともに弁当の蓋を開けるとそこで待っていたのは、DEATH だった。その理由は、今朝イーターが璃音火とぶつかったところまで戻らないといけない。そう あの時に弁当が・・・

「まっいつか」

DEATH だろうがなんだろうが数秒で平らげた。

そんな悲劇の昼休みが終わり。午後の授業に入るのだが、久遠にとつて昼寝タイムだったようす。

すう〜・・・ううん！今何時？

久遠は、自分の携帯の時計を見ると

18時だった。

帰るか！！

何時間ぶりに席を立つだろうか？と ふと思った疑問すら、気にしない寝ぼけた久遠が教室から出て、もう下駄箱の目の前にいる。ちなみに完全下校は、今から一時間前でした。そんな解説をしていると靴に履き変えて校門を出たところだった。

ソノ時

カッ・・・カッ・・・カッ

「明ルイ」

今マデ、歩イテ 来タ 道八、光スラ無ク。タダ無限に直線シカナクテ 歩ク度ニ 歩幅が大キクナツタリ、小サクナツタリ、マルデ・

・・・

小さい時の・・・『キオク』と『好奇心』ヲ思いダす

「・・・・・・・・！」

少女 は、知らず間に門ノ前ニ立ッていた。ココを通れば・・・

『出口』

そんな少女は、いま 一ツの迷いモ、ナイ。こんなにワクワクするのは、

『ふふっ！ さあ！ この扉ヲ開けよう。』

ドアにテをあてた瞬間 少女は、扉に吸い込まれるヨウに ナカに入ッていッて行ッた

ふあ〜

ん！なんだっ！ なにかこっちを見ている！

「グウウウルル！！」

「あゝ誰だ！ こんな真ッ暗な時間に犬の散歩をしているのは・・・

」

ん！クンクン 血の臭いがする。だが、普通 食べるってことをし

ないだろう。人を・・・

「グウウウウガ」

「あぶねっ！」

これはなにごとだ！てか デカくね！！ 暗いからもっと分からないし。

見えた。やっと姿が見えたよ！！ワンチャンよ！

一目見たとき、こいつの大きさは、アフリカゾウ並だったな。いや！あんなのと 一緒じゃいやだもんな！悪い、訂正する。それ以上だったわ！

「くっ」

さっきから思っていたんだが・・・ここで私死ぬんじゃないね！

が 犬もどきの攻撃を軽々と避ける久遠。が その久遠は、だんだんと行き止まりに近づいていることに気がついていなかった。

あっ うそゝ行き止まりか！ とうとう、終焉・エンディングの時間かゝ

「まだ やり残しがいっぱいあるのにな！ ふふ！こんな ピンチな時ってさ！ヒーローが来てくれてゝ目の前敵を何事もなかったように倒してくれて、何もなかったかのように帰って行くって言うのが、私が信じる英雄・ヒーロー - だからな！」

やべえ〜こんなピンチな時に限って、こんな話をしちまうとはね
まっ わたしには、リソナを二回 使ったけど けどあれは 所詮
は想像力を高めるだけ、だけど、わたしはそれを現実に作る事が
出来る。が今は、物より、こっちの者を呼びたいね！

「おお！！来たね！ヒーローちゃん」

「.....」

「お前は、時 久遠だな！」

「は」

「そつだな！」

つて ヒーローちゃんよ。私の返事を待とうよ。

シュツタ

「勝つぞ」

「えっ！」

「勝つぞ 勝って、我々のセカイに来てもらう」

なんだよ それ！高いところからカツコイイ降り方して、最初のことばは、「勝つぞ」って まあ いいか ツツコミたいのは、山々
だけ。今ここで死ぬ訳にはいかないしな！

「いくぞ」

私を助けに来たヒーローは・・・

第三話 「君の名は……(上)」

私を助けに来たヒーローは……

一瞬で 犬もどきを 消滅させた。

「さあ 倒したぞ！僕と一緒にきてもらおうよ！」

「ちょっと待て！誰が一緒に行くか！」

ガツと久遠の腕を掴む少女。掴まれたことに抵抗する久遠だが……
見ている先は少女ではなく、犬もどきが消滅した場所。

だが。少女は、おかしいと言うことに微かにきずいていた。

「なにか。おかしい、まだ、生きている臭いがする。完全に死んでないってことか。」

「ん？」

ドクン、ドクン、

その心臓の脈打つ音が聴こえるのは、そう。犬もどきが消滅した場所。

「あれはなに！完全に倒したんじゃないの？」

「おかしい。ちゃんと 急所を狙ったはずなのに！」

「……………」

「ねえ。答えて！」

だが、少女は黙り込んだまま、俯いている。数秒後、口を開けて話し出す言葉は。

「仕方がない。今の段階で出来ることをしよう。手伝ってくれるかい？」

「わかった。ところで、なにをするの？」

久遠は、不安な眼差しで少女を見つめた。

二人が話合っている中で着々と体の再生が整いはじめている犬もどき。

「グウウウアー」

「時間がない。手短にはな」

バタッ

その瞬間 - とき - わたしにはとつてのヒーローが倒れた。

倒れた少女の元に久遠が向かうと、少女の背中には大きな引っかけ傷があった。けどさつきはなかったし、一体どこから・・・が、今はそんなことより目の前で倒れている少女の手当てが先だ。

「傷は浅いが大量に出血している。何か出血を止める物は・・・」
周りを見渡すが 場所が場所なので、ふさぐ物はなく。ふと、自分の制服を見る

「今は、やるっきゃないか！」

久遠は、自分の改造制服を引きちぎり、背中 of 傷に合わせてるがそれだけでは、ただ制服に血が滲むだけで意味がない

「一体どうすればいいんだ。 傷が癒せれば、」

あっ！！

「その手があつた！ その背中に合わせた、制服を剥がし、久遠は、自分の能力を試してみることができました。」

「落ち着け、集中、集中」

久遠に伝えるように 能力が少女を癒していく・・・が

その時、

ブン！！

「ちっ・・・いいところなのに」

私は、癒している最中の少女を抱え、犬もどきから距離をとる。因みに抱いている体勢は、お姫様抱っこ。女子と少女の絡みだけだね。

ガール

ふふ・・・威嚇か　そんなに怒らせることしました。わたし？どつちかって言うと、こつちじゃない。私が今、必死に癒している少女を見る。

「なによ！　その目。まるで私も悪いみたいじゃない。」

悪いのは、君を八つ裂きにした。この娘でしょ。しかも、こちらを睨んでらっしゃる。

「おわあ！　危ないじゃない！」

なに、その目。気に入らない、ちよくちよく攻撃してくるし、かわいくないし。

「ガアア・・・」

その刹那。再び、犬もどきがこつちに飛び込んで来る。いや、言葉を理解しているのか？かわいくないって言った瞬間、飛び掛かってきたし。今は、それより・・・

「場が悪すぎる。」

久遠は、出来るだけ遠く。なるべく　広いところを目指して走ります。久遠が走りだすにつれ　犬もどきも走りだす。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・これじゃ　鬼ごっこじゃん」

つて・・・相手は、完全に獣じゃん。もうじき　広い所に・・・。

えー、次を右に、そのまま直線、次の角を左つと。

「あれ？」

もし かして 行き止まりってヤツですか？ あはは・・・

「ガウウウウウ」

犬もどきは、相手を追い詰めるかのように、こちらに近づいて来ている。反対側の久遠は、反射みたいなもので 後ろに下がっていく。

トン。

久遠は、壁にぶつかった。つまり、絶体絶命な状態に・・・

「ははは ここで私の終止符 - ピリオド - が打たれるわけか。そして、明日の新聞記事の一面にデビューするわけか！ 嬉しいようで悲しいな。てか、絶対に載りたくないし。」

（あと・・・姉さんは・・・死ぬ前にもう一度、顔見たかったな。）

「ゲウルルル」

よっぼど腹かなんか、減ってるのか？・・・よだれなんか垂らしちゃって、ああ。そうか、私がここで犬もどきに殺されるからか。納得。

「ハアー・・・さつきから話を全て聞いていたが 後の方からいや全体的に 弱音にしか聞こえてこないよ。君の目的は、姉を捜すんだろ。だったら、ここで諦めないで 少しは、女子の意地をみして

やれよ。そして、君の姉がいるセカイに行こう!」

「えっ?」

姉さんがいるセカイ。そんな、そんな、そんな!.....これは.....行くしかない!。

「姉さんがいるセカイに私を連れて行って!!」

「分かったが、まずは 目の前ので.....き.....を」

なんで いきなり! 弱々しく、なるの。

「ねえ どうやって、倒すの」

「ハア.....ハ.....ア」

こちらに、手を伸ばす少女。その弱々しい手は、久遠の胴体を軽くタッチし、小さな声で

『ユニゾンイン』

言葉を吐き、捨てた瞬間。少女は、久遠の腕の中から消える。

「えっ!.....どこいったの?」

『どこだ!』

「だから!.....どこ?」

『君の中だ。』

ええー！！私のなか――

『時間がない。一撃でヤツを仕留める。君なら出来るはずだ。時久遠。』

『分かったけど、武器とかないの？』

『武器ならある。今から君の脳内に映像を送るから、それで武器を構築してほしい。』

『構築つて、なんで君 私の能力をしってるの？』

『説明は、後ですから 早く構築を』

『どうやって、武器をだすの』

『簡単さ。手を前に出す。』

『その後は』

『今 脳内に送られてきた武器をイメージする。その後は、実体があると思つて、そのイメージした物をここに持つてくる。』

「ガアアアア」

久遠と少女は、会話をしている最中に犬もどきは、攻撃をし続けている。が 全て久遠は、かわされている。

「よつとー！」

まだ、かわしし続ける久遠。

「グウウワー」

こちらに爪を立てて、飛び込んでくる 犬もどき。

『今だ』

「よし。はああああ」

武器を瞬時に構築した久遠は、 犬もどきを口からしっばまで、
刀両断。

切り終わった瞬間。犬もどきは、跡形もなく 消えていった。

私からすると消滅したと言った方がいい。

「はあ。終わった」

久遠の口から出たのは、疲れ混じりのため息だった。

『ねえ？さつき 言ってた姉さんがいるセカイってなんなの？ そ
れともう一つ。なんで私のことをしているの？』

『答えは、簡単。まず一つ目の質問』あっちのセカイのクオオンの生
命の危機。』

『あっちのセカイの私が危機？ でも - 』

『最後まで私の話を聞け。危機とはな もうじき死ぬ！ということだ。例の姉さんはそのことについては全く知らない。つまり君を求めめる意味は、あっちのクオンが死んだ時。もう一人の久遠がいればごまかすことができるということだ。』

『じゃあ 私は、あっちのクオンの影武者をしなくちゃいけないってこと。それって つまり、あっちのセカイの姉さんを悲しませたくないがために私は行かなくちゃいけないってわけ！そんなのただのわがままに過ぎないよ。もつと、もつと楽しいセカイかと・・・そんな理由だったら、そのセカイに行くだけ無駄だよ！』

『無駄じゃない。今の君の姉と認識している人は・・・イレギュラーだ』

『えっ？どういうこと。 こっちの姉さんとあっちの姉さんは違わずじゃ。』

『いや。同一人物だ。』

『同一人物！』

『それは、今から二年前の夏のことだ。空から少女が突如、現れて簡単に歴史を変えた。その少女はシオンとみずから名乗り いろいろな闘いに参戦していた有名な人物だ。その少女は優しい心の持ち主でいろいろな人の役にたっては、セカイを飛び回り、みんなに笑顔を与えたりとしているうちに私とクオンもシオンに助けられていた・・・』

『へえー。姉さんってそんなにすごいんだ！！で話の続きは、』

『私は、そこから 記憶がないんだ。ほとんど眠りに入っていたし。』

『そっか。寝てたの・・・ね。』

『すまないつまらない話をして。話を変えよう。さつき君が私に二つ目の質問をしたな。その件について答えよう。「君のことで私のことを・・・」まず 私の能力は 全ての記憶・オール・レコーダー・・・つまり 君達が造ってきた記録が全て載っているということと、そのことについて調べたり、読むことができる。という能力だ』

『全て』

『そう。ここに来る前に一度目を通しておいた。だから君に興味すら湧かないところだが 少し気になっているのがあるのだが・・・』

『気になる？ 何に？』

『君 本当に人かい？』

『えっ！ 人だけど』

『さつきから いろいろ調べているのだが 君の記録がすべて 普通じゃないんだ。』

『普通じゃ・・・ああ・・・ないね』

最初は 自分普通ですからと言っていた。 久遠だが 今までの事

を軽くおさらいしていると・・・自分でもおかしいなと思いの歯切れが悪くなる。

『やっと きずいたんだね。自分がアブノーマルだって。じゃその力を上手く使えるところに行こう』

強引に話を変えたね。まあ・・・いいけど

『それって 姉さんがいるところ・・・わかった。けど 一日だけ時間が欲しい。』

『いくらでも 時間は あげる。君がこっちに来るのなら』

私は、その後 無言で家に帰宅した。

私と会話していた少女は 一言残して 何処かに行ってしまった。つまり 時間が経つまで、何処かで時間を潰すという考えだ。と私は 推理する。

「お帰り。久遠」

目の前で私の帰りを待っていたのは イーターだ。

「うん。ただいま あれ 今日やけに静かだな 父さんと母さんは？」

「ふたりでデートするって 母さんがおめかしして張り切って出て行ったけど。」

ああ デートね。まだ 若いね 困ったな、姉さんのことについて
話し合いたかったのに

「久遠！久遠！」

「えっ！」

また やっちゃったよ。考え過ぎると いつもこれだ。イーターが
こつち見て悲しい顔をしているし。心配を取り除かないと・・・

「久」「イー」

二人は 話しかけようとしたところ 同時に発音をしてしまう

「ところでさ！なんで そんなに制服がボロボロなわけ？」

久遠が気にしているところに突いてくるイーターの言葉。でも 久
遠はそんなことを聞かれるも計算済み。そして久遠はこう言った。

「ふふ 大人の付き合いってヤツさ」

「なんだよ！！大人の付き合いって 待ってるこつちの身も 考え
るよ。バカノノ」

久遠には 考えるよのところまでは 聞こえていたが その後の言
葉は 耳に届いていなかった。久遠は その最後の言葉が聞こえな
かったので イーターに再度確かめようとする。

「イーター。最後なんて言ったの」

「なんでもねーよ。早く飯食って寝ろ。」

「はいはい。ところでめー」

「台所！」

なんで そんなに怒ってるんだ？ カルシウム不足かなんかか？

「まあ とにかく食べよう。いったきます」

うまい

「なんだよ。久遠のヤツ 私が一人で淋しい思いをしてる時に居なくて 帰ってきたと思えば いろいろポロポロだし。でも なんかほっとけない感じが 私を禁断の道へと歩かせるとは。ね／＼」

(今の久遠・・・何処かに行っちゃいそうな気がする)

そのイーターの感は、ほぼ正解だった。

「ふう うまかった。さあ寝るかな。ここを出ていくのは 明日話せばいいし。」

今は・・・いや 明日をおもいつきし 楽しまないと！

「さあ 寝よう 寝よう！ー！」

ガチャ

自分の部屋のドアを開けた久遠の目に映った物は・・・

第四話 「君の名は……」(下)

「さあ 寝よう 寝よう!」

ガチャ

自分の部屋のドアを開けた久遠の目に映った物は……

「やあ!お帰り 久遠。」

「うわあ!」

「どうして そんなに驚くのかい?それと 『久遠の目に映った物は』の『物』はこつちじゃなくこつちの『者』ではないか?

「ご丁寧にものの解説まで ありがとうございます。って……褒めてる場合じゃなくて

「なんで ここにいるの?と、そろそろ名前を教えてほしいんだけど」

「何故 ここにいるかって? まず二つの条件が成り立ったからだ。」

「一つ……身体の傷が癒えたから 君の身体から抜け出しここに居る。」

「二つ……君がこちらのセカイに来るといふ答えが出たから 時間まで君を観察 監視をし いつでも行けるように 傍に居る。」

ということだ

「ああ それと自己紹介がまだだったね。私の名は ニパだ」

ニパ ね！変わった名前だけど なんか かわいいな 「にぱー」
ってという意味だったりして。ふふ・・

「その通りだ。私の名前の生みの親は クオンだからな。もし君も
その立場だったら、同じ名前を私につけるハズだろう」

えっ？なんで わかったんだらう？。不思議・・・

「ねえ さっき ニパが答えてくれた成立した条件の件だけど そ
の・・・あの・・・監視と観察ってなに・・・する・・・の／／／
／」

久遠は 照れた表情で観察と監視について ニパに質問してみるこ
とに・・・

「監視と観察と言っても、やらしいことをしないから 大丈夫だ。」

「それなら いいんだけど／／／」

目をそらして 返事を返す。

ふうん 面白いな。時 久遠は・・・

「ん？」

(この気配は・・・さっきので、終わりじゃなかったのか?)

「久遠。さつきと違うヤツが現れた。今から始末しに行くがお前もついて来い。」

「えっ さつき倒したので終わりってわけじゃないの？」

（私には 分からないけど。）

「行くぞ」

久遠の答えを聞かずに 久遠の身体に入る ニパ

『えっ また』

『文句を 言うな！時間がない。場所は私が誘導する。と・・・聞き忘れていたが 君は 免許を持っているか？』

『免許 バイクとかのヤツ ないけど どうして。』

『場所が場所なんだ！早く済ませたいから』

ニパには 焦りと心配の両方を軽く 心の片隅宿していた。

『乗れないけど・・・操作とかするのは 可能だよ マニュアルとか好きだし。』

（ああ！ そうか。私には、物を作る力がある。それで乗り物を作れば・・・イケる。けど そんな資料は・・・）

『資料なら 既に君の中にある。なんせ こんなことがあると思っ

て 記憶の中に忍ばせておいた。』

『さっすが 私にこんなサービスまで してくれるとは』

『さあ 外に行くぞ。』

感心している 久遠のことを無視しさっさと外に向かえと脳内に命令してくるニパ。

(ああ・・・ちよつ、ああ イーターに一言言わないと・・・)

慌てて イーターのところに行こうとするが ニパに腕を引っ張られ(身体の中で) 行くことが出来ない久遠。

せめて 一言。

「イーター。緊急の用が出来ちゃったから 行くね 帰りは 何時になるか分からないから なるべく早く寝るんだよ。」

・・・シーン

返事がない。ああ、悲しい。起きてるなら せめて返事がほしいな。まっ 寝てるんだろうね。 おやすみ。

イーターに 挨拶を済ませ 久遠は 外に既に玄関を出て 門口の前にいる。既にニパは、久遠の中に入っている状態。

『さあ イメージしろ。』

『わかってる。』

久遠は 構築を開始。二回目なのか 今回は スムーズにことが進んでいる。

『よし 出来た。場所は？』

と。その前に今回久遠が作り出したものは、バイク。形態からするとよく特撮のヒーローが乗るようなバイクをモデルに作られている。

(うわー。こんなの作ったことないからかなり嬉しいな。)

えっ？私、鍵まで作ったっけ？

久遠の手には、作っていないハズの鍵を握っていた。

そんなことを考えていた久遠に、二パは・

『物事を考えるな。私が誘導する。ただ 久遠はハンドルを握っていればいい。』

久遠は 返事もなしに バイクにまたがり、そして キーを挿し。エンジンをかけ、ふかしはじめる。そして、忘れてはいけないのがヘルメットを被ること。

ブウウン・・・

『いつでも いいよ』

『では 言ってくれ』

了解。と心の中で返事をし バイクを走らせる。

ブロロロ・・・

「久遠のヤツ 免許もってたっけな？ まあ いいか 事故に遭わなければ いいし。」

心配な イーターは久遠が何処かに行く。というところから ずっと様子を見ていた。が その見守るといふ仕事を終わらせたイーターは ベットに潜り 眠りについた。

すうー

キイイイ

『じじじ？』

『そつだ。』

『けど ニパの言っているのは 見当たらない。』

久遠は 周りを見渡すが辺りが 真っ暗のため何も見えない。

『！』

その時 ニパは 何かの殺気を感じた。

『久遠。上だ！』

『おわあ。なにこれ！さつきと全然違う。おもいっきし人だよね？』

久遠とニパが見ているものは 人型の未生物・アンノウン・だけど……

『あれ どうやって 倒せば……』

『何か様子を変だ。何するか分からないから 用心して 戦え。』

『分かった。』

久遠は 武器を構築し その場で静止する。

人型の未生物は動く気配がないと 油断した刹那 相手が 消え再び確認していた時には

『はは 危なかった あと一、二秒 遅かったら、どうなってたことかな。』

ちゃんと 武器でガードをしていたが、久遠はかなり 後側に下がっていた。

「ふふ……ククク よう！ 元気してるか！ ニパ。」

「えっ！ニパを知ってる。」

『私の名前を知っているだと！』

ニパは 自分の名前を知っている人型の未生物を見るが 周りが暗

いということもあり よく見えない。

「ひどいな 忘れたの？ ほら、俺だよ！」

その人型の未生物は こちらに向かって歩いてくる。そこにちょうど街灯があり、人型の未生物の顔が光りに照らされて 正体を現す。

「『お前か！』」

ニパは 久遠の口を使い 人型の未生物の正体に驚き 名前をこぼす。

「『アルキメデス』」

「正解」 そりゃ。忘れられちゃあ・・・って、忘れるはずないよな。なんせ 君をこの世界に導いたんだから。」

「『貴様は！』」

ニパは アルキメデスの言葉に反応をして 攻撃にかかる。そんなことを知りつつ アルキメデスはこのような行動をとった。

ブスッ！！

「・・・くっ」

ニパは、アルキメデスを刺した。が、アルキメデスの表情は、苦しそうと言つより、むしろ楽しんでいる様子。

「ふふ・・・強くなった？ニパちゃん。」

「貴様が たるんでいるだけだ。」

「おしいな!!」

ブシヤツ・・・

その時 久遠・ニパはアルキメデスにダメージを与えたつもりだったが、むしろ逆で 攻撃を受けたのは、久遠・ニパの方。

「『くつ。忘れてた 奴には・・・』」

「これ以上、しゃべらない方がいいよ!」

ブシヤ・・・ブシヤ・・・

久遠・ニパの身体に無数に切り傷ができる。

「『うわああああ』」

「これ ちなみに、口止めって奴ね!」

久遠は 何度も声に鳴らない声をこぼすものの アルキメデスには届くことはない。だが ニパには 痛い程 その声が伝わってくる。

『ニパ。どうにかして此処から・・・』

「そつは させないよ」

「『くつ』」

久遠・ニパは その場から逃げだそうとするが。アルキメデスには おみとおし見たいで その場から出ることはできない。

そんな時 ふと。久遠は こんなことを思い付く。

（あつちのセカイに 行くしかこの場をしのげない。むしろ この手しか。）

『久遠。こつから 抜け出すぞ。抜け出し方は……』

「なにか。企んでる。けど、その身体じゃ……」

久遠の身体は、傷だらけで立って意識を保つのが精一杯。だが……

『分かった。出来るだけやってみるよ。』

久遠は 今の自分に賭けて見ることに。

バン、バン、バン……

その頃、久遠は ボロボロの身体に無理矢理、言っことを聞かせ 必死で逃げている。

『久遠。そこを左だ。』

『了解』

「もっと 楽しもうよ。」

アルキメデスは楽しそうに 久遠の走っているルートに向かって攻撃をしている。が、狙っている場所が 上より下を中心にしていく。まるで それは、アルキメデスの掌で 遊ばれているという感じだ。

『久遠！今だ！！ 地面を殴れ！』

『分かった。はああああ』

(ネットワーク接続。)

久遠が地面に向かって拳を叩きつけた瞬間。巨大な魔法陣が発生する。

(ネットワーク接続 完了。目的地は……)

「なに！ これは予想外 おもしろいね。でも 今回逃がすけどこんなプレゼントを君にあげよう。」

クスクスつと笑う アルキメデスは 魔法陣の中心にいる久遠に向かって 呟く。

「ロック」「反転・リバーサル」

アルキメデスは 呟き終わると 久遠の目の前から姿を消す。

と その数秒後に久遠・ニパも 現在地から姿を消し。もう一つの

セカイへと向かう・・・

その時から 私には記憶がほとんど残っていない。

ガン、ガンガガン

少女等が武器を交じりあわせているなか 上空から 一人の人間が
落下してくる。

「うん。あれは？」

「えっ。あれって・・・」

二人の少女は 目をこらして空を落下している物を見る。

「人だ!!!」

二人は声を八もらせる。その時、一人は、人の確保のために。一人は、仲間に連絡といった 行動をとる。

「クオンさん。上空から人がこ、こ、こちらの艦に、に向かってえ
ーと・・・きて、ていますです。」

「まずは、落ち着け！二人で訓練をしているんだよな。お前たちは、
訓練に集中しろ。こちらに落ちて来ている物体は 私にまかせろ。」

それと、パニックっていて上手く言葉になっていないぞ。」

そう言った。クオンと名乗る女性は、余裕の表情でデスクに向かい。カタカタつと、目にも見えない速さで、システムを組み込んでいく。

「穴を空けられても困るしな。こんなのでいいか。」

カチツと決定のボタンを押したクオンは、一息つく。この作業終了するまでわずか0.3秒。

ボタンを押して数秒後、巨大な魔法陣が展開し、巨大なクッションを構築する。そして・・・ドーンつと音を立てて、人が着地する。

だが・・・こちらに現れたのは、男子。少女ではない。

その様子をモニターですつと見ていたクオンがいた。

「あれは、調べた限りの情報からすると。もう一人の久遠というわけだが、どうして。女ではなく男なんだ？」

その後、構築されたクッションは、役目を果たしたかのようにその場から消滅、少年は、艦の真ん中で、倒れている。が、突然、少年の体が輝き、中から女の子が出てくる。

「あれは、・・・」

久遠は、モニターから離れ、倒れた少年の所に向かう。ところが、目的地に向かっている時。さつき久遠の中から出てきた娘に会う。

「この子を頼・・・ん・・・だ」

その言葉をクオンに告げた瞬間にニパもダウン

「おい。すっかりしろ！うん？ どうかで見たような。」

(この癖のある髪の毛で、なおかつ よく女の子と間違えられるよ
うなこの肌の白さ。そして、女装をさせると、以下にも女子です。
みたいな感じをだすようなパワーのある体とその性格。普段は、本
なんか読んで、クール感を出しているのにいざ、女装となるとおど
おどする仕草がファンには、堪らないサービスカット。それに、う
ちの姉さんがこれを見たらな〜どうなるものか。やっぱり人違いか
な、でもな〜私の知っている奴にそっくりなんだけどな・・・)

「ううん・・・僕だ ニパだ」

「あれ。さっき私の目の前で倒れたのにもう復活したの?」

「君が変な事を言い続けるから、僕は それに反応して 休むこと
が出来ないんだよ。」

「おお〜それは よかった。じゃ 倒れているいる、その子 運ぶ
の手伝って!」

クオンは ほぼひん死に近いニパに命令を下す。

「僕も 結構危ないんだけど・・・」

「今は お前より客人が優先だ!!」

でも・・・あつやばい、バタツ。ニパも完全に墮ちた。

「全く。二人して、夢の中かよ〜」

プシュツ。医療室の自動ドアが開く。

「姉さん。緊急だよ〜」

「はい。ちょっと、待ってね。クオンちゃん」

クオンが緊急と言っているのに、対しちょっと楽しそうにこちらに向かっているきた女性の名前は、シオン。説明するとクオンのお姉さんでもあり、久遠の姉に値する人。

「あらっ！見ない顔ね〜どちらさま？」

「片方が ニパ。もう片方が空から落ちてきた子です。」

「あー。通りで外がうるさいと思ったわけだ〜」

この会話からすると とても天然に思えますけど 実はその逆でしつかり者なのです。えっ！嘘だ〜と思ったたその君！実はシオンは、天然を演じているのです。これ！本当！！

「けど、どうしてニパ 女装してるんだろ。」

「姉さん。そんな真面目な顔をして そんなこと言わないでくださいよ。」

「だって〜気になるんだもん〜 これ どこで、作られたもののかな。あっ！これ、かわいい〜この・・・」

以下省略。こういうのを見るといつもこれだ。一つ気になると 周りが見えなくなるから、私曰くこの衝動を「カワイイモード」と名付けた。いや、この名前を考えるのに 結構時間をかけたもんだ。うん？久遠のほう 顔色わるいな。って・・・

「姉さん！早く手当てを・・・」

「あらあら！ちょっと苦しそう。」

（こんな時にあなたは。）

なんて心の中で 思っていたクオンがいた。

「はい。終了」

シオンは ちょいちょいと、久遠が怪我している箇所の手当てを終わらせていた。が 今回久遠が怪我した場所が悪かったためか クオンにはミイラに見えた。シオンはカワイイ と言っていた。

そんなことも知らず。私は 深い眠りについていた。

そして 数日後 -

私は 目を覚ました。私の視界に入ったのは、白い天井だった。

第五話 「はじめまして 七夜です」

「起きなさい。」

天使のような透き通った声が私を呼んでいる。その声はまるで、行方の知らない姉さんの声かのように聞こえた。その後、声は、しだいに聞こえなくなり私は。

「ううん……」

私が 目を覚ますと見たことのない 白い天井が視界に入る。が、それより気になったのは……

「じじい……どじい……?」

誰もが知らないところに行けば、言うであろう言葉を私は 混乱しながらいつてしまう。そんな時 誰かが部屋に入ってる。

「よう。体の調子は どうだ。」

入ってきた人は 女性で私目線で語ると第一印象は しっかりしたお姉さんって感じ。と 数秒私が見て分かったこと……とてもスタイルがいい。髪型といい（ショートカット）。全てが整っている。もし、自分が男の子だったら絶対に惚れてただろうな。この人、なにかモデルとかやっているのかな?と、いろいろ考えていると……

「私の言っていることが聞こえなかったか?」

『時 久遠!』

えっ！なんでわたしの名前をしってるの！

「なんだ。その顔は？ああ。自分の名前を知っていることに驚いているんだな。なら説明しよう。」

「私の名は クオン。な。」

「えっ！ちよつとまって 貴女が私を？」

あれ？私こんなに声 低かったっけ？

「ああ。そうだ！鏡を見るか。」

そう言って、クオンは手鏡を内ポケットから取り出し 久遠の顔に鏡を合わせる。

その時 私は・・・

「あれ。どちらさま？」

と、自分の顔に向かって質問をしてしまう。 あっ 自分か。 って、自分にツッコミをしてしまうなんて、ああ 悲しいなあ

「これ 私ですよね？」

「お前 以外に誰がいる」
ごもつとも。けど 鏡ごしに映る私は どこか可愛く見えた。 男の子なのに・・・

「そこで隠れて見てないで　こちらに来て下さい。姉さん」

ああ、どおりで、さっきから変な視線を感じていたんだわけだ。プシユ・と自動ドアが開き、一人の女性が姿を現す。

「いいじゃない　クオンちゃん。こつやつてこつそり見る感じがおもしろいんじゃない」

「プシユ・プシユ」

「はあ・・・姉さん。」

「姉さん！」

私は　驚きのあまり　つい『姉さん』と叫んでしまった。

「あれ？どなた？」

「姉さん。昨日空から落ちてきた子ですよ。」

状況が全く分かっていないシオンにクオンは耳打ちをする。おお〜　つとりアクションするような仕草をとるシオン。だが久遠からすれば、何をやっているのでしょうかの話。

「ね〜え〜体の怪我はもう平気？」

「怪我？」

「包帯巻いてあるでしょ〜。」

あつ！ホントだ。けど、痛みがない。

「それは、そうだ。お前は何日間寝ていたと想像がつく。」

「えっ……と」

部屋全体が沈黙に包まれる。数秒間、考えていた 久遠の口から出た 言葉とは……

「一週間！」

「ほう。どうしてそのような答えにたどり着いた。」

「簡単です。まず、このセカイに来る前に自分の体の状態を知っていたのと、こっちのセカイに着いた途端に倒れるなんて想像の内。と流石に精神的の問題もあると思ったので一週間って、答えになりました。」

「ほう。」「おお。」

「いい発想だ。が、残念不正解。答えは、一日。」

「えっ！！」

絶句した。いやでも……体の傷も精神も一日では無理なはず。

「無理とか 考えているだろう。だが 姉さんなら可能だ。」

「じゃあ！私が説明するね 私の能力は 『癒し』 なんだ」

「ピョピョピョ」

「癒ってあの癒しですか？病気・傷などをなおしたり、心の悩みや不安を解消する。あれですか。」

「うん そうだよ。いや君の傷 なかなか治すの難しかったんだよ。まあ 簡単に言っちゃうと私からすれば あの傷なんかレベル1みたいなもんだけど。」

シオンさんって 難しかったり、簡単だったり、いろいろ話変わるような・・・それと『ピョピョピョ』って、耳的なものがさっきから目に入るのでしょ

「えっ・・・あっ・・・と」

「うん？なんだ。」

「お二人の事をなんと呼べば・・・」

「ああ。私はクオンでいい。」

「私は、シオンでいいよ 君は？」

「私は久。」

「ここでは七夜と語れ」

クオンは私に耳打ちをする。『ななや』 どこかで聞いたような。

「私は七夜です」

「変わった名前ね」

「はは、よく言われます」

この名前付けたのシオンさん！あなたの隣にいる人ですよ！ なーんていくら思ってもいいませんよ。えっ！クオンさんなんで睨むんですか！

「質問は、ほかにあるか？」

（そうだな）。あれ、ニパがない。よしそのことについて聞いてみよう）

「ニパは何処に？」

「横見たら」

はいはい。キヨロキヨロ あっ！ きずかなかった！寝てたのね。

「ああ・・・」

「まあ気にするな、知らないところにいれば周りが見えなくなる。よくあることだ」

ぎゅるるる〜

安心した私のお腹は、悲鳴をあげた。

「あつ／＼／」

「あら〜」

「腹が減ったのか。ふう。ついて来い、飯ぐらいは食わせてやる。」

「よかったね」

なんとか腹の中に物を入れられそう。

すたすた、クオンは歩いて行く。こっちの久遠はまだベッドの上。慌てて履くものを探すが見つからない。

「靴は右側にあるはずだ」

この声の元はニパだがその本人は目を閉じたまま。

「あつ！ホントだ！！ありがとうニパ。じゃあ行ってくるね」

慌てて靴を履いた久遠は部屋から飛び出しクオン達を追いかける。

はあ、はあ、はあ

「あら！どうしたの？そんなに息を上がらせて。」

「部屋から飛ばしてきたんで」

久遠が息を整えている間に目的地に着いていた。

「着いたぞ。」

クオンさんは着いたと同時に私に姉さんと一緒に適当な席に座っておけと告げ、注文をしにカウンターに向かう。

その間、私は、と言うと いろんな人に見られればなしかった。どうもこの中では私は珍しい動物という目で見られている。一つ疑問に思ったのは、見られているのがみんな顔と容姿が似ているということ。

「あのシオンさん、此処って、なんなんですか？」

「うーん。感単に説明すると組織って思ってくれとわかるかな。」

「へえ。そうなんですか。それとさつきから同じのばかり見るのですがあれは？」

「つい私は、気になりシオンさんに尋ねることに。私の目には、機械人形・オートマタ・にしか・・・」

「あれは クオンちゃんが作った子達なの。」

「作った、ですか？」

「あの子は ほとんど作ったの。この戦艦・子・もみんな！」

この会話のシオンさんは ものすごく楽しそうに喋っていて、ホントにクオンさんのことを大切に思ってるんだ。というかこういうのを多分『お母さん』って言うんじゃないのかな？

「あー。なーくん 今、お母さんみたいと思ったでしょう。」

「なっ、なっ、なーくんですか」

じゃなくて、話しを元に

「待たせたな！」

クオンがお盆に乗せた料理を私の前に置く。

「わあ〜どれも美味しそうだな〜。じゃあこれから、あっ！いただきます。」

私の体は食べ物を見た瞬間 自然的にかぶりついていた。

「よっぼど、腹が減っていたんだな。」

「いい食べっぶりだね〜男の子はこうでなくちゃね〜」

だってこんなに旨いもの食べたの初めてだもん。あつ。今 私が食べているのは 焼き魚定食かと。実際クオンさんに聞きたいけど『わかるだろ』という目つきをされているので聞くこと不可。

「七夜。後でお前の身体能力を調べさせてもらう方がいいか？」

ちょうど私が完食したところにクオンさんから質問がとんでくる。

「いいですけど・・・」

「そうか。では、30分後にここに来い。」

クオンさんからメモと地図を渡された。

「ここは広いから気をつける。」

「あつ。はい」

私に伝える事を伝えたクオンさんは、この場から消える。それについて行くようにシオンさんもいなくなる。

（私も部屋で一休みしようかな。ああ そうだここでは、私じゃなくて僕の方がいいな。傷の方は治っているみたいだから、包帯をはずしておこう。）

「準備は いいか。」

「大丈夫です。」

「検査は今から一分後だ周りをよく見ておけ。」

周りを見ろって！ここ空ですよ。私こと時 久遠（ここでは、七夜 なんだけど）は 今ちよつとした 身体検査を行う訳なんです。これがどっから見ても普通じゃないんじゃないんです。それに関して三つ話します（私のリアクション談）

一つ：身体検査とって なぜに上空？

二つ：検査内容が試合形式。ライフを先に無くした方が勝ちという有りがちなルール。（ちなみに私のポジションはGW・ガード・ウイングという難しいところに・・・クオンさんがしました。Lifeは2800）

三つ：私達は 今宙に浮いていられるのは デバイスという便利な武器があり、専用のバリアジャケットを着ているからなのか？と、そして 初めての試合で 対戦相手が誰なのか分からないのが なかなかスリルを感じさせる。

「準備はいいか？」

「はい。」

で、今私が装備している のは、クオンさんの昔からの愛機『リリーヤ・ミステリオン』 そのモデルは『騎士』と『和』を組み合わせたイメージとクオンさんが言っていたのだけど、僕のは 騎士や和の要素が一つもない。強いて言えば『鎧』『洋』。武器のほうも『ブレード』と説明があったとは言え、私の場合は『ランス』が出てきた。説明と違うという意味もあり、クオンさんに質問を試みた結果。

「それは お前のイメージだ」

という答えが返ってきた。

「七夜。そろそろ時間だ」

「了解。」

僕の返事から3秒後、クオンさんは

『はじめ!!--』

えっ。でも 相手が・・・

ブツブツ・・・。。上空からビームのシャワーが雨のように降ってくる。辛うじて七夜は ビームの雨を避けているが そのビームは どこから放たれているかわからない。

『ねえ クオンちゃん。なーくんが そっちに逃げ込むと思うから シールドの準備したほうがいいんじゃないかな。たぶん 戦艦 無くなると思うよ。』

『はあ・・・姉さん。』

『どうしたの?クオンちゃん。』

「!」 「お〜」

モニターを見ていたクオンと直接 現場を見ていたシオンは 意外な声をあげる。

「はっ、はっ、」

七夜は 降ってきている ビームをデバイス(リーリヤ)で 次々と切り裂きつつ前に進んでいく。だが 斬っているとは言え 完全に全てはらっている訳ではない。少しの被弾は もちろんある。普通のダメージなら100やら150ぐらいのはず・・・なんだけども どうも一段つけたただけで軽く867〜1000ダメージはいつている。

「このままじゃ 流石にまずい。」

そついい 七夜はビームのシャワーから退避する。が そのビームは 七夜を追いかけ追い詰める。

ビームつてついて来るものだっけ!! いやいや それは無いはず・
・ だけど ついて来てるし、

『ふふ・・なくんの動きって なかなかいいね! そう 思わない?
クオンちゃん』

『ああ。確かに 初めてとは 思えないな。』

『じゃあ 拡散弾・スプラッシュ・から貫通砲・バスター・に変えようかな。多分一撃だと思っけど。当たればっね!』

(さあ どう動く七夜。)

(攻撃が 止んだ。 ってことは 次の何かがあるはず。)

バアアアアアーン。第二破の始まりを告げる 一撃が蒼空から放たれる。

七夜はひょいとビームをかわし 相手との距離を縮めようと試みるが 何かおかしい! 七夜の予感 的中した。かわりしたビームが下に落ちることなく クイッと曲がり 七夜の元に上昇していく。それは まるでブーメランのように。

「このタイプか!」

七夜は 呆れた声でビームの種類を呟きたいが 今は そのような暇はない。相手との距離を縮めるどころか 逆に遠ざかっている。こうなったら、やるだけやってみよう。せめて対戦相手の顔ぐらいいは 見ておきたいし。と言った瞬間に七夜は 自分は 急上昇する体勢に・・・ その時 ビームも共にこちらに向かってきている。ビームがぶつかる寸前に上昇する七夜。辛うじて当たることは無かったとは 言え 七夜の横顔を閃光が照らした。

「はああああ」

上空に登場し辺りを見ると一人の女性が待っていた。

「にやっほー！！よくここまで来たね！！正直 最初で 終わると私とクオンちゃんは思ってたけど。」

その女性は 『シオン』さんだった。

「すみません。想像どおりじゃなくて、本心を言ってしまうと この勝負、僕がもらいました。」

「その前にこれ どうにかしたら」

指を指したのは ビーム。 今までの会話中 ほとんど必死に避けていた。しゃべりながら 動くって難しい。流石 シオンさん 戦闘中にニコニコしてる そんな笑顔が眩しい。ここから見ると女神か天使にしか見えない。けど 神に見えようが おかしいのは手に持っているもの。それは ロングバレルのバスターライフル。それをニコニコしながら撃つってのが・・・。そして こちらに銃口を向けて微笑んでいる。

「バーン!!」

発砲した。さつきと同じ曲がるビーム。一発目で 危険な予感がしていたのにそれが二発目って。

「くっ・・・挟まれた。」

「おーわり」

七夜は ビームに挟まれシールドを張る体勢を したが。

「シールドが張れない。」

ドカアアアッ!!

その時 私は 試合に負けた。と思っていた・・・

(Ruin・Mode)

「はああああ」

爆発のあつた中から 違う姿に なった七夜が シオン目掛けて 飛んでくる。

『えっ!なにこれ。クオンちゃん!見たことないフォームだけど』

『なんだ。あの姿は 私の知らない フォームになるだと。あの腕 はいい』

予想外の事態にクオンは ブザーを鳴らす。

「えっ!」「危なかつた」

急なブザーに驚く七夜は 自分のライフを確認するがライフは、ゼ口になってない。なんで だろ? 隣にいた シオンさんは待つてましたよ。と聞いたそうな表情をしていた。結果は 僕の負けで幕を閉じた。

「二人とも 帰ってこい」

「お前 何故あの様な姿になつた」

戦艦に入るとともに僕は クオンさんの質問を問われる。

「えっ!なんででしょうか。こう 頭で イメージしたら換わつたというか、声が 聞こえたんです。」

「こえ?」「こえ」

たまたまそこに シオンさんも現れ 質問攻めが 始まるだろう。(シオンさんだけの)と 思ったのだが、

「疲れたから 休むね」

質問することなく あっさりその場から 姿を消す シオンさん。

「声か。」

眩くクオンに ハテナ顔をする七夜。

「そつだ。七夜 お前。私達の団体に 入らないか？」

質問は 唐突だった・・・

第六話 「ここと言う、僕は何者？」

唐突の質問だった。

「えっと・・・その答え 今すぐじゃないと ダメですか？」

僕には 少し戸惑いが あった。ここにいれば 姉さんといれるが
今みたいな 試合・戦い・に 巻き込まれる可能性が 高い。か
と言って ここから離れたとして どこで 生活するか。か

「少し 時間貰えますか。」

「構わない。答えが出た時に返事を聞かせてくれればいい。それと、
リーリヤ（デバイス）はしばらくお前が持っている。いつ何が、あ
るかわからないからな。」

クオンは 七夜に背を向けて歩きだす。 僕も体を休めよう。なん
だか急に疲れてきた。そういい、七夜は 自分の部屋に向かう。

プシューッ。このドアの開く音好きだな。なんか カッコイイし。
って 何言ってるんだか 僕。

「お帰りなさい。ご主人様。」

部屋に入ると アルトボイスが僕の耳に入る。そしてこちらに向か
ってくる。

「誰、君達？」

「私ですよ！」

「ティーン!!!」「フォルテ!!!」

いや。誰！

「忘れたの。貴方を助けた 張本人なのに。」

やばい。泣きそう。えーと こういう時には

「ありがとう。僕を助けてくれて。」

お礼 言っといいたほうがいいよね。けど この娘達のことには わか
らない。な まずは、情報とどこかに座らせないと。立ち話は、あ
んまりしたくないし。そういつて二人をベットのの上に座らせて、自
分は、近くにある椅子に腰を下ろし二人に声を掛ける。

「もう一つ 質問していいかな。二人に」

「「ふえっ」「」

二人は 半泣き状態で 七夜の質問に少し驚き気味。返事もちゃん
と なってないくらいに。けど コクリと縦に 振ってくれた。

「じゃあ 質問するね。誰のお願いで 僕のお世話をしてって 言
われたの？」

「「艦長!!!」「」

息ピッタリ、というか ハモったのかな。 あっ 泣き止んでる。

「艦長つて どっち？クオン、シオン」

「「シオン！！」」

また。ハモった！すごい！！

「シオンさんに。ね それっていつ頃に言われたの？」

「たしか ご主人様と 試合中に・・・」

「試合中に！！」

「え、えっと」

つい 反応してしまった。ああ また泣きそう。

「ごめんね。驚かせちゃって。続き 話してくれるかな」

「は・・・はい。内容は」

ティーンちゃん、フォルテちゃん。試合見てる？ 見たほうが
いよ！ 面白いよ！ 何たって！ 対戦相手が 『空から降ってきた
美少年』だよ！ 艦：うちの中じゃ 一位と二位を競うくらいの
顔立ちだよ。1番は 断然クオンちゃんだけだね！ なんて 前置
きは このくらいにしといて 本題いくね 今日から『空から降
ってきた美少年』のお世話係を命じます あっ 艦長命令ねっ

もし 命令を拒否した場合 貴女達には 恥ずかしい格好を
してもらいます。いいですね！ じゃあ 艦長 『空から降ってき
た美少年』に一泡ふかしてくるから

「とうわけなのです。」

すごい内容！ツツコミ処がいっぱいだ

「そのメールを読み上げた時には 試合が終わってました。」

ガクツ（体が前にコケた音 または リアクションでも可）

「「けど 一目惚れしました。」」

また ハモった。すごいなやっぱり、姉妹か何かかな。

「ご主人様のことを知りたいので 自己紹介お願いします。お世話係として」

聞く前に 僕の自己紹介が 先きか。

「僕の名前は 七夜 よろしくね 二人とも」

「ご主人様 まだ終わってませんけど！」

えっ。これ以上知りたいことあるの。二人とも！ティーンの中
からメモ帳が出てくる。最初は、知りたいことがいっぱいあるから
メモを録るのかと思っていただけ、どうやら違うらしい。たまたま
ノートの表紙が見えてしまった、そこには、こう書いてあった。『
私の嫁の理想卿』と。苦笑いしかできない。ティーンは、本のペー
ジをめくりめくり僕に質問をしてくる。

「好きなもの 趣味 理想の女性のタイプ・・・ect それと
スリーサイズ」

最後のスリーサイズって なんか 引つ掛かるな。まるで ここに
来る前の事を知ってるみたいなの……

「ねっ。ティーンちゃん スリーサイズをどうして 知りたいの
僕みたいな男の子の体の事を聞いても 面白くないと 思うんだけど。」

ティーンなら 諦めてくれるよね。と 心の中で 自分なりの結論
をだしていたのと違う答えが彼女の口から出た。

「ご主人様。貴方が 女性だった頃のを聞きたいのですが、何か問
題でも、ああ 自分の口から言いたくないのなら 吐かせるまでで
すが！」

えっ ちょっとさっきと 性格違うくない！ なんか すごく冷たい

「もおーティーン！ 好きな者ができるといつもこれだよ。直し
てって いつも 言ってるじゃん。直さないなら もう ティーン
と 遊ばない。主・あるじ・すみません。」

「ゴメンなさい。フォルテ 出来るだけ直す努力は するから。も
う 遊ばないって言わないですよ。」

フォルテの『もう遊ばない』って すごいな！ 一撃で ティーン
を怯ませた。というか、注意かな？

「ああ 気にしてないから、そんな 泣きそうな 目をしないで
見てるこっちまで 悲しくなるから。ね！」

「／／／」

フォルテの頭を撫でる。照れてる可愛い。の一言。

「ねえ 二人の事が知りたいな」二人の主人として」

ティーンの真似をしてみた。二人の答えは・・・

「ひ・み・つ」

ご主人！ 自分で見つけて下さい。と最後に一言 言われた。探せと言つても、ね。まあ こんな感じかな

ティーン：見た第一印象は お嬢様。腰ぐらいまで伸びたクリーム色の髪は整っていて 左側の髪を結つてある赤いリボンがポイント。（確かこれをサイドポニーと言うらしいのだけど）服は 洋を中心に 作られていて 色んなところに作つた人の思いが伝わってくる。例えば このジャケット。見た目は 暑そうに見えるのだけど、物凄く通気性がいい、生地にこだわりがある。それと 着痩せするような設計で出来ている。下の方は ロングスカートとベルトにまた作つた人のこだわりがあり、とてもかわいい。

フォルテ：一言、言わせてもらえと、どこのおとんば娘を連れて来たの？と言いたくなるような容姿。気を取り直して 服から、見た目は 洋と和を混ぜた感じ 右手の方が『洋』で、左手の方が『和』つていう感じかな 真ん中が洋と和の良いところを混ぜたのを使つていて、とてもかわいく出来ているのが 解る。肩ぐらいに伸びた髪は 束ねてあつて、なおかつ 頭に付いているのが 犬耳。これがまた 犬好きな方には たまらん装備。下の方は ショートパンツで 模様が描かれている。右足がニーソで 左足がソックスの非

対象の感じが また心をくすぐる。犬耳と共にある忘れては いけない物が 犬しっぽ！！。これがあつて 獣人が完成する。やつぱ、かわいいな。

と 二人の服とスタイルの思った事を 言っただけで 二人は ウルウルしていた。 なんか まずい事を 言ったかな？その刹那・

「主」 「ご主人様」

二人が 飛びついてきた。なぜだろうか。こちらに向かってきているのに。僕には スローモーションに見えた。もちろん 自分も ゆっくりだけど・・・

「ううああ」

「ご主人様！！」「主！！」

二人は 僕の体に抱き着いている。色んなものが 当たっている。まあ 女子どおしだから・・・と 言いたいのだが ここでは 私ではなく 僕だということを 軽く いや！ 完全に忘れていた。いや～お恥ずかしいノノノ っ て 言ってる場合じゃなくて！ この二人を正常に しないと。けど どうやって！戻せば いいんだらう。あうあうあうあう。

「その服は 誰が作ったの？」

咄嗟に 気になっていた事を 聞いてしまった。

「服のデザインは シオンさん」

と。まず、ティーンが口を動かす。

「原稿を 元に作ったのが クオンさん」

ティーンの後には、続いて言ったのが、フォルテ。

「「です!」」

うわあゝ。最後は、二人のコンビネーション。 何度も言いますが
すごい!の一言。いや 何回も 言ってるから 何言だな!
って クオンさん 貴女は やっぱ何者なんですか! はあゝ、
ため息しか出てこない。

「流石だな。クオンさん! やっぱり すごいなあゝ。とても 真似
できないよ」

クオンさんって なんでもできるんだなゝ。(ティーン& amp ;
フォルテの説明により、理解)

「他に 質問は ない?」

「いえ。得に 主の事は 分かりましたので。」

「はい! ご主人様。まだ 知りたい事は いっぱいあります。」

ティーンのピシッと伸びた手は もの凄い好奇心を 感じる事が
できた。うんうん。質問する時は、ちゃんと手を挙げないと。

「えっと 何かな?」

質問の内容を聞くべく 僕は ティーンに尋ねる。

「ええつと・・・その・・・え〜つと ですね。」

頬を ピンク色に 染めてもじもじしている、ティーン。その恥ずかしさのせいで 次の言葉が なかなか言い出せないのが 目に見える。

「ええつと・・・その・・・あな・・・あなたの・・・」ご主人様。あなたの力が 知りたいです!!」

ティーンが 思い切って 言った!! よく言ったね。偉いぞ!! うん? 何言ってるの? 僕の力を 知りたい。って つまり また 試合と書いた 戦いを したいの!! 勘弁してよ! と 僕は 口に出さずに 心の中で 叫んだ。

「はいはい。その案 私も さんせ〜い!」

えっ! 待って フォルテ!! いきなり飛び込み参加って・・・

「多数決の結果に より! 2対1で 試合を 行いたいと 思います。いいですね! 主!!」

勝手に 決まっちゃったよ。僕の意見なしに。まあ そこまで やりたいていう気持ちがあるなら、やらなくはないけど。

「さあ 今すぐ トレーニングルームで 一汗かきましょう。」

おてんば娘。なんでそんなに 張り切ってるの? ほら 横にいる ティーンが アタフタしてるよ。

「フォルテ。ちょっと待つてよ。今すぐには 僕は 動けないよ。さっきの試合の疲れがあるから せめて 明日には できないかな?」

「つい興奮して取り乱してしまいました。すみません 主。今すぐには 場所を手配するのは 流石に……」

「予約取れました……よ。あれ?」

えっ! って顔してるね フォルテ。わかるよ。うんうん。まあ その予約を明日に 回してもらって……と

「ああ。それと ニパは何処にいるの?」

「たしか。先程、医療室に 運ばれました。」

「ありがとう。後で 様子見に行くよ。」

そっか……。

「じゃあ。今日は もう寝かせて もらっていいかな?」

はい。と 二人は 喜んだ顔で 頷いた。

じゃあ おやすみ。

そうして 僕は 死んだかのように 深い眠りに ついた。

第七話 「またまた 試合!? 対戦相手は 僕のお世話係!?」(上)

ガン! ガガン! ガン!

不規則な打撃音が響き、

ハアアアア!!

叫ぶ。

(えっ! ここは?)

ハアアアア!! ううああああ!!

(この雄叫びは・・・どこから。)

周りを見渡す、七夜。

(霧が、周りがよく見えない。)

ウオオオオ!!

ほんの少しだけ、人影が見える。

(あっ! いた。ん?)

七夜が 目撃した人は 七夜というより『時久遠』に とてもよく似ていた。

(うそ・・・だよな。なんか全部が別人みたいに見える。僕の女バージョンなのに。うん？あの腕……。)

ドスッ！！

「ククク・・・やっと手に入れたよ。これで・・・」

(何を 持っている？いけない気がする。止めないと。)

が 七夜の足は その場から 動くことができない。動けない中霧が 急に薄くなり 周りが 見渡せるようになる。そこで 七夜が 目にしたものは・・・

(ティーン！フォルテ！ 嘘だ嘘だ嘘だ ううそだあああああ！！)

が 七夜の叫び声は ここでは 響くことはない。まず 七夜の姿は ほかの誰にも 見えない。つまり、この夢では 七夜はただの客でしか ないのだから。

(やめる やめる やめる！！)

「ククク・・・ふふふ。次は 君の番だから 覚悟しといてね。七夜！ 迎えに行くからね。ああ、もう お帰り - おはよう - の時間だ。目を 覚ますんだ。きつと、いい一日が、始まるよ。」

素直に 僕は 今自分が いるセカイに 戻ろうとしていた。

ハッ・・・ハアハアハア・・・ふう

「ユメ？ だつたんだよな。」

自分が 見ていた夢に 少し恐怖をもった 七夜は 二人が寝ている ベットに目を向ける。

（よかった。まあ 夢だから 二人に害は ないと思うけど。やっぱり心配かな。）

現在 午前2時。辺りは まだ闇の中。することもない僕は ただぼーっと 時間が 過ぎるの待っていた。その時 ふと思ったのが リーリヤ・ルインモードに ついて

（夢で 見たあの腕と 同じとは・・・）

七夜は 夢に出てきた もう一人の自分と腕のことを 思いだし。デスクにつき、リーリヤについて調べだす。が、ルインモードについては、一言も書いていない。

（リストに載っていない オリジナルか。調べようがないな。）

いろいろ頭の中で 考えていると、睡魔が 眠気を誘う。

「あつ。とにかく今は 休めって 言ってるのかな。無理に頑張っ
て いざって時に体が 使えないと 酷い後悔をするぞー。って
誰かが昔言ってたな。ああ まぶたが 重たくなってきたな。」

その重たいまぶたを閉じひと呼吸をした時 再び眠りについていた。

「すうう……。」

「うっん。」

ふと目を覚ますと 周りは 明るく 賑やか声が聞こえる。寝ほけている 僕の視界には……こんな物が、入ってくる。

「おはようございます！ー！あるじー」

うわっぷ！ー！フォルテは いきなり 僕が寝ているベットに ダイブしてきた。

「うわっ！ー！」

フォルテの行動に 僕は 思わず驚いている。さすが おてんば娘。朝から 元気だね。

「主！起きてください。朝です。訓練です！」

おきてるよーフォルテ。けど 君の行動に 僕は 大ダメージを受けているんだよ。しかもみぞ打ち、ね！

「主 顔色が 悪いですよ。」

そりゃあ 君のせいだよ。って 言いたいけどダメージのせいでは言葉にできない。

「主 じつと しててくださいね。」

そっつい フォルテは 七夜のおでこに自分のおでこをコツンと合わせる。

「っ／＼／＼」

やばい。ドキドキする。

ドクン…ドクン…。

(主の反応 かつわっいい もっと主のことが 好きになっちゃいそうです〜!~!)

ふりふり

「えっと フォルテさん! 何やってるんですか。」

つい フォルテのペースに 飲み込まれ 自分のペースを見失う
七夜は 話題を 代えようと試みるが…。

「何って 主の好感度を 上げよう」と。

好感度。僕の？ 言われなくても 今の行動で 少しは 上がったよ。違う意味で…。

「そんなことより…。ティーンが さつきから 見当たらないけど…？」

「ティーンなら 会議に行ってます。」

「会議って？ ティーン 一人で 大丈夫か？ フォルテも行かなくて。」

はい。って 言いたそうだね！ 多分、ティーンのことだから 二人で 会議行くと 誰がご主人様の面倒見るの。って 事になんやかんやなつて じゃあ 私が会議行くから フォルテは ご主人様のこと 頼むね！ 推理出来たり！ まあ こんなかんじかなんか… あつちに居た世界の授業が ここで役に立つとは…。あえて 会議の内容は 聞かない方がいいな。うんうん。と 一人 心の中で頷いていると。

「その通りです 主。」

えっ!？

「私の体質なんです。」

「体質？」

「ここ、つい最近 人の心の 声が 聞こえるんです。あっ！ おかしいですよ？ 気味悪いですよ？」

なんか さつきとニュアンスが 全然違う。ものすごく 悩んでる ように 僕の 瞳に 映っている。というか そうにしか 見えな い。と 七夜は 傍にある 悩みを取り除こうと 一人考えている。 だが その裏では……。

(主) 本当に私の事を 真面目に 考えてくれるなんて!! フォルテは 今、今この時間を!! 満喫させて頂きます!!)

ふりふり (心の中より)

もっともっと 主には 付き合っ て 貰いますよ。 きゃはっ

(フォルテの肩が 沈みばなしだ。 どうしよう…。 あっ!)

「ねえ フォルテ。 さつき 『人の心の声が 聞こえる』 っ て 言 ったじゃん!」

「えっ。 はい そう言いましたけど…。」

「実は さあ 僕も聞こえるんだよね。 お恥ずかしいながら…。 は はは」

「ホントですか!?!」

「うん 本当!」

「じゃあじゃあ 他人に そのことについて 話したりしましたか?」

「うん。最初は 皆驚いてた。だって 『君今 こう考えてたでしょう。』なんて 言ったりしてたら、皆に 一回気味変わった。でも まあ、その能力が 皆に認められる 事件があったりしてさ…。いろいろ 大変だったんだよ。」

「そんなことが…。でも…」

「大丈夫だって！フォルテなら その力を 上手く使えるよ。」

「根拠は…。根拠はあります…か？」

「根拠なんて ないよ。ただ 初めて君を 見た時！こう思ったんだよ。『優しい娘』だなんて！ただそれだけ！ かな。」

『主 主 あるじ〜』って 飛んで来そうだな。

「主 少し気が 晴れました。ありがとうございます。」

あれ？ なんか。まあ シリアスな場だからかな。顔が、沈んだまままだ、よし！とっておきの魔法、使ってみよう、かな。

「そんな暗い顔しないで フォルテ！！ ほら 笑顔〜」

にぱあ〜

「〜くく…ははは〜」

あっ 笑った！！ よかった。やっぱり 女の子には 笑顔が一番！！だね。

「はははッ　　主　面白いですね！　その顔　くくっ…。」

あれ！　そんなに　笑える顔だっけ？　まあ　喜んでるから　いいか
!。

七夜とフォルテの笑いは　この後　数分間止まることは　なかった。

「「ふふ…ははは」」

「落ち着いた？」

「はい。すっかり　このとおりです。」

フォルテは　そう言い　両腕を　顔の近くに上げている。

「そう。まあ…フォルテなら　出来るよ。」

「わかりました。　主　私出来るだけ　やってみます…!。」

「いい　心掛けだね。さあ　そろそろ　起きないと。ティーンが
帰って来て　何やってるんです!　ご主人様!!　まだ　寝てるんです
か。(怒)　みたいなことが　言われそうだ。」

その時…。

「そのとおりです。ご主人様…。」

「えっ!?!」

七夜は 幽霊（B級ホラー映画または、何級ホラー映画でも可）を見るかのように ゆっくり首を 後ろに 向ける。あれ!?! 怒ってらっしゃいます? 僕には 怒りマークが 二、三個 目に 見えるのですが…。 気のせいですか…よね?

「たのしい…ですか。ご主人様? フォルテとイチャイチャして…私が 一人会議に 出ている間に さぞかしい思いを したので…しょう。羨ましいです。フォルテばかり…ああ そうだ。今日 確か 試合を やると言ってらっしゃいましたよね? ご主人様?。」

「確かに 元は フォルテだけだね。」

やばいな。ここで ティーンに やたら刺激を与えると…。

「そうだよ。主とイチャイチャして 愛を育んでたんだよ。羨ましい? 悔しかったら 今から 空で勝負しようよ。勝った方が、主を 好きにしていって、どう!?!。面白いと思わない? ティーン。」

ちよつと フォルテ!?! 何言ってるの? これじゃ 場が すごい ことに…。

（主 大丈夫です。私なりの 考えてが ありますから。）

念話が 聞こえた。相手は フォルテ 何か彼女は 僕に 考えがあると 言っている。僕に 内容を 言ってくるって ことは よっぽど自信が あるんだね。

(任せた！)

僕は フォルテに 念話の返事をする。

「いいですよ。勝負しましょう。」

乗り気だね、ティーン。どうして こんなに 怒ってるんだろ？
うくん。忘れていたが 七夜は 鈍感で ある。

「さあ 移動しましょう。」

「試合の形式は 主と同じように ライフを先に 0にしたほうが
勝ちって どうか？ ティーン。」

「文句は ありません。」

二人共 本気みたいだな。これでは 僕は 試合を 止めることは
出来ない。

「主。試合の開始 言ってもらって いいですか？。」

「うん。わかった。」

でも ここで 僕が 合図をした瞬間。この二人の戦いが 始まっ
て、傷つき合うだよ…な。いくら ライフって 言われても…。僕

には 抵抗がある。迷っちゃダメだ！ 今は ただ前を 見る。

「始め！」

この言葉と同時に 二人は 艦の上から 急上昇を 計る。ある程度 上昇したところで 試合 - たたかい - が 始まる。が この光景は 七夜には 見えない。

「行くよ！」 「行きます。」

二人揃って 相手に 急接近する。

「貰った。」

ジャケットと銃口を 向け先制攻撃を 取ったのが フォルテ。相手を ロックし トリガーを 引く。フォルテのデバイスは ボウガン型で拡散 - スプラッシュャー - と集中 - エクステンデッド - の二つのモードが ある。この二つを駆使し 相手を 撃ち倒す。

ババッ、バババツと 銃声が 空の上で 鳴り響く。その銃声も 虚しく ティーンには 当たっては いない。

「もう 終わり？」

では これを……。フォルテが 攻撃を している中 ティーンは 背を向けていた 方向に 体の向きを 代え 攻撃態勢に 入る。

「舞え。」

ブンブンと ティーンの扇型デバイスの先端に 付いている。ピッ

トを 空中に ばらまく。

「また このピットか。」《どうしますか？ ここは 近接ブレードの方が いいと》

「そうだね。でも 太刀だから！」

フォルテは ウル・オク（フォルテのデバイス）を 近接ブレードに 換え、降ってきた ピットを薙ぎ払う。もちろん 爆発も起き 周りに ピットの残骸が 落ちる。

「このピット なんで…。」

怪しいと想った フォルテは ピットから 距離をとる。

「あら 逃げるの？ けど 無理ね。」

ちらつと ティーンは 七夜の方を窺うが 七夜の顔には 笑みどころか 不安の顔を 浮かべている。

（その曇りを 私が 拭い取って 差し上げます。ご主人様！）

そんな油断を していると…。

「はあああ…。」

「なに！？ 一体…おしい。ふふ」

死角から フォルテが 飛び込んでくる。が 対抗して ティーンも近接の態勢になる。ティーンのデバイス『ギュリーノス』には 仕込み刀が 仕込まれていたため フォルテの近接に 対応が 出来たのは ギュリーノスの仕込み刀に よるもの。よって フォ

ルテの攻撃は 終了。

「あーあ 当たらなかった。」

そう言い残し フォルテは 再び ティーンから 距離をとる（ピットのことも あるため）

そして フォルテの動きは 振り出しと変わらない 状態に 戻る。

「ギユリーノス。ピットの残量は？」

《あと 二千個利用できます。》

「そうね……。ありがとう。それと……。」

ティーンは 元居た 位置から 動くことなく 一つの戦略を 考えている。

「さあ どうしようかな……。」

「ウル。スプラッシュャーで いこうか。」

《スプラッシュャーモード》

「一瞬粉碎 スプラッシュユ……。」

フォルテは 自分の必殺技を する構えになり チャージし始める。

《チャージ完了。》

「バスター……！」

放たれた スプラッシュ・バスターは フォルテ めかげに 飛んでくるピットを 撃ち落とすものの…そのピットは 周りに散らばっただけだった。

「そろそろ。いいかしら。ギュリーノス？」

《はい。いつでも いけます。》

ティーンは 魔法陣を 展開し デバイスを 自分の胸辺りに突き出す。その刹那 周りの色が 急に朱色に 変わる。

「何これ！？ 空気が 熱くなった。それと さっきと 光景が違う。辺りが 赤いというか 朱色。まさか さっきのピットが絡んでるじゃないかな。ねえ ウル、そう 思わない？」

《マスターの推理正解です。それと 相手は技で 決めようとしています。こちらも 技で…》
「うん。そうだね。なるべく引き分けで いきたいんだけど。出来る？」

《引き分けですか？それでは 一回近接ブレードに》

「うん。」

《ブレードモード》

「なるほど 何となく わかった気がする。」

「すべてを 朱く染めきる武装扇。」

ティーンは 術式を 言い終え 一度戻した 手を 再び前に突き出し。

「爆ぜよ！！鳳火烈風昇・おうかれっふうしょうっ。」

周りに 散らばったピットが 一斉に燃え上がり 一つなるうと 集まり竜巻状に なる。

「何なんだ あの朱い竜巻に 朱い空。二人は 大丈夫か？」

さつきまで 見えなかった、二人の姿が やつと見えた時には 七夜が 目を疑う状態に なっていた。

「終わった。ふふ これですご主人様は……」

「はっ……。はあああ……。」

「あれ？ 終わって なかったの？すぐに 終わっちゃ楽しくないですからね。」

「はははっ 今の技すごいね！ ホントに 驚いたよ！！ あの火の燃え上がりが……。」

（私のペースを 乱そうと……。いいえ 乗りません）

ティーンは 自分のペースを 乱そうとしてる、と認識し ギュリノスを フォルテの前に 突き出す。

「改めて聞くけど、貴女のその言葉 私のペースを 乱そうとしてるの？」

「いや、そんなこと、考えて、なかった。逆に この戦いが 面白いと感じてるからだけだ。」

「勝負を 楽しむ？」

「そう。勝負を 楽しむ！まあ 今できることなんて 言ったら

これくらいしかなくて…。けど ホントに 楽しい。と 思ってる。
ダメかな？」

「貴女って 面白いですね！ 今からでも 楽しめるかな？」

「うん。もちろんだよ！」

二人は 笑いあった。笑いの後に 少し間が あった。その隙に
お互い集中し タイミングを 計る。

一瞬。時が 止まったように 二人には 見えた。

「はあああ…。」「はい。」「

ガンツ、ガンツ と二人は ぶつかり合う お互いのデバイスに
気持ちを 込め 戦い合う さっきまで お互いのライフは ほぼ
満タンだったのに 今は 二桁まで 落ちてしまった。

「次の攻撃が 最後になるね！！」

「そうですね！」

二人は お互いに 会話を 仕合。最後 相手に 勝つか、負ける
か なんかどうでもいい。楽しめたか どうか。という言葉は し
っかり二人の心に 宿っていた。

「さあ 行くよ！！！」

「はい！！」

掛け声とともに 二人は 前進し お互いを 駆け抜ける。

スパンツ！！

二人の切り抜け後　しばらく　沈黙の時間が　過ぎる。

そして　決着が…。

「おっ…。」「うっ…。」

二人は　力が　抜け急速に落下する。それを　見ていた　七夜は…。

「えっ。決着は　引き分け、で　二人とも落下してる。つまり　この二人を　回収するのは　僕な訳だ。うんうん。じゃない！！。」

状況を　冷静に説明を　していた。七夜は　慌てて　二人の落ちてきているところに　変身し　向かう（フルスピードで）

《ルインモード》

「えっ！　これ！　なんで？」

《その腕は　目標を　決めて捕獲することが　出来ます。》
「捕獲？　やってみよう。はっ…！」

目標は　まず遠い　フォルテにして　放つ。ガシッと　握った音が　した。

「よし！　次！」

1時　リーリヤが　握っているフォルテを　こちらに戻して、　と

！ よいしょ。フォルテを 左肩に乗せて 次の目標 ティーン。
追いつくかな？ やってみよう。はっ！

「よし。掴んだ 引き寄せて。後は…。」

(なーくん。フォーちゃんとティーちゃんを こっちに 運んで。)

突然 シオンさんから 念話が くる。

(了解。)

シオンさんを 探していると 艦の上で 大きく手を 振っていた。おーい なんて 言っただけな顔だ。まあ 二人をシオンさんに 任せて、と

「二人を よろしくお願いします。」

シオンさんに 深く礼を して 去ろうとしたところ シオンさんに 呼び止められる。

「ねえ 二人の様子見なくて いいの？」

「居て いいんですか？」

「うん。この二人の寝顔見ると キスしたくなるよ。」

キスですか…。まあ 僕が 招いた ことだから そのくらいの礼は したほうが いいか。

そう自分に 少し疑問を 投げ掛けてみる 七夜。知らぬ間に保健

室に 入っていた。

「二人は もうじき 目が醒めるよ。これ だだの張り切りすぎだよ。最初 よくあるんだよね。」

「シオンさん。」

「うん？なあに」

「いえ 何でもありません。」

「ああ なーくん。そういえば うちに入団するの？」

「そのことは 以前 クオンさんに 言われています。答えの方は まだ…。」

「そっか…。悩んでるんだね。」

「はい。今 自分の居るべき場所は どこなんだろうって リーリヤを 使った時 そう思ったんです。」

「悩める男の子だねえ」 …。このこの

一瞬 シリアスな顔に なった シオンさんだったけど やっぱり、いつものシオンさんだ！。

「あつははは。シオンさん くすぐったいですよー！」

「なんのなんの これくらいで 根をあげるなんて 私が 本気を 出した時には なーくん死んでるよ。ほれほれ！」

「あっははははッ。」

しばらく僕は シオンさんに たくさん遊ばれ 骨抜きに された。

「少しは 元気でした？」

「そりゃあ こんだけ笑わされたら 元気にならない方が すごいですよ!。」

「まあ そうかもね!」

シオンさんの言葉は 初めて知りました。 みたいなリアクションをしていた。

「シオンさん。 さっきから ずっと気になってたんですが フォルテ、ティーンって 今は ああですけど 昔は どうだったんですか。 聞かせてください。」

シオンの口は 怪しく横に 開く。 その笑みのまま シオンは 喋り始める。

「実は……ねっ」

第八話 「またまた 試合!? 対戦相手は 僕のお世話係!?」(下)

シオンの口は 怪しく横に 開き、その笑みのまま シオンは 喋り始める。

「実は……ねっ」

場が 静まり返り 七夜は 同じ質問を 繰り返す。

「実は……」

「昔 悪い人に 利用されてたの……」

喋りだしたかとおもえば 急に 泣き出す、シオンさん。何なんだ？ まあ 話を 最後まで聞いて……。

「利用されていた？ですか。」

「うん。つい最近まで……。大変だったのよ！ここまで 大人しくするの」

「荒れてたんですか。」

「最初はね！ 初めて 顔見た時は かわいいくな っ て 想ったの！ で、近付いてみたら 急に攻撃してくるし 口は 悪いし。

何回か 手合わせしているうちにね 本性が 解つたりして いろいろ発見が あったの。けど それが相手の耳に 入っちゃってみたいで 結局昔の姿に 戻されちゃったの。その時は 本当に悲しかった。その後すぐに 相手の方が 動き出して いきなり戦いになったの。そして再び 再会した時には……。覚悟を 決めて 戦

わなくちゃっ！って 思ったけど……。やっぱり 無理だった。結局、ティーンとフォルテを 捕まえたのは 私の部下で……。私は 何も

出来ずに いた だから二人を 保護した時 二人の記憶を 塗り替えたの。なんか 私ダメだよ…。艦・ここ・の主なのに…。はは 悲しい話を しちゃったね」

「いえ。その話を 聞きたいって 言ったの自分ですから。シオンさんは 自分の事を 無力だなんて 言わないでください。僕だって 何度も助けられてますから。」

「助けた？なーくんを？」

「いえ 最後のは 気にしないで ください。独り言みたいなもんですから。ははは…。」

「そ〜お？だったら 気にし〜ないつと」

「はい。終わりよければ なんとやら。ですね！」

「まだ 終わってないよ！」

「そうですね！！」

「はは…。」「ふふ…。」

二人は、微笑み合う。だが…。真意は。

(実は ほとんど嘘なんだけど。場が 言える状態じゃな〜い！！)

心の中で 本心語るシオンさん。バレバレですよ。だって 僕、人の心の気持ち が わかるんだから…。けど 記憶を 塗り替えたつて ところは 本当に聞こえたんだけどな。

笑いが おさまり部屋が 静かになる。七夜は この空気を 変えようと 口を 動かすが…。

「なんか 懐かしいな…。」

「えっ！ 何が？」

「僕 こう見えて 姉が一人いるんですよ。その姉は 大の旅好

きなんです。家には あまり居なくて たまに 帰ってきた、かと思つて、ほんの少し 目を 離したら すぐどつかに 行っちゃう人で まあ それが あの人の生きる活力なら いいんですけど…。ほんの少し経つて こっちに来る前に テレビで こんな事件を 聞いたんです…。」

「どんな事件？まさか お姉さんに ついて…。」

「はい。姉の死亡についてです。その事件に ついては 直接行つて確かめました。けど 遺体は 存在せず 血痕、帽子…など 姉の物と思われる物だけしか ありませんでした。僕は 現場を見た時 ふと思つたんですよ…。時を 越えたんじゃないかな？、つて。どう思いますか。その人について…。」

「うーん…。なんで 時を 越えたつて 言い切れるの？」

「その事件は 居眠り運用が 原因なんです。深くは 分からないのですが とにかく言えるのは 子供を 助けたのが 姉ということなんです。その子供の証言は 『お姉ちゃんは…どこ？お姉ちゃんは…』。』ということを 言つてました。姉は 困つてる人を ほととけないんですよ。多分 僕は 姉のそこが 好きだったんだです。だから…姉は 逃げ出す人じゃないですから…。だから…！…言い切れるんです。 あつ なんかすみません…。一人で こんなにべらべらと 喋つて…。」

「そのお姉さんつて 私じゃないかな？」

軽く疑問に 思つたシオンは 自分の方に 指を 指す。

「そうです。貴女なんです、多分…。初めて 顔を 見た時に 核心が ついちゃつて…。だから あの時『姉さん！』つて 言っちゃつたんです。」

「なーくん。残念ながら…私 その頃の記憶が 無いの。ごめんね。」

「いいえ。まあ 思い出したら 聞かせてください。」

そっか 記憶が 無いのじゃあ…。 あっ そろそろ起きてるかな？
様子見に行こう、と。

「起きてる？」

寝ているフォルテ、ティーンに 声を 掛ける。 まあ、寝てるんだ
し 返事は さすがに ないな…。 と 期待を せずに部屋を 覗
く。

「おはようございます。ご主人様。」

部屋を 覗いて まず ティーンのいつも通りの透き通った声が
耳に入る。 まるで 今までのことは スッキリ、なんとやら…。 み
たいな。 これを 俗に言う『乙女の気まぐれ』と これから 僕は
呼ぼうかな。

「ああ。おはよう ティーン。てか 今 昼過ぎだよ。」

ティーンは 時計を 見て時間を 確かめる。 時間を 知った時
ティーンは あっ と 口の前に 手をあて 顔を 赤らめる。

「そうですね／＼／＼。けど 起きたので…つい／＼／＼。」

(どうしよう。ご主人様に こんな恥ずかしい所を お見せするな
んて… 私ったら… 本当ダメだな。)

ティーンは 心の中で 留まっているなら まだ良いものを あま
りの恥ずかしさにより 身振り手振りを 七夜の目の前で 行って
いる。 『本当に テンパってます。』 (七夜より一言)

「そんなに… テンパる必要は ないと思うよ！誰に でも 一度は あるはずだから。」
「そうなんですか？つい私ぐらいしか しないかとずっと… 思っ
てました。」

目を ウルウルさせながら 七夜を 見つめる ティーン。まるで
その表情は 捨てられた小動物かの様に 見えた。僕は そんな
小動物ティーンの頭を 撫でる。

「こんなことで 泣いてるようじゃ… 大怪我した時 ミイラに
なっちゃうよ。」
「ご主人様／＼／＼ その…私こう見えて 大怪我だけは したこ
とありませんから！！」

大怪我は ないんだ。本当かな。目に つく限り、至る所に 絆創
膏が 貼ってあるけど…。まあ 本人が（キリッ 顔で） そう言っ
てるのなら 良いんだけど… ねえ。

つつい ティーンの心配を する七夜。

「ああ。他に してほしい 事とかある？ その身体だと 歩くの
キツかったりすると 思うから。」

「じゃあ…。 私の側に 居て下さい／＼。」

もじもじしながら 吐いた言葉に ティーンは 自らの顔に 手を
当て隠す。

（何言ってるの わたし！！ ご主人様 こんな頼み聞いて くれ
るはずないよ。）

「分かった。ごめんね…。もっと早く気付いてあげられなくて淋しかったよね？」

「えっ！？ いいんですか…。ご主人様。」

(これは まだ夢の中ですか！？ 夢なら醒めないで…。ほしいな。ご主人様と居られる このひと時を 私は 満喫したいから…。あゝ)

「うん。あつ！ここは、夢じゃない。現実・リアルだよ。」

「はあ…。あのご主人様 今 『ここは 夢ではない』とおっしゃって ましたが…。」

「あつ！ うん。確かに 言ったね。実は 僕、人の心の声が聞こえるの。」

「本当ですか!？」

(つまり さっきの私の独り言は 筒抜け！)

「あはは…。フォルテと 同じリアクションだ。」

驚いた顔も なかなか。さっ！ フォルテの様子を…。 あっ 起きてるね。

「フォルテ…。これから ティーンと 食堂行くけど…。 あっ 寝てるんだっけ。仕方ない 二人で 行こうか？ ティーン。」

「はい。喜んで!!！」

さあ 行こう!!となった時 フォルテが 寝ているベットの毛布が ムクッと 盛り上がり バツッと 毛布とフォルテが 宙を舞う。 その刹那 七夜 ティーンは フォルテの驚愕な 姿に

…。

「あーるーじ」

「フォ……フォル……テ / / / /」

「まあ……」

七夜 赤面だが元の方は 女子なので 大丈夫。ティーン 真顔
口元に 手を当て 軽く驚く程度。ティーンが 思った 以上に
驚かない理由は しょっちゅう見てるから 平気とのこと（数分後
に 七夜が 質問）

むにゅ。フォルテが 主に 抱き着き こちらの顔を 見て 微笑
む。のは 良いんだが… 責めて 服は 着てくださいよ。素っ裸
つてのが… 僕には 刺激が 強すぎます。

「フォルテ……。服を……。」

「うん！？ あっ！！ 主申し訳ありません！！ こんな姿で」

今の格好を 見て一言 謝罪を 入れるフォルテ。

「そんなことより あそこに 着替えが 掛かってるから……。」

ハンガーに 掛かってる服を 指差す 七夜。

「僕 あっち向いてるから… ああ ティーンも 手伝ってあげて
！」

「わかりました。」

慌てて 指示だす 七夜。ゆっくりハンガーの所に 向かう フォ
ルテ。冷静に 見えて 結構 中で テンパってる ティーン。っ

て感じかな…。

「主 いいですよ。あっ 食堂が… 行きますよ!!」

「えっ!?!」「キャツノノノ」

この声が出た要因は 食堂に 向かうため フォルテが 七夜の腕を 掴み 捕まれた七夜は その反動で ティーンの腕を 掴む 捕まれたティーンは 裏声が出るが その後に もじもじ、と 動作を していると 食堂に 到着。速いな !、フォルテが 僕とティーンを 掴み廊下ダッシュ、フォルテ、廊下は 走っちゃ… えっ なに!?! そんな目で 見つめないで… わかった… わかったから… ね、

「主 適当な席に 座つといて 下さい。買ってきますから…。」

「あっ… 気を使わなくて 良いのに。」

「フォルテちゃんなりのごめんなさい。とかでは ないでしょうか。」

ううん まあ お言葉に甘えて だね。そう言えば 昼間なのに 人が… 居ないな…。

「ねえ… ティーン。昼間だよね!?!」

「はい。昼間ですが…。」

「主!!… どうぞ!!… お食べ下さい!!…」

ティーンから 質問の返事を 貰った時、お盆×3を 持った フォルテが 七夜の前に、料理を置く。七夜は喜びのコメントをフォルテに言う。

「わあ。ありがとう!! 美味そうだな! どれから…」

「そんなに喜んで貰えるとは。」

「本当に美味そうに食べますね。」

「だって! だって! この…」

フォルテが 僕に持ってきた料理は ラーメン。だが こんなに美味しいのは 生まれて初めて!! 食べた。この麵の原料は 何使ってるんだろ。こんなに コシがあるのは… 米粉かな。違うとしたら… なんだろうな?

「これは 誰が 作ったの!? すっごく美味しいから。」

「これを 作ったのは 艦の看板娘こと 紫さんです。」

「つまり 一人で作ってること。」

「はい。紫さん 一人というか 機械人形・オートマタ・が お手伝いしていると いうか。」

「なんだ! 私の噂を してるのか?」

うわっ!! 突然現れた 紫さんに 驚く七夜。

「このこの…」

「痛いですよ! 紫さん!」

フォルテに ちょっかいを だす 紫さん。隣で 苦笑いするティーン。どうにかしないと脳内パニック状態の七夜。

「貴女が 紫さん?」

「そうだ。うん!? 見掛けない顔だな。お前 名は?」

「自分は 別世界から 来ました。七夜と言います。よろしくお

願います。まだ この団員では ありませんが…。」
「おお〜 お前が 噂の… うーん… なんだっけな？ 悪い忘れ
た。」

僕に 違う名前とか… けど 噂のって とても気になるなあ…。

「あの色々聞きたい事が あったのですがびっくりしたせいか 全
部 忘れちゃいました。」

「あつはつは…。 私のアレで 物忘れとは 傑作だな。」

「ノノノノノ すみません。」

「何 お前が 謝る、気にするな。」

そんなことも あり 新に紫さんの存在を 知った七夜 まだよく
分からないこの戦艦の中 七夜の心中は 少しだが 揺らぎ始めて
いる。

「紫さんって 面白い人だね。」

「そうですね。」

「はい。」

食後のひと時を 会話をし 楽しむ三人。

「ああ。試合やるって 言ってけど、どついう形式で やるの？

2対1 1対1 とかあるじゃん。」

「はい。形式は 1-1、1-2の2つで いきたいと 思うので
すが… どつでしようか？」

「うん。いいけど。」

「では… 主 30分後に 空で 待ってます。」

そして僕は自分の部屋に戻ることに。二人は色々準備がある。との事で別行動をとっている状態。プシューッと自動ドアが開き自分の部屋に入り、ベッドの方にゆっくりと近づき横になる。

「さあ 何しようかな。」

ベッドの上で腕を組み考える七夜、だが答えが見つからない。

「ああ 少し目を閉じよう。」

「時間が…。行かなくちゃ。」

七夜は時計をベッドから見て下り靴を履く。そして部屋から出ていく。

「ここか…。よし。変身・セットアップ」

「あーるーじ」

七夜は変身を済ませ呼ばれ方向に飛んで行く。

「ごめん。ちょっと遅れた。」

「いいえ。大丈夫ですよ。よく有りがちな事ですから最初は…。」
「そうそう」慣れればいいんです。」

ふわふわ宙を 楽しそうに舞ってる フォルテ。それは分かったん

「ただど 何から やるんだろう？」

「はい。ご主人様 これを 付けて下さい。」

ティーンに 笑顔で 渡されたのは 紐の付いた風船？ かな。まあ、二人もちゃんと付けてるから 僕も 付けないと…。

「これでいい？」

「はい。バッチリです。」

「ルールの方 教えてくれるかな？」

「ルールは 今付けているこのバルーンを 時間以内に 逃げ延びるか破壊を すればいいのです。」

なるほど。

「じゃあ 始めようか…。」

「では 参りましょう ご主人様。」

「お互い いい戦いを しましょう!!」

三人は 気合いを 入れた所で デバイスを 構える。いざっと思っただ所で 一つ疑問が…。

「お二人さん…。誰が 試合の始める あれっ やるの？ごーん っつてやつ。」

「あっ」「忘れてた…」「忘れてました。」

二人は どうやって 試合を 行おうとしたのか… とても気になる。刹那 戦艦から 甲高く テンションアゲアゲの音が 念話越しから 聞こえる。その声は…。

「シオンさん!？」

「ヤッホー なくん。その試合 私達も 観させてもらうね!！」

「えっ! ま いいですけど。」

「ほんじゃ これ ゴング代わりね ポチッと」

シオンとの会話を 終えた 刹那 ドオーンと 戦艦から 爆撃が発射される。 というか シオンさんの打ち上げ花火かなんか かなって 思うくらい 大火力。 パアーンって 空で 花が 咲き散る。 それに見惚れて 試合どころでは ない。 ……が 皆は こう思った。 綺麗だな、と…。 いけないいけない、試合を 集中出来ない。 まだ 終わらないの。 長い…。 綺麗だなあ…。 たあまやー(心の中から) ぱちぱち…。 ああ 終わっちゃった。 あっ!! 夏祭りを 楽しんでる感じ。 変だな。 さあ 試合つと。

こうして 僕は 戦場に 体を運ばせた。

第九話 「対戦+乙女」s 乱入者 久遠の如く」

「はああああ…。」

大槍を 担いだ七夜が 相手目掛け飛翔する。 と言っても 相手は 乙女なんですけど…。 ブンツと 先手を 取り大槍を 大きく振りかぶる。

「甘いですよ 主！！ 今だよ ティーンちゃん！！」

「はい！！」

七夜の攻撃を 舞うように 避けた、フォルテは 『ティーンちゃん』と 叫び その場を 一時後退する。フォルテが 退いた後 ティーンが 扇型デバイスウル・オクを 前に構え突貫してくる。これをACSとか 呼ぶんだったな。 っ て 自分は 何を 言ってるやらか。 ま 避けるのが 先、ね。

「よつと。」

「えっ…。」

突貫するティーンを 軽々しく 避ける七夜の顔は 何故か 笑っていた。そんな中 ティーンは 七夜に 避けられた事で 降下し続けていた。その事を 確認した七夜は フォルテを 再度見た後 飛び立つ。

「フォルテ。」

「な… なんですか…主」

突然の七夜からの質問に 戸惑いつつ あたふたするフォルテ。

(これは 主の作戦か なにかかな? けど 惑わされたりはしません。)

心の中で そう一人固く誓う フォルテ。だ… 騙されなければ…
いいんです!!。

「試合頑張ろうな…。」

「えっ!!…はい。それは がんばりますけど…。 何故 今その事を 聞くんですか?」

「なんでだろうな。 急に 喋りたくなっただって 理由は ダメかな?」

「それは 構いませんが… / / / 私に 興味が あるならいくらでも… / / / お話下さい… / / / 全て話しますから… / / /」

「うん? 最後らへんが 聞こえないよ。 もう一回聞かせてよ。」

「そんなことより!! 今は 試合中です。 集中してください!!」

最後の言葉を 話した時 フォルテは 銃を あちこちに 乱射させる。 うわあ。 フォルテ 撃つ時は 狙い定めないと 危ないつて…。 自分のバルーンより 他人、周りを 気にするのが 七夜です。

(プチ説明)

「これじゃあ 近づけない。 どうしよう。」

その刹那 後方から ピットが 乱れ飛び七夜を 襲つ。

「危ない…。 ティーンか… さっき見たのより 数が 多い。」

「正解です ご主人様。 先程の試合より ピットの数を 少し増やさせてもらいました。」

「ただだけ あるの？ 気をつけて戦わないと… リーリヤ 他に何かないの？」

《腰に ついているデッキケースを 開いて下さい。》

(分かった。)

腰についている デッキケースの蓋を 開く。 刹那 6枚のカードが 七夜の目の前に 表示される。

「カード!？」

《その6枚のカードを 手に 掴んで スキャンして 下さい。》
「掴む、スキャン!? よくわかんないけど やってみよう。」

カードを 掴もうとした 刹那 妨害が 入る。

「ちっ… タイミングが もう一回 チャレンジ。」

「そうは させませんよ 主!！」

カードを 取りたい七夜だが フォルテの射撃に より うまいこととカードが 掴めない。 くっ…。

「主 ただ逃げてるだけじゃ つまらないですよ!!!。 ティーンちゃん。」

「これで 終焉 - おしまい - です。 凰火烈風昇!！」

「こんな時に あと ちよい… 三枚掴めた… えっ、と スキャンするところは あれ!? こんな所に あったっけ? まずは 三枚を 通そう。」

《SCANNING: ONE、BLADE、WATER》

リーリヤの音声終了した時 粒子が 周りに集まり 武器が 構成される。その形は 太刀型で 刃が 水色 そして 一本。つまり カードを 通した種類が 構成されるらしい。そして 一言。

「カッコイイ〜。」

「おっ！！ あいつリーリヤのカードシステムに 気付いたか。」

「うん そうだね〜」

「武器が 構成出来たとして… どうやって 使うか、が 分かれば いいが。」

「どうだろうね〜。ところで いつカードケースを 渡したの!？」

「最初から 自分で 気付くか、リーリヤが 教えるのどちらか？ を 試したくて。」

「なんか クオンちゃんらしいね。」

「私は 自分以外でも なんでも ありませんので…。」

モニターで 観賞している シオン、クオン。その表情は 喜び顔に 近かった。

その武器とリーリヤを 入れ換え 構え直す。七夜は ティーン
の巻き起こした 『凰火烈風昇』を 見つめ ふと 笑みを 浮か
べる。

「おお〜 あれが さっきの技か… 下から見るとより 迫力があ
るな。ま これを 上回る技を 出せば いいわけね!!」

よし!と 言わんばかりに 一振り。振った直後 刃から水が 滴
り落ちる。 おおっ! これなら…。

「ハア……ッ。」

刃に 力を 集中させ前から後ろに 大きく振る。 放った 攻撃は ティーンが 巻き起こした 『凰火烈風昇』を 大きく上回り 飲み込む。…が 当然 水と火なので どうなりますか 言うまでもわかりますよね。 一様 書いときますね。 蒸発しました。 蒸発するまでは 考えてたのですが… その後の被害があることを 忘れてました。

「凄い！！ あの凰火烈風昇を 飲み込むなんて…。」
「……………あー。」

ティーンは 目をぱちくりさせ 驚いている。 同様に フォルテも驚きのあまり フリーズしている。

「はあ…はあ…はあ…。」

突然 雨が降り出す。

「やばいな…。 今ので 結構体力を 持ってかれた…。 リーリヤあと何分活動出来る？」

《その体だと… 約10分が 限界かと。》

「分かった。 次で決めないと。」

今にも 倒れそうなその重い体に 無理を 言い聞かせ フォルテとティーンのところに向かう。 その刹那…。

ギョーンッ

紅い閃光が ティーンと七夜の前を 照らす。そのビームは フォルテの放ったものとは 違うと二人は 気づく。

「一体 どこから…」

七夜は 上を見ると 雲に大穴が 空いていることに 気づく。そして 大穴から 人間の形を したモノが ゆっくりと降下してくる。

「あれ！？ 僕だ…」

雲間から 現たのは 七夜 いや 久遠に そっくりな少女。…を見た瞬間 七夜の気分急激に 悪くなり不思議な声を耳にする。

（あれは 在っては いけない。 今すぐ 潰せ！！）」

悩みに 響く声 この感じ 夢と 似てるような…！ まずい 二人を近づけさせないように しないと…。

（七夜 お前は 手を出すな。 ただでさえ お前は うちの団員ではない。 つまり 関係者ではない お前に 怪我を されては困る。ここは、私達で 処理する。 お前は 艦に 戻ってこい。）
（いやです…。 あれ 僕の手掛かりなんです。 だから…。）
（団員では ないやつに 出る幕はない。）
（だったら… 団員に なればいいんですね！）
（そういう訳では…）

いや 間違えでは ない…か。 懸けてみるか…。 やつの可能性に。

（分かった。 その分 お前は 限られた時間で 戦え！ 時間は

5分だ。いいな。」

(了解。)

とは 言われても…

「フォルテ、ティーン 集まってくれ。」

「はい 何でしょう。ご主人様。」

「何なりと ご申してください。主。」

「二人に 初めて命令を 下す。僕の援護に ついてくれ。」

「了解!!」

二人の目付きは 日常の目とは 全然違う別人だった。同じはずなのに。これが ナンバーズなのか…。

「二人共 よく聞いて 時間は 今から5分間しかない。つまり

一撃で 倒さなくては ならないんだけど 二人は 意見とかあったりする?」

「ご主人様の意見に 賛成で ございます。で… 私達は ご主人様に 攻撃するための空きを 作ればいいわけですね。」

「そういうこと。」

「作戦 開始!」

合図ともに 三人は ばらばらに 散り 各配置に就き 攻撃をする。フォルテは右に ティーンは左に その中 七夜は 真ん中に居 人の形を した物体と 対話を 始める。

「君は 何者なの?」

「ム…カエ…二…キタ…」

「迎えにきた？ どうして？」

「……………」
「答えて……………！」

何度 叫んでも相手は 答えては くれぬ。もし 答えたとしても さつきと同じく 意味の分からない言葉ぐらいしか しゃべっては くれるだろうしね。

「ねえねえ〜 クオンちゃん あれなくに？」

モニターから 先程までの戦いを 眺めていた シオン、クオン。唐突の乱入者の参戦により 試合は中止になり 現在 七夜、ティーン、フォルテの三人は 乱入者との戦闘を 繰り広げている、のに シオンは 茶を啜りつつ 茶菓子を食べ クオンに質問といった 『全く気にしなくてもいいよ。』モードに なっていた。そんな中 クオンは…。

「姉さん…。 あれは もう一人の自分 - ドツペルゲンガー - です。」

「ドツペルゲンガー？ って 自分そっくりなアレでしょ。 なのに なーくんの偽者だったら 男の子バージョンじゃないの？ あれ 女の子の姿に 見えるけど…。」

まだ 完全体とは 程遠い七夜の偽者 まだ足りない要素があるのかと思わせる各場所。 つまり ここに現れた理由は 本物になるうとしていたのか… 本物を 殺し入れ代わろうとしていたのか…。 ほかにも まだあるかもしれないが… 現在 七夜が 密かに思っている事が 分かる。

「はあああ…。」

一撃必殺を決める間合い。ひよいと軽々しくかわす偽者。かれこれこれで何回目か。うぐん。時間的に表すともう時間が無いとしか。あと何振り出来るかなって考えてみるも分からず終い。刹那残り少ないチャンスが起る。つまり止めを刺せということか…

「ご主人様 今です。」

ありがとね。こんなに隙を作って貰って!!

「…はあああ!」

隙のできた体に切り込む。そして一撃。自分の中で一番マズイことをしたと思っている。右腕を切り落とす。だが…切り落とした初めての感じは粘土かなにか違うなにかを斬ったのでないかと思うくらい奇妙だった。

「ヤッ… トツ… カ… マエレ… ル…。」

何を言っているか分からない言葉。それに追加された不気味な笑み。これが今僕が…覚えている全て。それ以降は覚えてはいない。そう何も…。

「主 朝食持って来ましたよ」
「ありがと。フォルテちゃん。」

そう 僕には記憶が 空になったらしい。 シオンさんは 事故で…
… っ て 言 っ て た け ど。 何 した の かな？ うーん…。 ぼく ぽく…
… ちーん！ うん よく わ かん ない や。 ま そんな こと より
り ご飯 ご飯

「美味い！！ これ作ったの？ ホントに美味しいな。 どうしたら
こんなに美味しくできるんだろ…。」

フォルテが もじもじして 頬を紅色に 染めている。 うん 顔
赤いけど どうしたんだろ… 熱とか…？

「それ 作ったりや… つくたや… 作ったのは 私でふ。」

噛み噛みのフォルテの事故発言。 なんか 見てるこつちが 恥ずかしい。
けど… 必死に訴える思いは 伝わってきたけどね！
ああ… かわいいな。 自分のはいているスカートの裾を 手で握
っ て いて 俯 いて いる。

「これ！ フォルテが 作ったの！？ すっごいな〜 これの作り
方教えてよ！」

どうかな 反応は…。

「いいですよ。 主の頼みなら 断る理由など ありませんから。」
「よかった。 フォルテが 噛み噛みの言葉言ってるとき 凄くヒ
ヤヒヤした。 分かってたけど… ね。 ホントに 料理上手くなっ
たね。」

「主の喜ぶ顔が みたいので レベルアップしたのです。」

胸を張って 言うこと… まあ 俺が もしフォルテの立場ならや
つてたかも。

「イチヤイチャも そこまで。」

「イーターか。おはよう。」

ここに イーターがいる理由は ただ一つ 俺が元の世界に 帰っ
て来た、と言うこと。 因みに、俺の部屋に二人が、います。

「遅刻するよ…。」

「今 何時？」

「遅刻 15分前」

「やばいな。 フォルテ達は 先に向かってて…。」

「嫌です！！ 私は 主とラブラブして行きたいのです。」

えっ！？ それはそれで いいけど… じゃなくて フォルテは
俺の妹であって そんな疚しいことは 考えちゃだめ！！ けど
時期なので…。 えっと 時間時間。 つい鏡に 自分の体 全体
が 映った。

「どうして 俺の体は 色が 所々違うんだ。 目、左腕、右脇腹、
右膝、胸（肺あたり） やべっ！ 時間。」

慌てて 夢ノ風学園の制服に着替え 自分の部屋から 廊下を 速
歩で 歩き 階段を不規則に 音を立て 下る。 そして 玄関で
靴を履き、ひと呼吸する。

「行つてきます。」

自分以外 誰もいない自宅に 挨拶して 朝日が 眩しい空の下に

体を運ばせ フォルテ、イターと 合流を するため 歩きだす。

第十話 「魔法と学園とフォルテのパートナー」

「おい!!」

ふう… 間に合った。二人とも 結構進んでは…。校門を潜ろうとしている二人を 呼び止める事に 成功し、二人の止まっている場所に 合流する。

「ぎりぎりですね。主。」

「結構 遅かったな。寄り道とか してたか？」

合流するとして 二人のコメント? というか 感想? ま いいや。

何で 二人とも 平然といるわけ? 遅刻しちゃうよ。

「主 急いだ方が あと2分しかありませんよ!」

「二人とも 忙なくて いいの?」

「はあ。あんたねえ。はい これ見なさい。」

えっと… 私立夢ノ風学園 一学期 期末試験表 2年6組 26

番号 時 イーター。…で 何位なんだろ… あれ? 一位。一位か…。

「で… 一位と何の関係が…。」

「忘れてるの一位に なれば宝石が 貰えるの知ってるでしょ。」

ああ…!。宝石か。俺も一位だったな。ほれ。ブレザーの内ポケットから イーターと同じの紙を 取り出す。そして イーターに 手渡す。

「えっ…。一科目 200点って 普通は一科目 100でしょ。なんで そんな点数が 付くのよ。」

イーターは 紙を見るなり 俺の顔に 近づいてくる。その近さ 鼻と鼻が 当たりそうな距離。

「簡単なことさ。一分で 終わらせた。そしたら 点数の倍を くれた。それと 宝石の件は 辞退した。」

「辞退したあゝ。なんで！、どうして！、誰にあげのよ！。その 宝石の件！ 私に譲りなさいよ！」

ああ…。言うから。

「そこで ニコニコしてる娘に。」

七夜が 指指す方を 見るイーター。指された 人は 茶髪のシ ョートカット 背丈は 160?で ややイーターを越して いて 頭に付けているのは 犬耳のカチューシャ イーターと七夜に 呼ばれている名前は おてんば娘こと フォルテである。因みに イーターは 157?です。

「なんで… フォルテに…。」

「なんでって… 言われても テストの結果が よかったから。」

「それだけ?」

「うん。」

にっと 笑う七夜に イーターは その場にひざまづく。

(私も あんな血の滲むようなしてたのに… なんで フォルテば

っかり。)

「大丈夫？」

パシッと 七夜から 差し出された手を 払い その場から 逃げ出すかのように 玄関に 入ってゆく。

「ああ…。」

弾かれた手を 見つめ イーターに 問いかける。

「今のなに？」

「はあ…。主 乙女の心が 分かってないみたいですね。ここは ほっときましょう。時が 経ったら顔出すと 思いますから。

あつ 主 時間時間!!。」

「うん？ あれ 言ってなかったっけ？ 俺 遅刻 欠席のやつ 関係なくなつたから。」

「ええ！ それ初耳ですよ！！ もっと 早く言ってくださいよ。

じゃあ 主が 私に宝石の件を くれたのって…。」

「そういうこと。」

「ばか～～～。」

乙女のパンチ発動。だが 七夜には 全く 分かっていないため その重いパンチを 軽々しく回避する。その勢いで イーター みたいに 玄関に 入ってゆく。うん？ なんて 二人して 怒ってるんだろ。鈍感な彼には 分からなかった。…が 幸いにも 三人とも教室は 一緒なのである。

(なんで 怒ってるんだろ？ なんか悪いことしたっけ…。ま 後で 二人に聞いてみよう。そうしよう。 忘れないうちに。)

七夜に チャンスは訪れた 昼休み、作戦開始？。って何作戦だ？
ま 一緒にご飯食べよ。作戦でいいかな。よし。七夜は一
呼吸入れてから 二人に声を 掛ける。 イーターから…。

「ねえ… 一緒に ご飯食べようよ。」

「今 そんな気分じゃない。」

「そんな固いこと 言わずに… ね！」

「だから いい、と言っている。」

刹那 俺は 尻餅をついていた。 辺りは そのことでざわざわし
ている。 やばい うるさいことに なりそうだ…。 立ち上がり
フォルテとイーターの手首を 引っ張って教室から 抜け出す。
しばらく 二人を 引っ張りながら 進んでいると。

「痛い 放して！」

イーターが 掴んでいた 左手首を 振りほどく。 …が イータ
ーは 全く反応が なく 顔が赤くなっていた。 ぽつり イータ
ーの口から 小言がこぼれる。 『主… 主… へへへ…。』 な
んか まずいような… 大丈夫かな。

「イーター お腹減ってるでしょ。」

「減ってなん…」

ぎゅるるる。 お腹の虫が 反応して 鳴きだす。 やっぱり お
腹が 減ってたんだ。 かわいいこと。 素直に言わないから。

「はい。」

七夜は 自家製巾着袋から ゴソゴソ探して 一つの品を イーターの目の前に 差し出す。それは イーターの好物である カレーパン。 形は 原形のままです。

「カレーパン…。」

我を失い カレーパンに 手を伸ばすが なかなか手に 取らない。

「やっぱり ダメだ。」

拒否を されてしまった。 うーん 場所が 悪いのかな？ じゃあ ここから近いのは…。 現在位置は 3階の2年生のフロアだから。 近いのは 屋上か。 よし行ってみよう。

「なにするんだ…!」

「いいから、いいから。 フォルテも 行くよ。」

「はい！ 主／／／」

提案を 思い浮かんだ七夜は 即座に行動を 行い イーターの左手首を 再び握る。 次は 振りほどかれないように、と願うように。 だが さっきとは 違い体の抵抗は 無いのだが 口の方は さっきより 酷かった。 そんなことを 右から聞き左へと受け流し ただ階段を 上ってゆく。

ガチャ… 屋上に繋ぐドアを 開け周りを 見渡す。 空いてる所を 探すために… といつても 誰もここ利用しないんだよね。

だって 立入禁止の表札が 架けられてるから。 利用する人なんて 頭がおかしいヤツした… じゃあ 俺って 頭おかしいの？

…いや いやいや。 そんなことはないから大丈夫！ ただ たまたま見つけたのが きっかけ、ね！

「ここって 立入禁止の屋上よね…。」

イーターは 屋上に 入った途端 言葉につまりが 生じる。

「うん。 ここ誰も 使っていないから。」

「それは 立入禁止だからよ!」

鋭いツツコミ。 けど… なんか 薄らげな笑み。 もしかして…
喜んでます? 刹那 持っている巾着袋を 奪われ、中から 先
程拒否していた、 カレーパンを センサーが働くかのように一
発で探り当てる。 おゝ お見事!! そしてかぶりつくものの口
の小さなイーターは 『はふはふ』。 全く パンに変化がない。
はふはふし続けること。

〜一分経過〜

「そういえば お前。 口小さかったね…。 変化が…」

「うっ… うるさい!! これでも一生懸命食べてるのよ!!」

「お姉ちゃん。 頑張って!!」

つかさず フォルテも応援してしまう。 そんなぐらい大変なのです。
あゝ ウサギみたいだな。 けど はふはふ食べる姿に ちよつ
と 目を奪われそうだ。

「ふう… ごちそうさま。」

「ほれ! 口に カレー付いてるよ。」

「ありがとう。… どうせなら 取ってくれても… いいんじゃない
い…。」

「えっ?! 最後らへん ごによごによ言っつて わかんないんだ

けど。」

「な… な… 何でもない！！ シュウ〜〜／／／。」

なんか顔赤いけど 熱！！、かな。 ねえ フォルテ。 フォルテの顔を 見ると はあくつと 言わんばかりのため息を 一つ。そして 目を遠くにやる。 ま これに効果音を 付けてみると ぷいつ とか ふん かそこら辺に 近い音が入るだろうね。

「そういえば 次の授業は…」

「お姉ちゃん 体育だよ。」

「あんたは 出るの？」

イーターの唐突の質問が なんとなくくるなと 予想してた 七夜は 即答で こう答えた。

「うん。 出ない。」

ガクツ 最初に OKサインを 出したかと思えば それを裏切るかのような返事を する。 もー 何なのよ、と言いたそうに。

「まあ ちよつとした 用事がね！」

「用事って なによ〜！」

「ひ・み・つ！〜！」

じゃねと言わんばかりに 七夜は 屋上のドアを 開けその場から立ち去る。 その場に 残されたイーター、フォルテ。

「ま あいつもいなくなっちゃったことだし！ 私達も行こうか。」
「はい。 お姉ちゃん！」

よいしょと イーターは 立ち上がり 教室に向かう。 それに ついていくフォルテも 後を追いつける。

そして 放課後…。

「さて…。」

ガタンと 椅子を引き立ち上がる。

「帰るぞ 七夜。」

立ち上がったところに イーターの姿があった。 その姿は 胸を張っていて、先程の態度とは 違う新しいイーターを 思わせるものだった。 吹っ切れたのかな。 けど… 残念。

「ゴメンね。 ちょっと寄るところあるから 先帰ってて。」

「主体の調子が 悪いのですか？ あっ もしかして…。」

勝手な思い込みが フォルテを 不安にする。

「フォルテ。 大丈夫だから、ね！ ちょっと遅くなるだけだから。」

「じゃあ 途中まで ご一緒しても… よろしいですか。」

「なんか フォルテらしくないね。 いつもみたいに 笑顔で 主、主って 言ってるほしいんだけど…。 ふふ 途中までだよ。 イーターもそれでいい？」

「私は どっちでもいい。」
「そう。じゃあ 行こうか。」

そんな会話を しているうちに 下駄箱付近まで 来ていた。トントントンと 靴を 履いて つま先を鳴らす。 よしっ！ 一歩軽く前に 脚を出す そこから自分のリズムに 合わせて 進んで行く。 紅い日差しが 玄関の隙間から 差し込んでくる。 待ち人は、二人。 玄関先において 夕日に照らされている。その姿は 微かに吹く風に 髪が 舞う。それを 押さえるかの様に 耳元に手をあてる。 その姿は とても違った二人を 演出している。まさに 『美』いや 『萌』ダナ。 って なに言ってるんだろ！ けど すごい発見だよね！ 一瞬で 言えちゃったりするんだから。

「遅い!!」
「あはは 二人の姿に 見とれちゃった。」
「あっ／＼／＼」

あれっ 二人とも 顔朱いけど…。

「ほら… い… い… 行くよ。」
「ラップ調？ もしそれだったら すごいね！」
「主 違いますよ。」

強く出て来た フォルテ。 その姿は イーターを カバーするかのよう…。 見えたり。

「じゃあ 何？」
「それは ですね／＼ シュウ」

あっ！！ 煙りが出てるよ。

「あっ、あっ、あっ主 そろそろ 私達 曲がないと… ねっ
お姉ちゃん！！」

「そうね！」

「まだ先じゃー！！」

「今日は こつちから 帰りたい気分なんでふ。」

（やっちゃった！！ パニックになってる分 噛んじゃうしも
う どうしよう。）

一人 パニックになる フォルテ。頭の中が白紙・ブランク・
なってしまうている状態。

（全く 何一人で パニックってるの？ もう 仕方ない。）

パニックに 気づいている フォルテを 逆にフォローしようと
考え行動に 出るイーター！。

「フォルテが そこまで行きたいのなら 付き合っただげるわ。
ほら 七夜 お別れの場所よ。 じゃね。」

別れを 告げたフォルテ、イーターは 大人しく家に帰ることに…
その道中で 反省会をも 行う予定らしい。 そんなことも知ら
ず 目的地向かう七夜。 鼻歌混じりで…。

その頃… 道端で 二人反省会中。

「あれは お姉ちゃんの台詞じゃなくて 私が 言うところで…。」
「はあ！！ あれは 私がフォローしてなければ 終わってたわ。」

反省会？という名の喧嘩に なりつつある状態。 はあ…。 見
ているこっちが 恥ずかしいです。

「「ただいま。」」

二人は 同時に 玄関のドアのぶに 手を掛け引く。 入ってくる
なり 怒った二人の声が 反響する。 誰もいない 家に ただ怒
った女子二人。 そのまま 二人は ふんつと 鼻を鳴らし 互い
の部屋に 入って行く。 ああ 見苦しい。

一人 ベッドの上から窓の外側を 伺う少女。 辺りは 薄暗くな
りつつもあり 部屋は 朱く、朱く 優しく照らされている。 少
女は ぼつりため息を つく。 その後 さっきのため息は なん
だったのか、と思わせる 笑みを 浮かべる。

「今日は 5分早いなだね。」

「あはは…。 バレてた？」

「最初から 見え見えでしたよ。」

照れた 俺は 頬をかく。

「はい。 誕生日おめでとう。 歩夕ちゃん。」

「ありがとう。 久遠くん。」

歩夕に プレゼントを 渡した時 彼女は 大喜びしていた。 プ
レゼントという言葉に…。

「開けていい？」

「もちろん！！」

「何が 出るかな？」

俺は ただ紙を 破る無邪気な彼女に 見取れていた。

「うわあ〜 これ…！ これ！ 久遠ありがとう。」

いや 俺は久遠じゃないし。俺の名前って 覚え難いのかな？

七夜って。 そんなことは 置いて けど プレゼントに 大興奮とは 探したかいと 買ってよかったと思う。 あっ… 歩夕ちゃんの事を 皆に 説明し忘れていた。

じゃあ 紹介します。

この娘は 『霧島 歩夕 - きりしま あゆる -』 17歳の女の子で 俺達三人が 通う 私立 夢ノ風学園の校長の娘さん。つまり お嬢様って 訳ね。 周りには執事やメイドが たくさん。

…で なんで俺みたいな一般生徒が 彼女と今こうして 話しを出来ているかというと ちよつとした 告白的なのを やられたからかな。 突然 『私の執事に なりません？』 なんて 言われたら 皆さんどうします？ 俺の場合は 一回断りました。 …が

歩夕ちゃんが うちに来て 急ぎよ 俺、イーター、フォルテを除いたメンバーで 家族会議を 行うくらい酷かった。 って

なんでうちらは 話しに入れなかったかというと たまたま 外出してたのだ。 …で 家に帰るなり 母に言われた一言が 『あの娘を 幸せに してやるんだよ。』 その言葉を 聞いた時は 何なのか さっぱり、で 自分の部屋に 入るなり 目の前には 歩夕ちゃんが 居るわ、 なんか俺の部屋では ないわで… いろいろ

るあつたんだ。ま 結局は 騎士とでも言っておけば だいたいの人は 理解してはくれるだろうか。

「久遠… 目を閉じて…。」

「はい。」

頭を 思いつ切りかかれる。 犬を 相手するかのように。

「痛い、痛い あつ 両手が 使えてるって ことは…。」

「手術は 大成功だよ。」

笑顔のブイサインは 眩しいな なんか 懐かしい。 昔は いつも暗い表情してたし。

「… で いつ頃戻れるの？ みんな。」

ついテンションが 上がって 先へ先へ 行き過ぎてしまった。

「それは まだ秘密。 ただ 久遠… 貴方だけには 知って欲しかったの！ 成功した話しを…。」

「ゴメン。 なんかテンション上がっちゃって…。」

「貴方のそこが 好き。」

そこから 時が 経つのを 忘れて 話しに夢中になっていた。 気が付けば 午後7時39分。

「楽しい時間は あつという間ね。」

そう呟く 歩夕。 反射的に 七夜も喋りだす。

「平和ですね。こうして楽しく時間をただ…その時間が当たり前で…たのしい時間はすぐに過ぎちゃうけど…これを望んでるのは俺達なのかな。って」

何言ってるんだろ。やだな。あはは 頬を かく七夜。

「その言葉 私は 嫌いじゃないけど。」

「そうですか。 あっ 俺そろそろ帰りますね。 時間が 時間だし。」

「そう。 また明日ね！ 我が騎士。」

「では… 我が主」

病院を 出るまで今日の出来事を 振り返る七夜。

(歩タちゃんの笑顔素敵だったな。)

ふと 街灯に照らされた 七夜は 何か大きな勇気を 貰っていたことに 気付く。 気付いた時には 帰宅していた。 さらに 母と同タイミングで…。

「あら！？ 七ちゃん こんな時間に…。」

「ちょっと お嬢様の様子を 見にね。」

「ただいま」

返事がない。 ちょっと悲しくなった…が 後ろからは お帰りと

返事が あった。 気遣いありがとう 母さん。 さて もう寝よ
うかな。 午後8時15分です 現在。

「上に行つて 考えよう。」

なんて 部屋に着き ベッドの上に 寝転がったら 一呼吸で
の中に 入っていた。

ちょっとした、特別編

「ここで キャラクター紹介!! 《最初に それやろうよ!!》の会です。

「このセカ〜この瞳で見る世界ともう一つの違ったセカイ」のキャラクターを 紹介したいと思います。

じゃあ 手始めに このセカの主人公こと…

時 久遠 - とき くおん - ちゃんです。 イエーイ!!

今回は 初回ということも あつて 直接久遠さんに 自己紹介をしてもらいましょう! 250字以上300字以内で!

「いきなりですね!! どうも 初めまして 時 久遠です。」

は〜い。 よろしくね。 じゃあ 私もしとくね! 自己紹介。今回司会を 務めさせてもらう 時 志恩だよ、よろしく。 えっ!? 誰だつて!! あはは じゃあ 改めて シオンだよ、よろしく!。 こっちの方が 馴染みがあるよね。(フリップで紹介)

「シオンさん…。」

シオンさん? ここでは お姉ちゃんとお呼び!!

「お…お…お姉ちゃんノノノ って こんなことさせるために私を呼んだのですか!!」

うん。ちがうちがう。まあ 久遠ちゃんのことを 一人でも
多くの人に 知ってもらおうかと 思ってた企画を 起てたんだ
よ!

「はあ…。」

んじゃ 頭切り替えて ここで 久遠に 五つの質問を しちやい
たいと思います。 イエイ イエイ あっ 質問の内容は 誕
生日、身長、3サイズ、好きなもの、嫌いなもの、の五つね！ じ
ゃあ…

「ちよつと待って… シオ… えっ… お姉ちゃん。 時間制限と
かあるの！」

うん…。 じゃあ 一問一分の時間を あげるから 明確にね。
約束だよ。 では 始め…!

「誕生日は 8月18日」

「身長は 167?です。」

「3サイズは…えっ… 言わないとダメ?…。」

うん。 絶対。 私より成長してるんだから！ 恥ずかしくないっ
て。 あと 30秒…。

「えっ…。」

10秒…。

「… 86… 57… 84 / / / /」

えっ ごによごによ言っ て 聞こえな〜い。 もっと 大きな声で
〜。

「えっ… 8 6 / 5 7 / 8 4 これでもいいですか / / /」

Bが8 6 Wが5 7 Hが8 4…。

「えっ！ メモってる！ お姉ちゃん 書かないでよ 恥ずかしい
んだから…」

えー いいじゃない。 見ない間に こんなに発育しちゃって

「お姉ちゃん！！ つ… 次の質問… い…いくからね！！」

照れてる久遠ちゃんは かわいいですな〜。 『日本の美』いや
『宝』だね。

「好きなものは うーん。 見当たらない。 というか… 全部が
好き、かな。」

へえ〜 ホントに変わったちゃったよね。 むかしなんか…

「わー わー ドレミファソラシド〜 っど。」

なんで 止めるのよ 久遠ちゃん！！ 今となったら 恥ずかしい
ことなんか ないじゃない〜。

「恥ずかしい) = (=」

なんで 顔文字なの？ いつもは『／／／』なのに。

「嫌いなものは お姉ちゃんのセクハラです。」

ええ〜 お姉ちゃんシヨツキングだよ〜。

ガクツ はあ… もう立ち直れないよ… 私。

「お姉ちゃん……。」

（また 始まった… これになると ホントにめんどくさいんだよね。 けど… この行為で もう被害者を 出さないため！！ 私 は… 私は… 鬼になります！！）

はあ… このテンションじゃ このコーナーを 閉じられないな… チラツ。

（何気なく こっち見た。 同情を 求めてるよ、あの目… ダメ、ダメ 何回も あの瞳に 負けてるし パターンだって… 分かっているハズなのに。）

「しょうがない。 今回だけですよ。」

（あれっ 何言ってるの私?!）

わああ〜 久遠ちゃん ありがとう

「コーナー早く 閉じてくださいよ。」

はいはい。

特別企画 「このセカ」キャラクター紹介は これにて 終了!!

評判次第　また　やるかもよ。

お相手は　時　久遠　志恩でした。　じゃねー！！

第十一話 「再会と思いとシオンの帰宅」

…… よっ、はっ、とお……。

午前3時。一人、森で 鍛練を行う人影がある。辺りはまだ薄暗い。時期は 8月に 近づいている。正直 見えないのが、普通。… が その人影の動きは まるで 全てが 見えているかのようなことを 表している。シュツと 終わりを告げる 動きをする。

「ふう…。」

一息入れ 近くに置いてある タオルを取り顔を 拭く。その人影は 一切汗を かいていない。 なんのために 取ったのか…。

「ハッ!!」

タオルを 狙いに向かって 飛ばす。飛ばした タオルは ドスツと 木に突き刺さる。普通なら 有り得ないのだが 彼には 日課と言っても 過言ではない。鍛練なのである。

「今日も 快調!」

何故 このような事が 出来る様になったのかは… 彼が 通う学園こと 夢ノ風学園が 絡んでいるからである。きっかけは 学年一位。彼は 当時宝石の件を 全く知らなかった。けど 嫌でも知ることになったのは この時。学園長に 呼び出され 宝石の在りかを 示されたから。それで 初めて利用したのが

青い宝石こと… リソナ…その能力は「創造具現強化」文字通り想像力を強化するための宝石に、彼はリソナに一目惚れをした。使った感じは大したことはなく頭にアイデアが浮かぶ程度、なんせ最初の一回目であるから、当然である。変化に面白みが無いことに気づいた彼は次も試してみようと再び一位を獲ろうと考える。その結果は成功し二度のリソナを利用。そこから彼は宝石の事を調べ始める。どの組み合わせがあるのかを研究している結果今に至る、という訳。

「うわあ… 穴開けすぎた〜!!」

まあ こんなことも しょっちゅう、ね。

本当に 何う日があったり、なかったり…。

この人こそ 時 七夜なのです。(何度か、彼と入れ替えたため、分かりやすいかと…)。

「また やり投げですか？」

「いいえ タオル投げです。」

えっ!? この聞き覚えのある アルトボイス。なんか お嬢様みたいな感じをさせる様な…。いや まさか…。つい気になってしまった七夜は 後ろに目をやる。

「振り向かないと 分からないの？ 貴方の主こと 霧島 歩夕だ というのに 私の存在も 格が下がったものね。残念。」

振り向くと 七夜の主と 名乗る少女が 仁王立ちして こっちを

見ている。今の反応で かなり目付きが悪い。

「ごめんね。 歩夕ちゃん。 つい ビックリして！」

「ゴメンじゃないわよ。 声一つ 聞き分けられないなんて…
それでも私の騎士。」

だから… 確かめたかったから、と 何度も言いたいけど、無理っ
ばいね。

「すみません。 で… なんでここに？」

その問いに 歩夕の顔、体全体に 少し照れが 混じる。

「ちよつとした サプライズよ。」

「サプライズ…っね。 けど ここに居るって。」

「それは あんたが居る場所 探っただけよ。」

そう。 っつ 言いたいけど 結構 ビックリしてるんだよ。 つい
幽霊かと 思っただくらい、ね！ ま この時期ですから。

「うち寄ってく？」

「いや 今回は遠慮させてもらっわ。」

「残念。」

「何よ。 変なこと考えてた？」

変なこと？ 何言ってるんだろ。 話しの先が 全く見えない。

「うんうん。 違う 歩夕ちゃん 病気で 入院してる間 皆心配
してたんだよ だから 元気なっった姿を 皆に、ね！」

「別に 頼んでないし…。」

「頼もつが、頼まないが、心配するのは、皆同じだよ。だって歩夕ちゃんは、家族だから。」

ちよつと照れる／＼ あんな 笑顔 反則よ。

「けど…今日はホントにいいの、誘ってくれて、実はまだ、完全じゃないから…けど、学園には、また通い出すわよ…。そんな時は、覚悟しときなさい!!」

覚悟ねえ。分かりました お嬢様、なんてね!。そう、心に新たな誓いを、刻んだ、七夜だった。

「歩……る……ちゃん?」

少し目を、話した時には、歩夕ちゃんの姿は、なかった。

「あ……れ? 帰るなら帰るって、一言残しても…。」

ぶつぶつ 愚痴りながら 一人帰り道。 日が入り 徐々に 闇が消されてゆく時間帯 現在 午前5時55分。 うわっ!! ぞる目だ。 いいこと あるのかな…。 うん ま たまたまだよ! 絶対… 絶対 うん 絶対。 一人 道端で 身振り手振り、他人なら見れば…。 おかしな人が、変人 扱いされであろう、動きをしているのだ!。 『病んでるんですか?』 『間に合ってます。』 一人ポケツツコミを していると 時間の経つのを 忘れ、家付近まで 近づいて行く。

「うん? 何か振ってる音が、する。」

少しずつ、少しずつ近づくとつれて、音と勢いは、近くに感じてく

る。

シュツ… シュツ…

刀？ 誰が… よく見えない…。 って 自分の家なんだし コソコソする必要はないよな。 『一人こっそり覗くとは 趣味を疑いますな。』 趣味じゃないし。 ま 気になるんで…

「そこ！！」

足元にある 小石を足から 自分の目の届くところまで上げ 取り、投げる。 この行程は 目に見えぬ速さ。 数えるなら1、2秒 いや それ以上と言える程のもの。 …が 七夜も負けじと 持っている 先程まで やり投げで使用していたタオルを 小石が飛んでくるところに広げ 我が身を守る。 そして一言。

「タオル守り - タオルディフェンス -」

ボンッと ただ虚しい音が 聞こえる。 この音じゃあ、流石に相手も 気になったのだろうか 音のなる方へ…。

ざっ、ざっ、ざっ 七夜の方に 近づく… 足音。 七夜も 少し緊張の表情を している。 あれ！？

「あるじ？」

ふと 顔を出したのは 俺の妹という設定の… で、俺、イーターが おてんば娘と呼んでいる… 女の子こと フォルテ。 なぜか 髪は結わいていない。 つまり 髪が垂らしている状態な訳なんだが… 別人を見ているような… いつもは ツインタール（肩位

からの状態。… なんだけど… それもまた 彼女らしいというか…
かわいいというか… なんだか落ち着くのかな。

「何で こんなとこにいるのです?」
「朝の散歩ついでに…。」

ふーん、なんだと言いたそうな 顔してるけど… 座りばなしじゃ、
まずいから 立とう。

「よつと…。」

「うわぁ… 急に立たないで くださいよ!!」

「ゴメン。 どうしたの? こんな時間に…。」

「まあ… たまには体を 動かさないと 活けない気が したもので。」

「で… 刀を振り回す、という訳ですか?」

はわわ…。 慌てて隠すも 長いので 大した変化はないというこ
とが わかる 後ろからによるーんですよ。

「そんなことを 隠れてやってるとは… 知らなかったな! もし
かして… このこと俺以外に 皆知ってる?」

「…はい。」

コクリ縦にうなづくフォルテ。 他に何か言いたそうな… 顔して
るんだよね。

「他に 隠し事してない。」

「はひっ!…。」

やっぱり動揺してる。 もうちょい聞いてみよう。

「刀捌きが 初めてとは 思えなかったけど… まさか… 宝石二つも使うはずないしな。 というか 手に入れるの不可能だもんね。 一位にならない限り…」

「あわわわわ…」

「本当のこと 言うてはくれないかな？ どうやって手に入れたの？ 赤い宝石・アント・を…」

推理正解かな。 フォルテも随分 慌ててるし。

「どうして… それを…」

「匂い…ま 俺も伊達に 宝石のこと 調べてないから、さ。 区別が出来るように なったんだよね。 あと 一つも答えてくれると うれいんだけど…」

無理かな？ この落ち着ける雰囲気じゃないしね。 また 後で… 聞こう。 その場から 立ち去ろうと 右足を軸とし 半回転そして フォルテを背にし 歩き始める… 玄関まで。 刹那 大きな声で叫ばれる。

「待ってください… 待ってください 主!!！」

ビクツと 七夜の背中が 動く。 まるで脅かされたかのように。 大声を 上げた直後のフォルテは 息を上げていた。 はあ… はあ…、と。

「私は アントを 実力で手に入れたのです。」

「実力？ だけど 君の結果は…」

「知ってます、 三位でした。」

「宝石とどう関係が…」

「あの後 榛原先生から アントを 戴いたのです。」

あの人…。 お人よしだなあ。

「誰のか 分からん宝石が落ちていた。 お前いるか？」

「で…。 握らされたのです。 その後 いろいろ落とし主を 自分
なりの捜し方を してみたのですが…。 結局見つからず…。 で 持
つていても仕方ないので 私が 使ってしまったおう！！ となって
今の私に なったのです。」

途中から 胸張って言ってませんでした？

「ねえ…。 そのアント いつ頃拾ったの？」

心当たりが 少しある七夜は フォルテの肩を 掴み 問い掛けた。

「主…。 まず 肩が痛い…。」

「ごめん、ごめん。」

つい 力入れ過ぎちゃった。

「記憶だと 一年生 三学期の中間試験の結果が でて二日後の放
課後です。」

うわぁ…。 ちょうど探してたよ その時。 ま 本当のことを
打ち明けよう。

「実は…。 それ…。」

「私が 落とし主なんだよ！！」

背後から テンションの高い声が 二人を驚かす。 この感じは…。

「姉さん!!」

「姉さん?…。」

「ただいま」 なーくん。」

この声の主は 旅に出ていた 時家 長女こと… 時 志恩である。文武両道かつ頭脳明晰。かつては 夢ノ風最強の称号を 持っていた人である。 抜群なプロモーションと美貌とケモノ耳?。もし俺が 違う出会いを していたら呆気なく恋に落ちていただろう。というくらい… 一言言ってしまうと 非の打ち所が見当たらない人なのである。… とにかく テンションと誰にでも手を差し出してしまふのが 姉さんなんですけど、 現在は 科学者です。確か前は… 学校の先生をしてたんだっけ?

「姉さん… なんで!?!」

「ちよつとした 有給休暇だよ ねえねえ」 その美人さんは

どなた?」

指指す方向は フォルテです。 フォルテを、初めて見る珍動物かのように ジロジロと体を 眺めている 志恩。

「そんなに 見つめられると… / / / / /」

「動かないで!」

「はっ… はい!」

（また 始まった…。 姉さんの癖。 当分は終わる気配がないな。）

「はい。 終了。 お名前は? いや 当てちゃうね フォルテ

ちゃんだよ。ね。」

「なんで私の名前を…。」

「ふっふっふ…。お姉さんをナメてちゃっ困るよ。」

じゃじゃじゃあーん。『誰でもお名前分かつちやう君』。だよー！　うわあ…。この展開は予想してなかった。某キャッツフォームブルーロボットみたいだな。

「立ち話もなんだから家に入らない？」

「あ…。うん。そうしよう。」

なんかリズムが崩されていく。

「ねーなーくん。朝ごはんは？」

「えっ…。食べるの？」

俺ったらなんで当たり前なことを聞いてるのやら…。

「当たり前だよー！　朝食食べないと力が入らないんだから。」

机をバンバン叩くいい大人。さっきの全部取り替えようかな。

「…で何食べたいんです？。」

「久々のなーくんの手料理だから…。おまかせにする。」

なんて眩しい笑顔なんだ…。ふう　作るかな！　たまには腕に
よりを　入れて！！

「…よし。姉さん！　出来ましたよ。」

「うわあ…。！　すごいなーくん」。にしても…。作りすぎじゃ

ないかな？」

流石 腕によりを かけた七夜、は 机に乗り切らない程の食事を 用意していた。

「あはは… ちよいとやり過ぎたかな？」

「うんうん。 大丈夫だよ。 いいよこんぐらい派手の方が。」

喜ぶ志恩を 相席で見つめる七夜。 机に並ぶ料理は 次々に 空になってゆく。 よく入りますね… 何回もこの光景を 見ているハズなのに 何故か慣れることできない、姉 志恩の食欲旺盛の凄さ。

姉の発言によると… 『だって すぐにお腹減っちゃうんだもん。』

あんな子供騙しの量。』 とのこと。 子供騙し?! いやいや ちようどいいよ、貴女が 異常なのでは ないかな。

ガチャと リビングへと繋がるドアが 開く。 お相手は…。

「おはよ〜。 えっ!?!」

朝に弱い イーターの視界は ボケボケ。 眼を擦りながら リビングをふらふら、歩き回る。 七夜のところにたどり着くと 薄れていた 視界が全開に広がる。

「おはよう! イーちゃん」

「えっ… … えっ… … なんでいるのよ〜!」

こら イーター。 人に指指しちゃ、ダメだよ! イーターの顔は 驚きのあまり 顔色がすごく悪そう見える。 まるで 怖がつて いるかなように…。 ま イーター自身あんまり 姉さんのこと、

好きじゃないからね。昔よく可愛がられてたから（志恩の趣味の餌食に…。それが、トラウマに。）

「あわわわわ…。」

「すごく顔色が悪いけど…。ピタッ」

「ピヤッ…！」

そのまま 少しの間 イーターは 別の世界に 旅行に行っていた。
あつ 死んだ訳じゃないんだからね！！

「ねえ〜 なーくん。イーちゃんどうして 動かないんだろ？」

「たっ たまま 寝てるんじゃない！」

必死覚悟の言い訳。

白目向いたイーター。

ハテハテ顔の志恩。

冷や汗だらけの七夜。

なんかの条件揃った！！…！…！ けど 何もでません。 だれか 俺を
ここから 連れ出して…！！ その願いが まさか… 叶うなんて、

「うー 頭痛い。」

「ご飯！ご飯！…。」

「おはよう 母さん」「あら！？」

さっきと同様 母も驚いている… かと思いきや…。

「今回のくらい じっとしてるの？」

すたすた 歩き冷蔵庫に 直行 中から水を 取り出しコップに

注ぎ ごっくん。

「そうだな。特殊な何か。起きない限り何処にも行かないよ。
あつ！学校に行ってみようかな。久々に！制服はまだま
だ入りそうだし。」
「はは…」

ジトー こちらを覗く 鋭い視線… あつ フォルテね。タイミ
ング逃したね。まあ よくあるよね…。そう心におもった七
夜は 手招きを フォルテにする。その後と言ったら 尻尾振っ
てこっちに 飛びついてきました。

「なんか久々だよ。家族全員で 食事するのって…。」
「これを 一家ワンワンって 言うんだよね！」「」
「そこは… 一家団欒でしょ。フォルテ。」
「えへへ…。そうだった。けど もう一つ声があったよ。」

うん？ フォルテとトーンが 一緒というか似てる人といったら…。

「姉さん。」
「あれっ！ ばれちゃった。声合わせたのにな。さすがな
ーくん 耳がいい！！」

食事という楽しい時間は あつという間に経ってしまふ。ま 滅
多に味わえないものだからかな。ふと 一人 家事をしながら
思った朝の感想。ほかあまり思い出したくない。不思議な内
容ばかり。よし。時間は、つと…。時計確認 現在午前 7時4
0分。間に合う。支度しないと…。

「準備完了。」

みんな呼ばないと。

「みんな準備はいい。」「コッコッオツケー」「」

えっ 四人の声が… まさか本当に 姉さん、学校に 行くのかな。

「すみません 主。」

「はあ…。」

「悪い悪い。」

三人までは 無事!? なのか というか 二人目以降から なんかあったのと 言いたいくらい 表情が 暗い。 イーターは分かるんだけど… なんで母さんまで? にしても 姉さん出掛けるのかな? 聞いてみよう。

「ねえさ…。」

軽くドキドキしていた。 姉 志恩の制服姿は 何度も眼にしているハズなのに… 初めて見るかのような…。 いやいや 気のせい、気のせい。

「じゃーん どお? 私に惚れた?」

「そんな… そんなことより 早く出て下さいよ。」

「はあーい」

全員が 外に出たことにより 家の鍵をかける七夜。 家の鍵は一本しかないもので…。

「じゃあ 私は…。」

母は うちらが行く道の反対側に 歩いて行く。

正直言うと 今日ほとんどテンション低いよね。 イーターに関して。

姉さんについては 引っ付きもつつき。 他人の視線が 痛いです。朝から目障りなんだよ。とか 言われそう。 はあゝ

「どうしたの皆 テンション低いねゝ」

「いつもこんな感じだよ。」

いや 今日だけかも…。

「ん… なんか騒がしいなあ…。」

学園の校門辺りで 男女問わず わんわ吠えてるなあゝ。

「ちよつと、見てくりゅー。」

「はやっ！！」

「ねっねっ！！ あゆるんだよ 帰ってきたんだよ。」

こつちもこつちで 騒ぎになりました。 姉さんが 現れたことにより…。 人が 集る。 その場を立ち去ろうと 力を使おうとする。 人の勢いに負け 流される。 行き着く場は 歩夕のとき。…にしても なんかおかしいでしょ。 たまたまとは とても言えない。 あんな流れで 彼女のもとに着くとは…。

「待ってたよ。 我が騎士 久遠。 今日は 楽しい一日になりそうね。」

ははは… 一人朝から 二時まで 悩まされる七夜なのでした。

第十一話 「再会と思いとシオンの帰宅」(後書き)

どうも はじめまして クウクにゃん!!と申します。

一言言わせてもらおうと…「」愛読ありがとうございます。 そうでない方も ありがとうございます。 m () m

やっと 後書きを 書くことのできるレベルになりました。 これこれ、これで… 十一話。 あっさりここまで 進んでしまとは、思っでませんでした。 初めての作品が なのはの二次創作つてのは…。

まあ… それは人それぞれ!!ということだ!!

一つ皆さんに 詫びをいれますが… 今回… テーマとかそういうの用意してないんですよ! 即興・アドリブ…で 作っちゃったもので…。

「だったら やらなくてもいいんじゃないね!」

いやいや。 急に書きたくなっただから… あっ!!

と まあ… こんな感じなんですけど…。

いろんな人に 指摘されそうだなあ…。 けど気にしない。 誰かが言っでたなそんなこと…。

では… 今回はこのへんで なんかグダグダだったけど… 次やる
ときは 完璧に やってやる〜〜！

感想の方もよろしくお願いします。 m) | ・ (m

第十二話 「鬼と取り付きと新しい仲間」

「ふう…。何とか振り切れた…。」

俺こと 時 七夜は 一人の女子に いや… + みたいなのが
ちよつとした事件を 起こしてくれた。 そのおかげで 今 こう
して一区切り、振り切ることができた、というのだ。 本当に苦労
した。 逃がっている途中 姉 志恩は 姿を 消し。 行方不明、
残っているのは イーター（屍状態）、フォルテ（テンションMAX
状態）、そして… 俺（仮死状態）という訳なんだけど 俺…仮
死状態…。

バタバタ…。

複数の足音、響く声、物陰に隠れる三人。

「行つたな…。 二人とも…。」

廊下を走る大群を 見送り 場所移動を する予定の七夜は 二人
の事を確認。 二人の表情は 疲れ果てて 動けないと目が訴えて
いる。 イーターは 分かるのだが、フォルテは まだ… いや。
狙っているのは 俺だろう。 関係のない二人を 教室に戻した
方が いいな。 こんな全校逃避 - 鬼ごっこ - じゃあ… 仕方な
い。 なんとつてこのゲームが 始つたのは 今から数分前のこと。

「今から 全校逃避 - 鬼ごっこ - を やりましょうか。 逃げるの
は 貴方だけ！ そうね… 捕まえた人には ご褒美をあげるわ。」

この学園限定の特別のご褒美を、ね！ 制限時間は 今日一日。
まあ 最終下校まででいいかしら？ 何使ってもいいから この
… 時 七夜を捕まえなさい！！」

「えっ…。」

「貴方に 口出しする権利はないわ…。 今から一分待つてあげる。

さあ お逃げなさい。」

「そう。 させてもらうよ。」

という訳なんです。 理由なんて 分からないし。 なんのためなのか…。 どうして 俺は 二人を仲間に していたんだ…？という疑問も考えているしまつ。 普通に 考えれば、俺を捕まえるチャンスなんて いくらでも… あるわけなんだし。

「いたぞ！！ 皆のもの であえええ！！」

「あらら…。 見つかつちやつた！」

普通に 廊下を歩いていました。 不注意ですみません。 うん？

皆 手に何か 持ってます？ ああ… そんなこと言ってたな…。
あのお嬢様。 ていうか 決めることないのか学園祭についてと
か… ね。 えっ… 今日つて 本当に登校日だったつ。 7月3
1日…。 うーん… なにか忘れてるような。

「おらあああ！！」

「てりゃあああ！！」

学年男女問わず 七夜を目標に 定め走り 武器を振りかぶる。 その様子は とても醜い、自分の欲望を 叶えたいというのが見え見え。 相手の軽いスイング とても弱々しい。 見てることつちが悲しい気持ちになる。 だから 醜い固まりを 俺は 満たしてあげたいと、今の小刻みの動きを 避けた時 ふと、そう思った。

「走りまではよかったけど… 其後の動きがもうちよい力が欲しかった、かな。」

「グツ…。」

「逃げるより…。鬼を全滅させたほうが…。はやいんじゃ。」

時 七夜。 そのようなことを考えても、鬼は全滅は絶対に消えることはありませんので…。元氣いっばい、鬼から逃げましょう！！

アナウンスが忠告をしている。鬼は消えない、か。つまり最終下校まで戦えってことか…。最初からそんな予感がしてたけどまさか予想が的中するなんてね。

「さあ… 行きますか！！」

あんまり人、傷つけたくないけど。仕方ないのこと、… あれっ元氣いっばいかあ。どこかで聞いたことあるようなフレーズ。

「移動！ 移動！」

現場を後にし七夜は廊下をひたすら歩き、あまり人が来ないところを探している。隠れるなんてほんのちよい、なんせ全学年がうろろろしているのだから、まるでゾンビ。ただ出会ったならその場で始末しなくてはならない（みねうち）。

現場 七夜は2階 つまり三学年のエリア内 ここで出会った鬼は約30人くらい。ほとんどの人が受験生だから体が鈍っている、まああつさりとうちも来年こうなるのか、と疑問をもった七夜のテンションはがた落ちだった。

カツ… カツ… カツ…。

「うん!？」

三学年を クタクタに 捌き終えた 刹那 リズムのよい 足音が 耳に入る。そして 音のなる方へ…。

「時 七夜 貴方を 頂戴しに参りました。」

「フォ…ルテ。」

視界に 入った学年は 二年… 六組… 二十八番… 時 フォルテ。 待ってよ フォルテは そんな顔をしていない。 もっと… もっと… 明るいハズなのに 今日とはとても暗い顔を している。

睨む碧眼の瞳。

手に持つのは 朝見た 刀。

そして 髪型が 違うフォルテ。

「お前は… 君はフォルテ…？」

信じたくない… あれが フォルテ。 さっきとは…。

「参ります。」

掛け声ともに フォルテは 姿を消し 再び現れた時は 七夜の後に立っていた。…が その後の行動が 発生しない。 俯き肩を 小刻みに揺らして… 何かを 訴えている。 声に為らない 弱々しい…。

「えっ…。」

抱きしめられた…。

無言で ただ… 抱きしめられた。 ギュウツと強く… でも 痛くない。 痛いのは 内側の方で、ものすごく罪悪感が 湧いてきて… 俺も一緒に 泣いてしまいたい。

ブスッ。

「……………」
「……………」

嗚呼 そうか… 油断しちゃった…。 あの位置に 刀置いちゃうんだもん。正直やる気が、ないのかと油断してたけど… 隠しナイフが… あったんだ…。 気づかくなつたな…。 これが… 終点 - 死 - か…。 はは… 真っ白になっていくなあ…。

「さあて 持って行きますか。」

息絶る七夜の元に 近づくフォルテ。

「偽物だ…。隠れてないで姿を現してください。」

「正解！ さつすが！ 俺の妹だね！」

横になっているのは 七夜の死体。 死体は七夜の顔を しているが偽物、 本物は 近くの階段に 座っていた。

「どうして…。」

「まあ これ！ 紫の宝石 - ロスト - 身代わりを作るなんてことが 出来てしまう優れもの。」

「そんなのは リストには…。」

「うん。今創ったんだもん。」

「短時間で… できるものでは…。」

フォルテの反応は 予想以上 まるで興味津々。 欲しいが… 態度で分かる。 醜い…。 確かに欲しい物が無くなると 人間どうなっちゃうんだか…。

「俺なら 出来る。」

一言言い切る。 まるで 自分以外誰も 出来ないみたいな言い方。 相手に乗せる一つの策。 フォルテは 絶対に乗る。 確信ができる、 根拠はないけど…。

「それを 私に…。」

「じゃあ 一つ質問させて… 君フォルテじゃないね。」

「何を言っている？ 私は私だ。」

「見え透いた嘘を ありがとう。 本物は どこにいる。 何企んでる？」

ズバリ偽物と 推理する七夜。 が… 匂いはフォルテなのだが、形態が違うため、ふと七夜は… 中に憑依しているのでは？、と。

「だから… いや、気が変わった。 それ渡したら教えなくもない。」

彼女の笑みは 絶対に何か企んでいると 分かりやすい反応を示してくれた。

(これ 渡すか…。)

「仕方ない。じゃあ！取ってこい！」

ガラツと 廊下の窓ガラスを開け 空に宝石を 放つ。綺麗な放物線を 描きながら下に 落ちてゆく。それに反応するかのよう
に フォルテも窓ガラスから 取りに行こうと 足をかけたところ…。

「何!？」

「本体返して 貰うね。」

そう 飛び降りる寸前の彼女の胴体を ギュウツと抱きしめ ひと
笑み浮かべる。刹那 ポツケから宝石を 取り出す。

「よっ… っと!! やっぱり取り付いてたね。」

「あ… ああ… 見るな!! というか 何をした。」

「こっぴつこと!!」

右手に 橙色に 輝く宝石あり。

「これは 橙色の宝石・リコ・ まあ 捕獲専用みたいなもんかな。

「これも今、ね!」

「よくも… 私をこんな姿に…。」

彼女は よっほどのこの姿が 見られたくないのだろうか。 手でい
ろいろ隠している。

「かわいいと 思うのに。」

「な……………」

凍りつく 彼女の顔。

「ところで 落ちた宝石取りに行かないの?」

「あっ！」

驚きの表情。　もしや　今ので　忘れてた、とか。　まあ　これも一つの罠なんだけど…。　そんなことを知らず知らず　彼女は　宝石の元へと　飛びたつ。

シユタつ。　彼女の綺麗な　降下。　着地もすんなり…。　初めてやるとは…。　思えなかつたり…。　七夜心からの感想。

「きゃあああ…。」

予想通りの展開。　地面転がっている　橙色の宝石。　その名は『リコ』。　その能力は『代わり』と『捕獲』の二つの力を秘めた代物。　…だが　それを扱えるのは　七夜だけ。　つまり、彼女は　捕獲された！　ということ…。　七夜の意味で…。　そんな時…。

「うおおおおお！！」

廊下を　駆け抜ける男衆。　がたいが　とてもいい。　この体を求める部活は…。　ラグビーか？　それとも…。　いや！　あんなにいたかな？　なんか俺の知ってる部活が　混ざってるような…。　七夜の予想再び的中。　だんだん　近くに…。

「どうしようかな。　あっ　ここから降りよう。」

目に入れたのは　捕まった少女。　どこから降りたのかは…。　そこ！　手の届く位置、やや高い位置、けど…。　大丈夫！！　そう　言い聞かせた七夜は　その場から　飛び降りる。

「よっ…… シュタッ」

地に着くなり 受け身をとる。 おお！！ 出来た。 あっ 助けなくちゃ！ 捕まえたのは 俺なんだけど。

「なに…！」

「解除するから…。 そのゴメン。」

捕獲に ついて謝り。 解除する。

「君… 帰る場所とか、ある。」

唐突の質問に 驚く彼女。 今日で この娘は 何回驚いたかな…。 全く 驚かす予定は ないんだけど… 驚くほど 初めてなこととか いろいろあるからね…。 今 もしないって 言われたら絶対に 驚くもん。 俺だって。

「ない。」

「ないの… かあ。 えっ…！」

縦に 頭を頷かせる少女。 …だから フォルテの中に…。 だったら この娘の居られる場所 作らなきゃ、ね。

「だから 何よ…。」

「いいや…。 なんでも…。 ほら、逃げなよ！」

畏は 解除され 少女は逃げることを 許された。 のと… 七夜を捕まえることもできるチャンスも 手に入れることが 出来る状態になった。

「ねえ… 七夜。貴方はホントは 家に来る？ とか言いたかったんじゃないの？」

「アハハ…。分かつちゃった？ すごいな まるで俺の心がまる見えです、みたいなの…。そうだよ。確かにそう言おうとしたよ…。でも 迷惑とか…。お節介や同情なんて 言われるんじゃないかと思つて、 だから言えなかつた。」

「別にお節介とか思つてないから！、 いいよ。その件乗つてあげる。」

「よかつ…。」

「ただし！ あの娘の体を借りるけど！ とところで 救いに行かなくていいの？」

「ああっ！ 忘れてた！！ どうしよう…。今頃 化け物みたいに なつてないかな？ よし 行こう！」

「ねえ 君は フォルテ以外の体を利用することって 可能？」

「ああ 出来なくはないけど…。」

「よし。 だったら 俺の中にしばらく入つていてくれないかな。」

慌てた俺は つい自分に 入ってくれ！ などと言つてしまつほど だった。 今は仕方ない。

「はあ…。 また鬼だよ…。 逃げるよ！」

鬼の発見、および目撃されたされた 俺はその場から 逃げようと 彼女の手を握り走りだす。 ただ 彼女の腕を 強引に引っ張つて ただ 誰もいなくて 休める場所を…。

そんな場所は あるのか…。 わからないが ひたすら歩き、走り続けて いる自分がある。

あるはずもない 樂園を…。

「ちょ… ちょっと痛いよ！」

「ゴメン…。 つい。」

「ここなら ちょっと試しておきたいことがあるからやっていい？」

「俺に入るってやつ？」

「うん。 会うか合わないか試しておかなくちゃ！」

誰も来ないと判断した 彼女は 俺に同意を求めてきた。 答えは もちろん分かりました。 と答えた 刹那 目の前にいた 彼女は消える、いなくなった不思議さから 俺はひたすら辺り探す… もの もちろん返事なんて もんはなかったけど…。 けど 体の調子がおかしい？ さっきとはまるで…

重りを付けた並の体のだるさ。

風邪をひいた みたいに身体全体が とても熱い。

極めつけは 目の前が 真っ暗になったこと。

目を醒ましたら 周りには 倒れた 学園の生徒達、（学年問わず）が 百から二百は 軽くいるだろう、か。 軽い予想だけ…。

「これで… 二百四十九目だよ。」

『そんなに！ けど なんて こんなに沢山集まって 一人でポコポコにしちゃったと！』

「うん。 何の足しにもならなかった。」

俺の意識無しで ここまで動いている自分を見たのは 初めての七夜（皆そうさ！） この娘 人の中に入ればそこそこ喋るな。 まあ 外に出ても 原形かないんじゃ。 誰も気づかないよね。 けど なんて 俺気づいたんだろう？ 不思議だなあ…。

もし 他人がこの娘の姿が 見えたのなら どんなりアクションをとっているのだろうか…。 かわいい顔してるから 絶対 このアイドルになれると 俺は思う。 一人将来を勝手に決めている七夜なのでした。

「にしても あんたの体って 使い易いわね。」

「まあ…。」

なんか 体のことを 褒めてくれてるみたい。 うれしいけど 他人に褒められるなんて しょっちゅうだったけど この娘の反応は へんなどこについていてなかなか 面白い、と心一人笑う 七夜がいた。

『どう、体の方は？』

『いい感じじゃん。』

適合らしい。 そうかい。 ブンブン腕、足を 縦横無尽に振り回したり、蹴り回したり。 もの凄く喜んでくれて なによりです…。
彼女は 廊下を堂々と歩いている。

カッ… カッ…。

一様歩いてるの俺ですよ。 刹那 俺達は罫に ひっかかったらしく、鬼に 周りを囲まれました。

さあどうしましょう。

『今回は 君の出番だね。』

「今回『も』だけれど、ね！」

『この体 大事に扱ってね。』

「承知」

この忠告を 了承した言葉とともに 一人生徒が 中を舞っていた。
綺麗にスクリュー入って 着地に期待を してみたいですね。
(何かの実況かと思わせるかのようなリアクション)

「次！」

また 一人跳びかかってくる。

瞬殺。 これまた呆気ない。 残骸。

「ねえ 一斉にかかって来なよ！」

ふと笑み 浮かべ、右手の人差し指と中指以外をたたんだ状態のモ
ノを 喉元に当たるか当たらない位置に、そして 右から左へス
ライド。

それが 戦いのゴングとなった。

第十三話 「乱闘と転移と誕生日・ハッピーバースデー」

ドスン、ドスン、ドスン、ドス…。

「やっぱり使い易いは 君の体。」

『それ！ 何人殴ったり、蹴ったりして 分かった？』

「一人目かなあ〜。」

『こんなこと 自分の口が 言ってるとは思いたくない。』

現場は 倒れた学生達。 フォルテが 一人ここまで やりかしている。 後で どれだけ謝るだか…。 気が引けてくるよ。 まだ 五十人は 軽くいるな。 二人 洒落臭いと思いい初めているから…。

「ねえ 私の武器は…?」

『あそこ!!--』

指差す方向は この距離から 約20メートルくらい 離れた所の窓際に かけてある。 誰も気づくなと思つた 刹那 学生Aはその物に 気づき 触つて確かめる。 これは 武器になると思つた 学生Aは 武器を持ったまま こちらに向かつてくる。

「私の… 武器を… あんな汚い、汚れた手、汚されて… たまるか!!--」

『同じ 言葉を 三回も違う言い方を よつぽど大事な 物なんだな。』

「あの刀・子・物なんかじゃない。 私の大切な 家族だから!

!!--
『家族か…。』

あんな熱心に 言われたら言葉も 失うな。

『分かった取りに行こう。 持つてる子から 取ることなんて、できるでしょ。』

「あれ… 実は… 魔刀なんだよ… ね。 うち以外の人が 触るとあんな… 感じ!」

『あれっ。 さっき刀持ってた子とは 桁違いなくらいの 体と大きさ。 あれっ! ホントに?』

「分かったでしょう。 本物なんだよ。 だから 一般人が 触るとあんなコントロールの出来ない 怪物みたいに なっちゃうの。」

一人 見ない間に あんな化け物みたいになるなんて…。 俺が あれを手にしたら あんなのになっちゃうのかな。 化け物を 目にした七夜は 少しの恐怖が 微かに体を 奮いただせていた。

『質問して…。』

「大丈夫! あんたの体は 私と少し似てるから あんな化け物みたいには ならないわ。 まずは あれを倒さないと…。」

『その言葉 信じるよ…。』

恐怖の混じった声を 彼女に届ける。 俺は 初めて…。

「ああ どうやって倒そうかな。 あれ振り回されると結構困るんだよね。」

『そうなの?』

「まあ 見といて!!」

体を 前に少し傾け 勢いよく 走りだす。 大物以外 目に入っていない様子。

「たあああー!!」

ブンツ！ 大腕を振り回す。 当たることなく その場から軽くジャンプ そして 胴体に一撃。 だが… 相手は パワーアップして まるでダメージがない。 宙に浮きながら 七夜は… 「それは分かっているが…」 意識は俺ではない。 そう思った刹那 意識のない俺の体は 相手の体を蹴り 反動で 相手との距離を 計る。

『どうやって… 取るき?』

「うん? 力づくに決まってるじゃん。」

力づく? まさか 今の本気で やってたつてこと… 疑いを少し持った 七夜なのだが… 疑いはもっと酷くなる。 忘れてるか、心配なんだけど 一樣 鬼に囲まれているってこと 彼女は気付いているのかな?

『ねえ… 君さ 囲まれているの分かってる?』

「あのさ〜 君、君、君って 私の名前は ティーン。 ちゃんと名前くらい 聞きなさい! そして、覚えなさい。」

突然 彼女に怒られた。 なんで 怒ってるんだろつ。 ここで面白い感じの鈍感っぷりの七夜。

『ああ… ごめん。 ティーン… ちゃん。』

「ちゃん!! 初めて付けられた。 けど… 歯痒い。 だから、 ちゃんは付けないで… 呼び捨てでいいから。」
「分かった。 じゃあ 俺は 七夜で…。」

よろしく、と二人合わせて その場に響かせた。大きな声で…。

「全く、雑魚ばかり集まって あの怪物まで たどり着けないじゃない。」

「おおおおおお!!」

「かかってきなさい!!」

雄叫びが 廊下に響く。 ターゲットは もちろん 七夜。

『場所代えた方が…。』

『どこに するき?』

「思う存分楽しめる場所があるよ! というわけで 俺に体返してもらおうね。」

「えっ!! どうやって!」

まあまあ と 言わんばかり… ニコニコした七夜。 ティーンからの質問攻めを 気にすることもなく 廊下を ひたすら走る。 右、左、直線、下りるとまあ ぐねぐねした道を 七夜は 猛スピードでこなしてゆく。 中にいるティーン、唾然。 私の知ってる以上のスペックと ぶつぶつ呟やかれているが 臆することなく進む。

「もう少しで…。」

光り輝く遠い 目標・ゴール…。

目の前に映る別世界。

ガチャッと ドアのぶを大胆に 開く。 その場は…

『…。 広すぎじゃない?』

「このくらい 広い場所の方が いいでしょ。」

ここ 現実いる場所は 体育館。確かに ティーンみたい
知らない広い場所に 連れ込まれれば…。誰もと同じ反応するだ
ろう。 ってくらい。 だけど そんな大きくはないけど。

『来たよ!!』

「今回は 俺が行くよ! 体をなるべく休めて…。これ終わった
ら フォルテ助けに行かなくちゃ、ね!」
『わかった。私はしばらく 休ませてもらうよ。』

七夜が 体育館に入って 一分が 経つか経たないかの時間に
鬼達は 体育館に乗り込んで来る。

あつ ちゃんと靴脱がないと… 汚れちゃうよ。なんて 気遣
う余裕が あるように見える。

「「おおおおお!!」」

「さつきは 違う人で ごめんね。」

ハア…ア…!と 戦う構えを とる七夜。 刹那 彼から流れ
る匂いが 変わる。 まるで 別人のように 生々しい血の臭いへ
と…。

『うぷつ…。なにこの臭い 気持ち悪い。 あんな 普通の匂い
出してた 奴が…。』

「ごめん。いつも構えると これで…! ああ 大丈夫だから!
あつ10秒数えてくれる?」

『構わないけど… なんで10秒?』

「それは あれっ! 倒すためだよ!」

力強い口調は 先程までなかった七夜だが、それは ティーンが
体を 使っていたことに原因が あるらしい。

自分の体。

自分の体。

自分の体。

と、三回唱え、自分に気合いを入れる。

「さあ ちゃっっちゃっか倒して！ 助けに行かないと…。」

『今の呪文は…。』

「おまじない！」

恐る恐る聞くつて… そんな…。

「大丈夫！だから！」

グツと 親指立て 安心感を ティーンに与える。 怯える子羊

のように… ブルブルと… 『怯えてない！』 って 言っと思っか

ら 表には絶対に言わないよ。

「じゃあ… 数えるよ。」

一……………

シュツ、怪物まで 駆け抜ける人影。 相手まで 急接近。 次！！

二…………… 三……………

ドンツ！、近づき最初の一撃。 速さ、力により 相手が 後ろ

に足を 引く、後ろに行くことを 計り七夜は 後ろで待機。

ドスッ！！、よろけ 隙ができる できた相手の背中に 再び一撃

を入れる。 今度は蹴り。 綺麗に攻撃が 決まったことにより、

宙に体が浮く。

四……………五……………六……………

浮いたことにより 七夜の顔は とても喜ばしく、少し 恐怖を
ティーンに与えていた。

ドス、ドス、ドス、ドス…。

怪物の体に 一発目の蹴り、これは ほんのちよいで 踏み台。

二発目 駆け抜ける閃光。 相手の体中を往復 だが… 今日

特別と機嫌が いいのか 倍回っている。 三発目 もう一回踏

み台。 今度は さつきとは 違う。 四発目 トドメの踵・かか

と・落とす！ からの…。

「何も ないよ！」

『えっ！ 実況したじゃん！』

「頼んでないし。」

ぶっつ、と 拗ねるティーン。 なんか、もう結構馴染んでる。

楽しそうに笑ってるよ。

『早く回収!!』

「うん。 あっ 元の姿に 戻ってる。」

早歩きで 目的地に向かう。 ガシッ、 確かに掴んだ。

「ほら!!」

優しく声をかけ 宙に 彼女の私物を 投げる。

「ありがとう!!」

掴んだ時には 意識がティーンに 代わっていた。

「ところで… あんた本当に 人間？」

『うん。 そうだけど… 人以外に 見えてたり…？』

「うん。 今の見たら、化け物とか…。 ていうか 何！！ あれ！！ 七秒で あいつ倒すなんて… 私なんか、倒すことできなかったんだからね！！ あんたのせいで！！」

「うわあ…。 めちゃくちゃ怒ってる。 そんなに 責めなくても。」

『けど 君の私物 手に戻せたんだし、ね。 痛み分けて…。』

「よくない！！ まずあんたが、ね！ 宝石を投げなければ よかったのよ。」

「そこから？ 声にはしないけど… あれは 仕方ないとした、言えないんだよね。 君から身を守るために。」

『そこについては ごめん。』

「なんか 素直じゃない！」

『実際、君達を 巻き込んだのは 俺なんだから。』

「いいよ。 今回だけ！ 特別。 次からは… ないように、ね。 相棒！」

『あ… あ… あいぼう？ あはは…。 なんか話進みすぎじゃない。 まるで これから 俺の中にいるみたいなの。』

「うん。 よろしく。」

「よろしくって！ フォルテはどうするの 体使わないのって… あっちに負担かけるより 俺にかける方がいいか…」

体育館の真ん中 一人上を見上げ ふとため息を つく。 ああ
鬼ごっこ中だった、そのもうちょっと 後にしようかな。 フォ
ルテも助けてないし。

「フォルテ、助けに行こうか！」

ふと 目を閉じ、数秒間 心を 澄ませる。 開けた 時 七夜
に戻っていた。

『また…！』

このリアクション、いつまで 続くかな。

『そんなことより… 時間は… あと何時間あるの…！』

あつ！ 今 一瞬人の心が 読めたわ…。 訳します。（凄く強
調したところのみ）

『あと何時間あるの…！』あと何時間遊べるの？』と。

気のせいだと… 思う。 そう思いたい。

一人 その場から動けなくなるほどの… 発言。 ああ…何時か
聞きたかったんだよね。

「えっ…と 今は 午後 2時30分。 …で 最終下校が 6時
30分だから… 4時間あるね。」

『4時間…！！！！ 何して遊ぼうかな…！ あれもやりたいし、
これも…。』

テンションが MAXのティーンに 水を差すが… 目的が違う。
遊び！ではなく、 助けるのが 優先。

「ティーン。遊びは後で 今は この鬼ごっこが終わるまで 逃げなくちゃ！」

『じゃあ 後でつてことは 遊んでくれるの？』

「うん。約束する。」

無邪気な笑顔の前じゃ 断れないなあ……。まるで 子供みたい、うん？ なんかひっかかるようない……。何だろう？ 子供かあ……。

まあ あんな嬉しそうに……。初めてなのかな。

「ねえ ティーンつて 何者なの？」

『ああ……。私？ うーん。簡単に言えば、あんた達の言う……。ユ

ーレイつて奴。まあ……。神様の使い魔みたいなもんね。』

「使い魔つてことは 神様の命令で ここに居るつてこと……。用件は……。」

用件

(意味)

しなくてはならない仕事。また 伝えなくてはならない事柄。

そう言う意味なんです……。俺聞いちゃったんですよ……。その用件。

用件という言葉に ピクンつと ティーンの顔の一部である 眉が動く。だんだん顔の表情が 険しくなり、冷えた目で……。こちら睨むように向かって こう話した。(見えないので あくまで 予想です。)

『貴方を 始末しろと……。』

「え……。っ！ おおっ……。俺 なんか神様の機嫌を 損ねることしましたっけ。」

一様 使い魔さんに 聞いてみたものの。

『いやあゝ 神が決めることなんで… (笑)』

って ニコニコしながら言われた。 笑いことじゃないんですけど…。 これは 俺の生と死が 懸かった大事なことなのに、使い魔・ティーン・ときたら 私は無関係ですか…。 はあ…。

「この娘どうしようかな…。 違うところ行ってもらおうかな。」
『どういうこと?』

「つまり もっと 人の命を大事にしるってこと!」

「はあ… そうやって 大切にしろって言われても 私 わかんない。 だって 私は 命も、 体も、 人間が持つてるもんがないんだから そんな、 あんた達が 羨ましい、 そうやってすぐに命を捨てるあんた達が 羨ましくてしかたないよ。 本当にいい迷惑なんだよ…! 生まれること、初めて味わう喜び、生きる喜び! ああ… あんた達見ると腹が立つ。 そうやって… もろすぎなんだよ! 未熟者が いろいろな経験をして 初めて人という名前を持つことが できる… って言うのに 自ら死ぬのは 皆つまらない理由… 何がつまらないだ、 何一つ クリア出来ないくせに 簡単に諦めすぎなんだよ! 命って… もっと、 もっと大切なもんだろっが!…!』

ティーンの鋭い 叫び… 正直 応えるよ。 あんな 思いが… あったなんて。 俺も少し 言いすぎたかな。

「そんなもんか! 君の叫び。」

『なんだと…!』

「だから… そんな叫びは 俺に言う言葉じゃない。 世間に言うもんだ。」

『えっ!…!』

「君 体が持ててたなら演説してみたら？ きっとすごいことにな
ってるよ。」

…なんてね。」

怒っているのではなく。 If - もし - の話し、ってやつ。

「あと… ここから動こう。」

『ああ… うん。』

ここで 一人漫才してるように見えるが 大丈夫！ 心は病んで
いない。 ちよつと体の中にいる使い魔・ティーン - と話しをして
いるだけさ！ って 言われても… わかんないよな。 まず 使
い魔って何？ 言われそうだな。

ガチャと ドアのぶを押す。 周りは 少し静かになっていた。
なんせ、体育館にだいたい生徒が 倒れ眠っているのだから…。
現在 あれから30分過ぎた 午後3時。 安全な地帯を探しに
歩きだす。 にしても少しだけ暑く感じる。 言葉で表すのなら…
ムワア…ンって いうわけかな。

カツ、カツ、カツ…。(注：上履きです。)

いた！！ フォルテを見つけたことにより 足早に向かう。 待
たしても鬼。 呆れる顔…

「見つけたぞ…。 であええええ！！」

「また あの連中等か ほれっ！！」

鬼の掛け声は虚しく 一瞬で また滅ぼされる。 そして夢の中へ
…。 よし！ あと…。

「お久しぶりです。七夜殿。」

「たしか… リッキーさん。」

「覚えていてくれて 光栄です。」

「用件は 俺の捕獲ですか？」

突然の来客者 リッキー。霧島家に 昔から居座っている執事。主に歩夕の父 鴉 - からす - の担当をしている執事で 文武両道。容姿端麗。眉目秀麗。偉才秀才。

この人は 十歳で執事という仕事に就いたらしい。というか… 鴉さんに 目を付けられたらしい、…で 試しやらしてみたら 簡単にこなしてしまったとか…。まあ 俺は 歩夕お嬢様の執事というか… 騎士を やってるわけだけど やっぱり上手くないかな…。これが 天職と普通の人の差なのか！！ と思うつてたのは なりたての頃ね。とまあ こんな感じ。

「まあ そんな感じかな。」

「だったら 降参します。」

「なに！？」

「見ればわかるのですが 俺がこれじゃあ…。」

『なに諦めてるのよ！』

体は かなり無傷に見えるが 多分内側に 問題があるのだろう。

それは… 予想外の体力消費。

あれっ！？ 急に 息切れと、動悸 それと目眩が…。

はあ… はあ、はあはあ…。

ボタン。急に倒れだす 七夜。体内で 叫ぶティーン。だが 声は届くことなく。ただ 深く眠るだけ。呆れた顔なりッ

キーは 急に七夜の体を持ち上げ 担き、歩き出す。 何処に向かうのか。 解らない恐怖感が ティーンを 不安にさせる。 叫んでも 相手の方には 届いていない。

「よいしょ、っと こちら辺で 休ませてやるか…。」

リックキーが たどり着き、七夜の体を 置いた場所は 全く利用させていないと思われる教室。

さすがに私は 知らないわ。 というか、毎日来てるはずなのに、ここは…。 知らない。

「では…私は 失礼するよ。」

机と思われる場所に 紙切れにメモしたものを 置き リックキーは 外へ出て行く。

「久遠。 今日なんの日か 知ってる？」

「うーん。 世界が滅びると言われた日か それとも…」

「もういい。 そのネタ的な。 真面目に答えて、よ！」

「なんか忘れてるような…。 なんだったつけ？」

「なになに…！」

「やっぱり わかんない。」

「だったら！ 思いださせてあげるわ。」

ピタンっ！！

大きく振りかぶって ぴたーん！！ 効果は抜群だあ。

はあ…はあ…はあ…。

悪夢にうなされるかのような 嫌な感じ。そして現実と思わせるかのような 一撃なんだが…。犯人は もちろんティーンであるのだが… 理由は、虫が 止まっていたから始末しようとか…。ちゃんと証拠も 見せてもらった。かなりデカかった。そのおかげで 一つ思いだした。今日、歩夕ちゃんの誕生日だったというのを…。

「ティーン。あれから 何時間経った？」

「もう あと2分しかないぞ。」

そんなに 寝ちゃったのか…。リックキーに感謝しないと…。リックキーは…？

『あそこになんか置いていったけど。』

机の方に 指差す。 ありがとう。 七夜は心の中で 礼をする。

本当なら 口にするべきなんだろうんだけど、体が 上手く言うことを聞かなくて。

重い体を 引きずりながら 机に向かいメモを 手にし 黙読する。

『七夜、少しは 自分の心配しろ！ 今回お前を 捕まえなかったことに 感謝し、 こう思え 俺はツイてると…。 by リック』

メモに 残された言葉は 「ツイてる」かあ…。

「全く 俺って ツイてるな。」

声にし ふと笑みを浮かべた。 七夜の顔は 疲れているもど
こか 楽しそうに見えた。

キーン…コーン…カーン…コーン…!

終わりを告げる鐘。

勝ち残れたって ことか…。
ヨシッ…!

喜びのあまり ちょっとだけ 宙に跳んだ! そして…。

試合は終了。 勝者は 貴方のものですが… 至急 歩夕お嬢様
の元へ…。 彼女が 倒れました。 保健室に寝てるそうなので…
様子を見に行つて あげてくださいますの事を リッキーさんから
聞いておりますので。

アナウンスの人、ありがとう。

感謝の言葉を 胸に感じさせ、 歩夕お嬢様の元へ…。 と、そ
の前に!

「君 ここ…どこだか 分かる?」

『ごめん 分からない。』

そりゃあ そうだ… だって外から 見てないもんな。

「よしっ！　まずは　外に出よう。　あっ！　フォルテ…」

隣で　横になっているのは　何度も何度も　助けそこなった…
フォルテ。　まだ　お休み中ですか。　よく寝る子はなんとやらか
…。　あっ

「ねえ…　こっちに転移できる？」
『なんで…。』

「今だけさ…　こっちもいろいろあるから…　さっきのアナウンス
聞いたでしょ。　行かないと…　それと一つ願いが　ある。　その
体　元気づけといて！　約束だよ！」
『ったく　勝手に話し進めて…　じゃあない！　褒めた倒してやる
か…。』

再び　体をフォルテに　代わった事により、唐突の七夜の願い。
気分は乗らないが、できるだけのことをしようと決める、ティー
ンなのでした。

その頃　七夜は　というと…

着いた。　さあ…　入ろう。
ドアのぶに手を　触れる前に　手が動きを止める。　あれっ…　こ
の感じ　なんか、懐かしい。　最初の頃と似てて、　まあ、緊張な
んだけど…

ガラガラ。

スライドドアを　引き中に入る。　入るなり、湿布や薬品のスー

ツするような匂いが 鼻に入る、 ああ 保健室な匂いだ。 つと、
つい呟いてしまう。

ふう……。 あっ、じゃなくて！ お嬢様の様子を 見に来たんだ
！ そうだそうだ。 えっと……？

周りを見渡すと 一つ白いカーテンが 引かれている場所が ある。
そこに足を向け 歩きだす。 もちろん 正確。

「おっ…… いたいた。 まだ寝ているか……。」

お嬢様こと 歩夕は 白い清潔のベッドで スヤスヤ眠っている。
まるで 眠り姫のように……。 このまま 目を醒まさないとかな
いよね。 今の眠りだと 必然的にそう思っちゃうんだけど……。
とベッドの脇にある椅子に腰掛け 一人空想をしている七夜。

「気持ち良さそうに 眠るな……。 羨ましいよ。」

「……………」

「ん？ あれっ！ 久遠どうしたの？ そんなところで……。」
「リックキーに 行くようにと、ね！」

ふふ。 と寝起きの彼女が 笑う。 しかし 今まであんな無防備
の寝顔してたんだよな。 天使みたいなのに、今は……小悪魔です。

「ところで、 思いだしたよ。」

「ああ。 思い出したの。 聞かせてもらおうかしら、 貴方が た
どりのいた答えを……。」

「誕生日おめでとう。 お嬢様。 夢で…… やつと、 すみません
もっと早く 気付けば……、プレゼントも 用意できてたのに……。」
「本当よ……！ プレゼントもくれないなんて…… 一番貴方が 楽

しみだつたのに……。」

「すみません。」

「プレゼントは もう近くあるから いいわ！」

優しく 責めず俺を フォローする お嬢様。 うん！？ 欲し

いものが 近くにある？ 一体……。

「おじよ………！！」

いきなり。大事なものが 奪われた。

不意のことなので あまり分らないのだが。

俺は気になつたから…… 質問をしようと、顔を上げ 近付けたところ、目を閉じた歩夕お嬢様が 急接近、お嬢様に引き寄せられ、そのまま。 つまり……言葉を 入れ替えると、唇を奪われた。

「あつ………。」

………。何が起きたのか わからない！！ 誰か…… 知ってる人いたら教えてください。

届かない声の叫び、沈黙する部屋、 離させたこの敗北感 なんか儀式の材料みたいなのまた 揃った！！ これで 一体何が調べられるんだ？ ……って なに言ってるのやら。

「どうだった？ 私 初めてだったんだけど……。」

「……………」

沈黙の七夜。

人をからかっているのか マジなのかわからないお嬢様。

気付けば 外は茜色に 染まりつつある。 それは ガラスに反射して 入ってくる日差しで 判断したもの。

一瞬とは 儂いモノと 初めて理解した、七夜でした。

「帰らせてもらうわね。 貴方も お友達 待たせてるんでしょ？」

「あつ…… あ……。」

「じゃあ ごきげんよう。」

ムクツと起き上がって 一言言い その場から立ち去る。 長い黒髪は 歩く度になびく。 すれ違う時 黒髪から 匂う彼女の独特の香り…… それは やっぱり彼女のだと 核心した。 って 何言ってるんだか……。 まあ……今日という特別は、 どうも人生で一番喜怒哀楽してた一日じゃないかと。

白い天井を見上げ 背には茜、場が 保健室……って。

まあ 嫌いじゃないけど……。

ふと 思った時

ブルブル……。

携帯電話が 騒ぎだす。 今は、マナーモードだから、ね。

「はい。 もしもし……。」

「遅い！！ 早くこっちに来なさい。 今、二学年の教室にいるから、ちゃんと探しなさいよ……！」

電話の相手は 少し切れ気味のフォルテウィットティーンの二人、
といっても二人で一人なんですよ、彼女達。

「うん。 こっちも用件 今 終わったから、 行くね。 じゃあ

……！」

プツンっと 電話を切り。 行くための支度を し始める。
忘れ物は… ない、っと…。 隅々まで確認し 部屋を 後にする。
ちゃんと ドアも戸締まりも ちゃんとして。

「失礼しました。」

すっかり日が 沈み、辺りは 当たり前だが、真っ暗。
早く迎えに行かないと、どんな顔するか 分からないし。

「おーい!!--」

薄暗い学校の廊下を ただ走る七夜。 ほとんどの場所を 探し
たのだが 見当たらない。 ってことは あと一つだけ心当たりが
ある、 その場所は…今いる場所から 直線にひいてある廊下な
わけなんです、 けど 明かりもついていない 教室か! 本当に
いるのだろうか…。 ちよっと心配。

暗いこともあり 慎重に 進んで行く。
一つ目の教室…。 カーテンが引いてあり 真っ暗だが 誰か
いる気配が 感じられない。

二つ目の教室も 一つ目と同様。 そして 最後の教室。 そこ
にいなければ 何処に行ったのやら 探し直しに なるわけなん
です…。

最後ということもあり ゆっくり、ゆっくり近づき ちらっと目
を覗かせる、が… 誰もいない。

はあ… 探し直しかあ… 後ろに右足引き 半回転した 刹那…。

ドオン。 体と何が 当たって 尻餅をつく。 何と… 辺りが
真っ暗というのもあり 犯人が誰だか分からない。

「痛いじゃない！ どこ向いて歩いてるのよ！ 七夜！」

えっ 何故俺の名前を？ うん。 この声は…。

「ティーンか。 何処にいたの？」

「それは こっちの台詞！！」

衝突したのは 幸いに ティーンだった。 体は フォルテなんですけど。

「話しは 後で 今は家に帰ろう。 話しなら後で 俺の体でいっぱいしていいからさ！」

暗闇の中でも コクリ頷くのは 確認できた。

「あんま 長い出来ないから… ほら。」

「約束だから、ね！」

「……………了解。」

第十四話 「狂乱規律・フランティックリズム・と瞬く星・ティンクル・スター

「にゃあ〜〜！」

一匹の猫が 餌！か愛情！か構ってくれ！の三つのどれかを一人の女性に 向けて行っている。 …… が 残念ながら女性は 目を醒ますことはない。

猫は 「野生の知恵」というスキルを 発動させ パワーアップを計る、 上がったのは…

魅力、力、知恵 の三つが 強化された！

「ヨシッ！！ 行くにゃ！！」

自分より 遥かに大きい巨人に向かって レッツゴー！！

ジャンプ！！ 地面を 力強く 蹴り上げ上へと… 跳び立つ、勇敢な姿。 …… だが 一つだけ 自分の無力さを 知っている。

ぴよんぴよんと その場を 跳び回ることしかできないのだから！ 相手は 「ベッド」という特殊な壁を 通り抜けたところに 待ち構える… 神様な存在。

「いつか 越えてみたい壁にゃ…。 天地がひっくり返ったり、しないにゃ…。」

望んだとしても 決して叶わない夢。

だが… ここにいるのは、自分一人だけではないのです。 …… そう。 自分の立場が どれ程低いか…。 この家庭の中では

母>志恩>久遠>イーター>フォルテ>獣達>新入り達

という立場に いるわけで、 下から二番目にある獣達という枠は、全て 家に遊びに来るといっか 志恩のお友達な感じなんです
にゃ。

因みに新入りの枠は 基本僕で、 まず数年間 そこに定着させられて で時期が 来たら 獣達の枠に なるわけだから… 僕も 野生に戻るって 訳だね。 あっ 因みに 僕 男の子だから、
ね って 僕って 言ってる時点で 男の子だって、分かってい
人 多いよね。

まあ たまたま迷い混んだ僕に 餌や可愛がってくれて… 行く
ところも目的もないし…。 だからあの日から ここに居るの…。
志恩に ずっと居ていいって 言われた、し…。

今はね、人の“せいじん”っていう 歳なんだって！ 確か 志
恩が 言ってた。

志恩って なんか お母さんの匂いがするんだよね、 お母さん
って 何なのかわからないんだけど、こんな感じなんだなあ、つ
て！

さて！ 志恩は… こんなに僕が 説明しても起きないなんて
…。 もう一回 攻撃してみるかにゃ… さっきは あんな残念な
姿を みしちゃったけど 次は絶対に起こしてみせる！

さっきの天地が入れ代われればいいってのは 冗談だから！

「本当は… すっごい感謝してるから…！」

「にゃあ〜ん」

響くかわいい声。さっきとは 話しにならないくらい キュート
な声で！…

ピクッ！ ベッドで寝ている女性が 声に反応する。 刹那 目にもついていけないほどの速さで 音源をキャッチし 一匹の猫の体に、ほお擦りを いれる スリスリと… 目を光らせて…。

「カワイイよ〜〜！ カワイイよ〜〜！」

と、いつも見ることのないモード。 通称「かわいいモード」と言われ。 これは 目の前に、視界に入るものに対して 起こる現象で、… 「お持ち帰り」とか「はう〜」なんてことは 絶対に言いませんから安心してください。 とある世界の少女みたいと思いかもしれないが 全く関係ありませんから！

話しは変えて、 かわいいもの限定です。 かわいいのしか興味が ないのです。 なんて 解説入れてみたのですが…。

「くすぐりたい。 くすぐりたい… にやははは… ははは…。」

「カワイイよ〜〜」

この状態に 入ると僕は 抵抗しません。 なぜなら 逃げても、すごい速さで 追いついてきて さっきと同じことを 永遠にやるからなのです。 だから 僕は 志恩が満足するまで 付き合います。 終わるといつも 疲れずに 夢の中なんだけど…。

「カワイイよ〜…。」

「ピタッ！」

あれ！ いつもなら止めるに時間が 早い。

まさか！！ 病気！！

「にゃあーん？（志恩どうかしたの）」

その後も 連発。 反応はない。 「反応がなやい。 まるで屍のようじゃ。」

「……ん！」

「じゃー！！（志恩！ 生き返った！）」

「ごめんね…… えっと 名前は…… まだ決めてなかった…… ね。」

そう言えば そうだにや！ ずっと僕しか 言ってないし！ そのにや 当たり前か……。

けど ようやく名前が…… 名前って なやに？

「名前って 言うのは ある事物を他の事物と区別するための呼び方。 名称。 名。 って 言う意味なんだよ！！」

得意そうな顔で 意味を口にする志恩。

なんで 僕の言ってること 分かるの？

「これが…… あるからなんだよ。」

じゃあーん！！と 頭についている。 獣耳カチューシャに 指を差す。

説明しよう！

このカチューシャは 動物の言葉を（思ってることも）理解できる優れものさ！！ 因みにその獣耳カチューシャは 色んな動物耳に 換えることも可能なのだ。 最初は猫から……。

「お揃いだね！」

「にゃ…(……。)」

何が何だか 分からなくなった 猫なのですた。
僕は ただの猫じゃない。 ちゃんと 模様とか あるもん。

「キジトラ猫ちゃん！」

「にゃ…!。(僕は男だい!)」

怒ってるようで 楽しんでる、猫。
しっぽなんか 振っちゃって。

「うーん。 じゃあ… 『ピカソ』 なんて、どうじゃる？」

「…… (ピカソ……)」

「OKだったら、 『にゃ』 と 言ってくれるかな？」

ピカソ(仮)を 抱き上げ名前を 提案する。 もちろん猫にも
考えたりする脳は ある、訳なんだが、 少し二人の中で 沈黙
という時間が 流れていた。 お互い見つめ合いながら。

志恩は ニニコニコ。

ピカソ(仮)は 目をひたすらぱちくり。

「にゃ…!」

「わああ」

小さい声だが 確かに返事は した。

刹那 志恩の顔には ぱああつと 光が輝く笑顔が 出来上がる。

「ピカソ、ピカソ、ピカソ、ピカソ、ピカソ、ピカソ……」

「

テンションMAXの志恩がピカソ（決）を踊るかのように
縦横無尽に動き回る。

ブンっ！ブンっ！と。

「にやにやにやあー！！（僕 宙舞ってる。 ああ… 目が回る）
バタツ）

最後の音声は ありえませんよ。 宙だから！ 責めて 「チー
ン」とか、もつと ウケを取らないと！
なんて お笑い評論家に 言われそう…。

「あつ！ 思いました！」
何を？

よいしょ、と ピカソを床に置く。
用件を 思いました、志恩は 慌ててこの部屋から 出て行く。

「にや… （あわててにゅ。 何処か行くのかにや。） 「

一匹 部屋の真ん中、疑問を もつ。 もし 言ったところで 返
事してくれるのは 志恩だけだし。

「じゃあーん！ー！」

戻ってきた 志恩は さっきとは 遥かに格好が 違う。 それ
は 猫でもわかるほど…。

先程は 当たり前前なのだが 寝巻きでした。 服装は 獣型パジ
ヤマ（着ぐるみみたいな）。 今日 僕とお揃いの猫でした。 昨
日は、ウサギってやつを 着てましたにや。

志恩って ホントになんでも 着こにやせるのが 羨ましいにや。

いつか 僕も 人みたいなことしてみたいにやあ。
…で 今着てるには 私立夢ノ風学園の…

「にや…？(にやんだっけ?)」

「頑張つて！ ピカソ！ ヒントは 『せ』だよ！」

困り 一匹悩むピカソ。 そんな、がんばりに 応援とヒントを
与える、唯一の理解者 志恩。

「にやっ…！(分かった。)」

制服で、これは 「かいぞう」 っていうことが できるのにや！

「うんうん。 それから！」

えっと… とにやかく 志恩は かいぞうした 制服を いっぱ
い持つてるにや。 今日のは とある学校の制服を モチーフにし
てみました…って テーマだったかにや。

「大体は 当たってるよ！ ほら！」

わしゃわしゃ、と ピカソの頭を 撫で繰り返す。

「ねえ！ ピカソは 今日お出かけするの？」

「にやあ(うん。 いっぱい周りたいたいあるから！」)

ああ… そうなの、と 口にはしていないが 表情に 出ている
志恩。

「大丈夫。 落ち込んでないから」

やっぱり 落ち込んでにゅにゃ！

「にゃ！ (そういう志恩も 制服着てるから 何処か出掛けるんでしょ。)」「

「うん。 ああ そうだ、いつ頃出掛けるの？」

「にゃあ〜。(志恩が 出ていく時間に 僕も出ていくにゃ。)」

今 自分の脳で 志恩を喜ばせようと考えている。 答えは 一緒に
緒に行こう、途中まで、と。

「じゃあ 一緒に！ 約束だよ。」

猫と一人の少女が 約束をする。

たしか… 人間達で 約束事を すると… 「嘘つきげんまん
嘘ついたら 針千本飲ます 指切った。」だったけど 僕と志恩が
あんな約束みたいな 事を していたら… どうなってるかな。
考えるだけで… 寒気が…。

、と もう一つ。 志恩は どうして 制服着て 学校行くんだ
ろ？ 何年か前に 卒業したって 言ってたし…。

「… (どうして?)」「

再び 部屋の真ん中で 疑問を もつ ピカソ。

幸いに 志恩は 下に行つてご飯を 食べている。

ギョルル〜。 僕もだ 下に行こう！！

腹を満たし、リビングでゴロン、と横たわるピカソ。同様に志恩もゴロン。二匹揃って何をしているのやら。

「二匹って…一…やっぱり一匹じゃ…。」

ぴよぴよこ。動くジョイントが付いたカチューシャ。動く…？

「あつ！ 私もかつ！！」

他に誰がいるんです！ あとその腰に付いてるそれもどつから見ても獣にしか見えませんよ！

「そうかな…。どつから見ても人間でしょ！」

いやいやそのアイテムさえ付けてなければ十分人間です。今はどつから見ても獣人です。獣人です。獣人です。

「そこまで言わなくても…。分かったよ」

「じゃあ…。(どうしたの。志恩。)」

カチューシャを外した志恩にはただの『じゃあ』としか耳に入らなかった。

「うん もう一回言ってくれろ？」

…が再びカチューシャを付け直し、ピカソの声を聞く。

「じゃあ…。(どうしたの。志恩。)」

「そう言ってたの…。分かった分かった。えっ…！」

言葉を聞き取り直して 志恩は 一つ感じた。

(今 この子 私のこと 心配したよね。 って ことは… 私、誰と喋ってたってこと?)

私です。 すみません、自己紹介するの忘れてました。 私はナレーター。 貴女達を陰で 見守り、陰で バックアップをとっていた者です。 これを縁に お互いに頑張って活きましよう。

おー!!

「って…! 見守るとバックアップって 意味あまり代わらないよ。 ナレーターさん。」

「にゃっ、にゃっ、にゃっ。(志恩! どうしたの! もしかして…。)」

(こつこつとして 耳を付けてちゃ いけない時に 耳を 付けてるんだろ。 おかげで もの凄く ピカソに心配させちゃって。)

「大丈夫だよ! よしよし…。」

作り笑顔で ピカソの頭を思いつ切り撫でる。 不安を必死に取り除こうと…。 見えてないって 幸せだね。

必死ですね、 志恩さん。 作り笑顔なんかしっちゃって、 けど 作り笑顔も また 愛おしい。

「誰のせいよ…。」

志恩、ピカソ以外に 誰もいない シーンっと したりビング。
志恩の側を ウロウロ飛び回るナレーター。
正直 ウザいです…。(志恩の心の感想より。そして、何故笑っているのか…。)

「ああ… そうだ。 ナレーターさん。 これ以上 喋ったり 私の周りを ウロウロしたりしたら 貴方の存在を 完全に消す…よ。」

ふふふ、と 笑っている様に見えるが 背後には 複数の得体の知れないバケモノ、 志恩の体を 纏う紫のオーラ。 頭には 複数の血管マーク。

いろいろ 条件を満たした、志恩は ナレーターを消すことも 世界を創り還すのも わけない状態。

「さあ ナレーター。 貴方には 選択肢が 『二つ』 あるかも しれません。」

一つ… 私の前から 今すぐ消えるか…。

二つ… 私の前から 今すぐ消えるか…。

選択肢が 二つじゃなくて 一つに聞こえるのですが？

「ちゃんと 二つ言ってるじゃないですか… 二つ言えば 選択肢になるんですよ… さあ どっちを選ぶ？」

笑わない目。 笑う顔。 まるで 志恩であって、志恩じゃない 匂い。

側で 見ているピカソは 漏らし、震えている。

これは… 逃げるが…

「逃がさないよ！」

突然 背後に見えるはずの バケモノが ナレーターに向かい攻撃を 仕掛ける。

おお！ これはこれは 凄いですね。 ぐう…っ。

手足で ナレーターが動かないように 固定するように 命令する。

「無駄口… してないで 早く 消えたら？」

けど… まだ消える訳には… なんて！

ボンツッ！！ 自分の体を 輝かせ 志恩、ピカソに 目くらましをする。 押さえて いた手足の緩みを 感じた 刹那 ナレーターは その場から 消える。 数秒 目がくらくらして 周りが良く見えない。 戻った時には ナレーターの姿は 何処にも なかった。

「逃しちゃった…。」

さっき同様、まだ 背後にいるバケモノ。 その後 消えたナレーターを追うようなことは 一切しなかった。 というか いなくなっただのが、よっぽど うれしかったのか 志恩の顔には 笑みが戻っていた。

「あつ。ピカソ。漏らしちゃった？」

「……………。(今のは?)」

「今のは、悪い神様だよ！ ああやって、人に、皆に、迷惑かけちゃう子なの。時が経てば、ピカソも分かるようになるよ。」

分・か・る？ 難しい…。

「そんなことは、いいとして！ ピカソ、お風呂に入らないと！」

「にゃっ！（えっ、お風呂?!）」

「入らないと、バツチイよ。」

「にゃっ！にゃっ！（いやあ、お風呂嫌い!!）」

風呂嫌いな、ピカソ。大体の猫は、風呂嫌いなんだよね。けど、同じ猫科でも、好き好んで、入る子だっているのに！ わがまま過ぎるよ、同じ猫科なのに！

逃げないと…。また、地獄のフェスティバル会場に、連れていかれる。

恐怖のせいかな、オーバーに、風呂のことを、話す。…が、逃げるにも、体が動かない。姿勢は、漏らしたまま。

動け、動け、動け!!

「にゃっ!! (動いた!!) よし! 気づかれないとこへ!」

その刹那…。

「ふふ…。逃げちゃダメだよ。」

「に…にゃっ」

「カワイイ声で、鳴いてもダメだぞ。」

ガシツ、とピカソの首根っこを掴む 志恩とは 思えない、
ごつい手。 そう 先程のバケモノのものです。

じょおー、 今日何度目か 分からない ピカソの漏らし。

「また やっちゃった！」

「……………」

「さあ お風呂！、お風呂！」

バケモノの気を 収め、 右手で ピカソの首根っこを つまむ。
もちろん 抵抗しない。 そう この時 ピカソは 学習したの
だ。

『あんまり 志恩に逆らわない方が 身のためにや』、と

うんもすんも言わず、風呂場へ 到着。

本来なら こちら辺で 大暴れしてるのだが、 今日に限って
無反応、気絶してるんだが、してないんだか… で 肩が前に お
もいつきし前に傾いていて、 人間で 例えるのなら 失恋、シ
ョック、死ぬ寸前みたいな 感じ。

最後のは 悪い例。

「じゃあ… やるね！」

サアアアア……………」

シャワーノズルから 熱めのお湯が噴き出す。 今回の相手は
猫なので 少しかだけ 熱い方が 猫にも 嫌われないで すむであ
ろう 志恩の作戦。 風呂桶に ピカソを置くが サイズは 風呂
桶より 三分の一ほどしかない。

サアアアア……………」

ピカソの体に お湯をかけ 毛を寝かせてゆく。 お湯を止め、
近くにある ボディーシャンプーから数回プッシュし、 手で混
ぜ ピカソの体に 塗りたくる。 当然 ここでも 異常な反応を
示すピカソだが… 反応ない。

それも お構いなしに 志恩は ゴシゴシ、と 泡を立てはじめ
る。 いつも志恩は 泡で遊ぶ人、 つまり この状態のピカソの
毛で遊ぶのだ。 もちろん 髪型を 何度も作っては 戻してを
何回か繰り返すというシンプルなこと。 今回は ピカソがあれな
ので、気の済むまで 続いた。

最後に シャワーで 流すだけ。 なのだが、 相手は猫。 そ
う簡単には いくはずもない。 なんせ シャワーしてる最中に
自ら水を切るのだから…

あれっ この子 今日やけに静かね。 まさかっ！ お風呂好き
になったの！！

好きだったら もっといい表情・顔・するでしょう。

「好きに、なるなんて ないっか！」

よし！ お湯を無事流し終え、 ホントに最後 乾かす。

これは 拭く前にどこかへ行ってしまう イベント。 どの動物
の大体は。

これだけは ピカソに唯一出来ること。

「お疲れ様！ よく頑張ったね！ えらいえらい」

タオルで 体中を拭き終わり 留めのドライヤーまで 難無くク
リアした ピカソ。 その動じないピカソに 志恩は 大喜び。

「じゃあ 綺麗になったことだし、 行こうか！ 時間も ギリギ
リだけど。」

「じゃ…。」

ピカソが 鳴く… が 志恩には 意味は分からない。 たまたま カチューシャを していないからである。

志恩は この言葉に どんな意味があるのか… ふと 笑みを浮かべ…

「さあ おいでー!」

玄関で ピカソを待つ。 呼ばれたことに 反応し 駆け付ける、そしていつものように 特等席に乗るのを 楽しみにしてる。

「肩ね。 この位置で いける?」

「にゃっ!!(出来る!!)」

心配して かなり低い位置に セットしてもらった、その期待に応えるべく、いつも以上に 返事をする。 そのこと 志恩は カチューシャを付けていない、が… その思いは 確かに 志恩に届いた。

狙い定めて…じゃあーんぷ!!

力強く、力強く 跳びたつ。

ポテっと 跳び乗ることに 成功。 その喜びは 志恩も共感している。

「荷物よし! 忘れ物なし! ピカソよし!」

じゃあ行ってきます。

第十五話 「夕日とお出かけと志恩の秘密」

..... 僕の目の前に現れたのは

一人の.....

..... 志恩？！

黒色に包まれた帰り道 ピカソは 一つのピンチと ご対面して
いた。

そんなピンチを 救ったのが 志恩。 何故ここで 困っている
のが 分かったのか... まるで 検討がつかない。

「帰りが 遅いから 捜したよ。」

笑顔の解答。 何か裏が ありそうな...

まず 服装が朝とは 違う。 違うのは 当たり前なんだけど...
いつも着てるのと 違い過ぎる。

それは 猫の瞳でも 分かるくらいの、 いつの日か 志恩と一
緒に 『てれび』 っ て 板から映しだされてた やつと似てる！！

記憶の片隅から 引き起こしたのは ある日の日常。 どこにで

も ある風景、 猫と飼い主とテレビにて...。(IN リビング)

その時は 志恩の溜め込んでいた ものを 鑑賞というプラン。

ピカソは 毎度のように コロンと くつろいで、興味がない
ような態度で。

志恩は足をたたんで 体育座りをして テレビと真剣勝負。ひざ小僧に顎を 付け、楽しんで 観ているのが 印象的だった。

「……………」

二人の中での 沈黙。 それは 集中していると 寝ているのか 二択。

実は 集中しているのです。 というか 横たわってないのです。志恩の胸に 抱かれている状態。

だから 記憶があつた。志恩の服装について… その内容について。 だが… ピカソには 『アニメ』というものは 分からなかつた。

「あら!？ もしかして 過去を 振り返つてたの？」

「にゃ… (なんで そんな格好してるの？ 志恩。)」

「そ・れ・は… 私の趣味だからだよ」

やっぱり おかしい… あんなSみたいな 目で人を見下さない。演技か なんかだと 思いたいけど…

「私の事 Sみたいだなあつて 目で見てるね」

えっ なんで解るの？ あのカチューシャ付けてないのに…。

志恩の頬は 緩み笑う。 さっきのものは 嘘かのように… その顔は 天使の微笑み を見てるようだった。

「ピカソ… そこで 大人しくしてられる？ 出来る？ 出来るよ

ね？ ねっねっ！」

笑顔で言う詞。

迫る顔。

あんな高いところから どうやってここに 一瞬で 現れたの？
と、伝わるはずもない 思いとは 別に 志恩は ピカソを 追
い詰めるピンチとやらと 戦闘を開始する。

「さあ 何秒で 終わらせようかな」

誰に向かって言っているのか 分からない。(ピカソの感想)
独り言？

そう。ピカソには 見えていないのだ… なんで 自分がこん
な姿になっているのかも… ただ、自分が勝手にこけたのだけと
思い込んでいるピカソ、 なのでした…。

「よっつとー！！」

「にゃあー！！(わー いきなりなにをするのー！！)」

「ゴメンネ もう終わったから」

刹那、突っ立ってるピカソの横で 一幕下りる。

キンツ、と 刀を鞘に 収め 笑顔でピカソに 呼びかける。

『大丈夫』と…

もちろん ピカソの返事は ない。 というか 固まっている。
カチンと 例えるのが いいのかな… 効果音。

一体 いつあんな物出したんだろ… なんで その後の記憶ない
んだろ。

自分の毛繕いをしながら 昨日の事を 振り返る。 ものの
この話しの始まりすら… 思い出せない。

たしか… 外に出るところまで 覚えているんだけど…。

行つてきます。

玄関を抜ける 振り向き様の呼び掛け 空の蒼さに 己の体と猫
一匹の体を 空に足を 運ぶ。

時期は 夏。 外に出れば 溶けるような暑さ、木陰のある場所
を 探しながら… 見つけたなら 中で、歩き。 その陰が
途切れたなら 熱い道を 歩き、陰を 見つけたなら中に入りの
繰り返し。 繰り返すこと 30分。 本来なら 10〜20分な
んですが… 遊びながら来てたので この時間まで 掛かりました。
ここらで 志恩とのお別れです。 そう 分かれ道だからです。

分かれる道は 三つ。 一つは 右側。 二つは 真ん中。 三
つは 左側。 と なってる訳なんです。

僕は 志恩の肩から 地面に ジャンプ。 スタツと 着地する
ピカソは 少しだけ 成長したような姿に 見えた。

降り 志恩に目を向けると 彼女は笑っていた。 ニコツと。
そんないつも通りの姿を 見たピカソは 自分の進むべく道 左側
へ… 志恩は 歩く姿を 見送ったと ともに右側へ…。

僕は 少し歩くのを ちょっとだけ止め 後ろを振り向くが その姿は ない。 当たり前だけど… もう随分歩いたから… さあ 歩き出さないと！

ただ 前だけを 向いて。

到着~~~~!!

ピカソが たどり着いたのは 緑が生い茂、鳥達の声が 心地好く 聞こえる場所こと 森。 現在地は 森全体、町全体が 見渡せる 高台に 一人 ぼつんといる。

ここは あまり人も来ないし、 風は 気持ちいいし、周りの成長など 観察できて 僕のオススメできる場所。 ここは、つい最近 散歩してる最中に 見つけた スポットで いつか志恩を 連れて来て魅してあげたいと 計画してる。 けど 僕 人語 喋れないし… そこが問題！ けど 大丈夫！ 志恩には あの力チユーシャがあるし。 僕の心を理解できるから 助かるんだよね！ ほんと良いもの 作ってくれたよ… 志恩は。

あれ？ 急に、眠くなっ…………… て きた… ぐうZZZ

気がつく頃には 既に 夢の中にいた ピカソ。

ううん…。

目が覚め 視界に入る色は 青から赤へと 代わっていた。 … だが 彼は まだ 寝ぼけていて、物事が 分からなくなっている。 周りの見方も 少し歪んで見えたり、 此処は何処？とか、 本来なら 分かっている事が 一瞬気を抜いた時は このようなことに 成り兼ねない。 というか まだ 一歳だもん！

そろそろ お家に 帰ろう！ 志恩や皆が 心配するだろうし。

ホントに参ったなあ…

山を 下りきる頃には 辺りは 暗くなっていた。

夜の散歩かあ… いつ何時 何が起きるか分からないから 要注意して 帰らなくちゃ！

夜道 明かりが あるのは歩き距離から 1メートルの場所。

これは 今歩いてて おおよそのもの。 明かりに入ると 次の明かりまでの距離まで 約5メートルのところにある。

ドンっ、 明かりのない所で 何かとぶつかる。

道の真ん中を 歩いてるから 電柱とかに 当たるハズがない訳だし。 じゃあ 何に当たったんだ？

それは こうだ！！

ピカソの視界からすれば何も見えない。 刹那 急に体を 何者かに引っ張られる。 だが… 姿の見えないピカソには 未知の感じ… 決して良い思いも しないし、 ただ 悲しくなるだけのこと…。

誰に引っ張られるのか なのために… と ずっと考えながら、 シャー、と 自分の毛を 逆立て見えない相手に 威嚇する。 が… 反応はなし。

このまま 訳の分からない奴に 怯え続けなくちゃいけないのかなあ…

志恩が… 助けに来るかなあ…。 って

ふと 志恩に助けを求めようとするが ここには彼女の姿はない。
願わない願い。

刹那 夜の闇を 駆ける白い閃光。

風とともに揺れる 長い髪。 暗闇でも 輝き続ける 緑眼。
安心させる その柔らかい笑み。

此処に現れた 人こと…… 時家長女こと 時 志恩。

彼女の口から 出た詞は……

皆には ナイショだよ

と……

第十六話 「悩みとツキとサプライズ」

今日も変わらない一日。 天気も気分も布団も…。

「ん~~~~~!!」

俺こと 時 七夜の日常は こんな普通な感じから 始まる。
…と 優しく言いたいところなんだけど、 実は 寝てた場所が天
井って 言つと皆の反応は どうなるのか？

…………… なあーんて！ 流石にそれは 俺には無理なこと。
その無理な所が あるのは 人間の証拠。 そう 突然無理なこ
とが 無くなると 自分を疑いたくなる。 まあ こんなこと
何処かに流して 忘れてくれ。 いや… 忘れて下さい。

「つて なんで 謝ってるんだ？」

『オハヨー 七夜!』

ああ… そうか いるの忘れてた。 通りで 少し体が重いわけ
だ！

ポンっ、と なるほどの動きをとる。 だが 一つ昨日の昨日を
甦えさせる。
擬態作らないとなあ…。

「ティーンって 今すぐ体欲しい？」

『今すぐって 訳じゃないけど、いつかは 欲しい。』

「分かった。出来るだけ 早く体の方をやるな。それまではこの体で我慢してくれる？」

『うん。で なんで急にその話をするの？』

ベッドの上にて じつと動かない 七夜、はたから見れば 寝てるの？ とか言われそうな程に 静か。だが 解る人には念話をしたり、とか…。

黙りばなしで ホントに寝てるじゃないかと ティーンは体の中にて 思う。、と…。

「ああ… ちょっと、ね」

ごまかしの苦笑い。つかさず 外に目を向ける。

天気は 晴れ。 快晴。 雲一つない。

っー。 ワケの解らない 突然の涙。

…なんでかな？ 急に涙が… どうしてだろう… はは…。

『…や…七…な…や…七夜…!』

「あつ…ゴメン。ご飯にしようか。」

涙をごまかし、 下に行こうと いつもの七夜になり ベッドから下りる。

(あんまり ティーンには 心配させるワケには…。()

階段を カタカタ、と 下りて 皆の居るリビングへと。

ガチャ。

「……おはよう 七夜。」「……」

重なる別々の優しい声。時間も時間なので 皆朝食をとって
いる。

部屋に入った時には 俺以外の皆が 揃ってる訳だから… 最
後か。

「今日は 遅いわね 七夜。」

「うんうん。 いつも一番乗りなのに。」

冷静な リアクション。母と姉、志恩。

「バカもたまには 寝坊するのね。」

バカって… 他に言うことは ないの…。とイーターの一言にツ
ッコミたくなる。

「まあまあ お姉ちゃん。」

優しくフォローしてくれてる フォルテ。

口を閉じてても 勝手に飛び交う 言葉。だが その言葉を
聞いているだけで 胸がいたがゆい。特に イーター。(名だし。)

まあ 慣れって怖いもんだなあ…。

「ちょっと 聞きたいんだけど これ 誰が作ったの？」

「私だよ!」

笑顔で 答える志恩。 ああ 姉さんなら 心配ない。 別に
志恩以外の作る物も 好きだけど、皆独特で あまり俺の舌が合わ
ないんだよね。

「そっか… 珍しい。 嵐でも 来そうだね。」

「人聞き 悪いな〜 な〜くんは!〜!」

姉さんが帰ってきて 何日経つんだっけ?

姉の顔を見る度、必要以上に 考えてしまう。 また 何処か…
行ってしまっんじゃないかと、 深く思ってしまうから。 ただ
…。

「立ってないで 座ったら? 主。」

「ああ… そうだね。」

フォルテまで 心配をかせせてしまった…。 まあ 話しは
違うと思うけど…

「久しぶりの姉さんの料理だから、いっぱい食べないと! いった
だきます!〜!」

パクリ! モグモグ…。

「美味しいなあ〜!〜!」

実は 俺… 味覚が無いんだよね… 前までは ちゃんと味が分
かってたのに…。

「でしょ! たくさんあるから食べてね」

俺と姉さん以外は 食事を済ませて、リビングにはいない。お
そらく、自室で 準備をしてるんだろうか。俺も早く済まさない
と！

「じゃあ 準備してくる。美味しかったよ。姉さん。」

席を ゆっくり立ち、挨拶してから 自室に向かう。そう 時
間は あまり残されてないのだから…。

「はい。私も準備出来次第 お出かけするね。」

「また うちの学校に 用があるの？」

「まあね〜」

なんでか 姉、志恩は うちの通う 私立 夢ノ風学園に よく
来ている。理由はよく解らないのだが、制服を着て、一緒に登
校して まるで学生に 逆戻りしたかのような… まあ それは有
り得ない話しだと 思っけど。

だって 何年も昔の話だし。

けど… なんで急に…。家に帰ってきてから 突然のこと。

「分かった。けど、そろそろ 何しに行ってるのか 教えてよ。」
「時が 経ったら、ちゃんと教えるよ。」

ホントかなあ…。姉さんは ちゃんと教えてくれるから、信じ
て待ってるんだけど…。

「準備は OK。 さあ…。」

玄関から 俺を呼ぶ声。 おーい、つて。

「はい。 今行くよ。」

すかさず、大声で 返事をする。

慌てて 階段を降下する。 皆揃って、玄関で 待機。 また
最後か。

今日は あまり運が良くないな。 そういつてるから 悪いんだ
つけ、確か 本に書いてあったっけな。 運を良く言葉は ツイテ
るだっけな。

「遅い!!! いつまで待たせるのよ!!! バカ!!!」

「バカ、バカって! 他に言うことはないのかな?」
「うん。 ない!」

はつきり言うな! 聞く方の身にもなってほしいよ。 どれだけ
言葉が重いことか…。 着くなり、あーだこーだ、つて。

「早く行きましようよ〜 主。」

ワクワクした、フォルテ。 その気持ちは わからなくもない…
皆に会ったり、話しをしたいんだな。 俺にも、昔は合ったんだ
けど… 今は… どうか、分からないな。

「なあーんて! 今を楽しめることに… ツイてる訳だし!」

『早く行かないと!』

「分かってるよ。」

小声で 返事をし、靴を履いていく。流石に 全員が 玄関にいるのは 少スキツイので 外で 俺を待っている状態。また また 最後の訳なんです。

「ゴメン、ゴメン。」

行ってきます。

慌てて、外に出て 皆と合流。皆に一つ詫びを入れる。鍵を閉め、ここで 日課になっている。鍵を持っている当番の事を ふと思いつく。

(そういえば 今日は俺の番だったな。)

閉めた ドアを確認して、鍵をポッケに入れる。

できれば、無くしたくないんだけど…。

まあ あの時は偶然だよ。けど… 二度あることは なんとなくだから、用心しないと。

「後ろ向き発言は そこまで!! ほら 楽しく行こう!!」
「そうですよ! 主。」

なんか 俺の気持ちに二人に届いているみたいで嬉しい。

「そつだよ。 楽しく行かないと。」

二人に励まされながら 足は学校へと 向かっている。 ずっと
… 思ってたんだけど… イーターの姿が ない。

「ところで… イーターは？」

「用がある！ って 直ぐに出て行ったよ。」

(用って…)

うちのクラスでは 急ぐ用なんてなかったはずだけど。
つつい 他人の心配をしてしまう、七夜。

「なーくんつてば また 考え込んでる！」

「ダメですよ！ 一人で考え込んでばかりじゃあ。」

「何かあるなら 私達に話してよ！ 相談相手になるよ。」

とても助かるけど… 言えない内容だつてあるよ。

通学路を歩きながら、七夜は 判断を自分なりに出し、心の何処
かに 仕舞わせ 無かったことにする。

もつすぐ、着くのか。

表情は曇りだす、その表情は 何かを的中させるかのような。

「私は ここでお別れ」

「うん。」

手を振り、別れる。 何処に行くのやら。

志恩と別れ、現在 教室にて 待機中。 することもないため、

ただ ボーツとっていた。

あと10分で 朝のHRだ。 それまで 少し目を閉じよう。

きーンきーンかーんきーン。

ん。 予鈴だ…。

「急だが… 集会がある。 今すぐ列んで、 体育館へ向かってくれ!!!」

担任が 何か言っているが、 ボーツとした頭の中には 何も入ってこない。 右耳から入って、 左耳から受け流す。

とにかく、 緊急なんだつてのは 分かったよ。 行かなくちゃ!!!

「皆 集まってる。」

体育館には 全校生徒が 集められ、 ざわざわ賑やか、 大分パニックになっているのか。 そんな思考が薄い 今 七夜はそう思えた。

スピーカーから 司会をする先生のやや低めの声が 体育館を響

かす。

「只今より、全校集会を行う。まずは新しい校長を紹介する。では、よろしくお願いします。」

(あたらしい？ えっ… この時期に 校長変更？)

寝ぼけていた 七夜だが、その事態には 眠気なんぞ、何処かに飛んで行っていた。

カツ…カツ……カツ。

「えっ!!」

見たことのある… いや…いやいや。嘘…。信じられない。

「初めてまして、 時 志恩です。」

俺は… 絶句した。 フォルテと… あれ!? イーターがいない。
い。

開いた口が 閉まらなかった。

第十七話 「姉と性質と遅刻」

「……………」
絶句した。パニックにより 頭が真っ白になる。

いや、基本志恩を 知っている人にも 同じことが起きている。
特に 先程まで 一緒に過ごしてた、 イーター、フォルテが
動揺を隠せない様子

「……………」
「……………」
顔面蒼白。 見間違いかと、思いたくなるくらいの驚き具合。

そのままの表情で、二人は 七夜に顔を向ける

「これは、どうゆうことなのよ！」
、とイーター

「事情説明を下さい！ 主」

と言われても。 こっちが、聞きたいくらいだよ。

フォルテもイーターと同様に、七夜に解答を求む、 そんなこと
言われとも、驚きを隠せないのは 彼もなんですよ。

「なんとかいいなさいよ！」

「ゴメン。 俺にも分からない。」

この話しの次に凄いのは、この三人。

何故？凄いかつて？ それはこういうこと。

アイコンタクト。 その距離、 まず 並び方を説明すると 女
子（前）、男子（後）の二列構成。 並び順は、背の順

フォルテは、七番目（左）、イーターは、十三番目（左）。この
クラスでは、女子は十六人しかいない。 その中での、数値という
わけ

で、俺の位置は二十番目（右）

ここだと二人の様子を伺うことができる

つまり、今までここでアイコンタクトをしていた訳で… 二人の事がよくわかった

俺は、クラスの中で二十番目で 本来は二十六人。居るわけなんだが… 今日休みが多いなあ、と 誰もが思っただろう(クラスの人) そんなことは どうでもいいのだけど

「以上です。 名前が呼ばれた、人達は 昼休みに校長室へ来て下さい」

知らぬうちに、話しとお呼び出しがかかった。

(一体誰が…)

「ねえ… 誰が選ばれたの?」

前にいる男子クラスメイトに質問を試みる。 答えは…

「お前!と… あと違うクラス、六人」

「おっ…オレ!!!」

聞いてなかったのか? と不思議そうな顔で返してくる。
返されてきた言葉には 何故か、力を感じれなかった。 例えるなら、恋をしているかのように…

その症状が出ているのは、彼一人だけではなく…

「はあ……………」

「志恩さまあ……………」

「私を嫁にしてエええ!!!」

周りからの黄色い声が、体育館を騒がしくする

女子の声って…怖いなあ。なんて今まで何度か、経験したことはあるのだが大抵は、音が籠らない外や教室。 体育館は初めてのケース、そして キャーキャー言われてるのが…

俺の姉こと、「志恩」

な、わけなんです… 見てるこっち側からだ と 俺って こんなこと されてたんだノノノノって 顔から火が出そうなくらい恥ずかしい

と…一人不信な行為をする七夜を置いて、他の人との時差がこの

時生じる

ハッと 後ろに目を向けると、先程までの勢いがあつた体育館から、声一つ聞こえないごく普通の体育館へと変わっていた。当たり前前なのだが…

「気付かぬうちに、終わってたんだ…」

あと何話してたんだろう、などと教室に向かう廊下で一つ考えていた。他の人に尋ねようかとは、何回も思つたものの、さっきと同様にクネクネしたような力を感じさせない態度だったので 七夜は聞くことを諦めた

「一体 どういう話しをしたらこんな腑抜けた状態に出来るものか？」

志恩の言葉に対し、七夜は教室に戻って授業そつちのだけで考えるその態度からは、スッゴク怒ってます！！ と判断させてしまうものだった

『しかめつつら、腕組み、揺るぎなく見つめる鋭い瞳』 と間違いなく誤解するかの様な…

「時………とき… 時君ゝ 時君ゝ おい！！聞いてるのか！！

時 七夜！！！！

「うーん……」

「うーん…… じゃあねえだろうが！！ 答えやがれ！！ オイコラァ！！！！」

考えている七夜には 全く聞こえていない。決して無視しているのではなく、七夜の本来持っている力なのだ！ 一つ案を考えるまで このモードは続くのだ

バンっ！！！！！！

「ん？」

「さっきから 呼んでんのに！ なんで返事しないんだよ！！！！」

お怒りの表情の先生！！は俺の机を思いっきり殴るといふか叩いた

それによつて、初めて気が付く、叩かれたことにより先生より、黒板に目がつく

今の時間は、数学らしい

ああ…数学か、と言いたくなるが今日の所は先生の状態も考え言わない事にする

「はいなんでしよう…」

「なんで 棒読みなんだよ!!!」

一々五月蠅いなあ… 集中できやしない。 相手を黙らすには、ちよつとだけ相手する必要があるな

「用件は？」

さつきまでココロの中で思っていた言葉とは裏腹な様様をとる、わざとぼけるかのように

「じゃあ！この問題を解け!!!」

後ろに構えてある文字の羅列が書かれた黒板に指をさす！

なんとやらしい顔だ… まるで俺を追い詰めたような上目遣い。だからと言つて、俺は馬鹿ではない。「こんなくだらないことをしてないで！授業をちゃんと進めましようよ」って 言いたいところだが今 頭に血が上った人には言葉は通じないだろうし！ 実際に証明させる方が案外楽だろうから、そっちを取らせてもらつよ 席を立ち嫌々、前に足を向かわす。 レールにある適当な長さの白いチョークを取り、問題に入る。

カツ！カツ、カツカツ、カツカリカリ

問題という大きな壁が、次々に解かれてゆく。解くスピードは瞬きをする間も与えないもの。それと、問題を解いているはずの七夜が複数

それを見ているクラスメートは啞然。まさに開いた口が塞がらない…と言つべきなのだろう、か？

ガタガタ… 椅子が引かれる音が、聞こえる。それは前にあった仕事を終えた証拠。つまり、さっきと同じ状態にポーッとするのだ…

「チツ」と先生が鳴らした舌打ちは、彼の耳には届くことはなかった

自分の世界に入り込んでしまった七夜は、放課後までこの調子だった

「あっ!!」

夢から目覚めた様な態度をとる七夜は、時計をすかさずに目を向ける

そう… 放課後なのだ。辺りも明るいし、窓側に席を陣取りしてるし、気付けば寝てるし… 誰かさんは起こさないし!! って、あれ!?

「いない…」

いつもいるはずの相方がいないのだ。どうしていないのかは、知らないけどこれって…

「それは… なんてだろう。 あっ!! 放課後だよね、今?」

チラッと、時計を再び目を向ける。 集合は… っ えっ… うん! 一時間前だ!

えっ!! 一時間!!

のんびりした一人コント

「遅刻だ… とにかく校長室に行かなくちゃ!!」

慌てて教室から飛び出て、姉、志恩の元 校長室へと ダッシュ

で向かう。焦っているせいか、いつも以上にスピードを出して走る。「廊下を走っちゃダメ！」という校内標記をぶつちぎりで無視した状態の七夜は、一人心中の中で泣いていた

そんな一瞬の出来事は、校長室に着いた時には軽く忘れていた

「と、到着……」

タイムは、12秒

案外早く……着いたかな？って 自分を褒めてる気が……

コンコン……

「失礼します……」

「どうぞ〜」

ドアの向こうから、馴染みぶかい高い声が、部屋に入る許可を通してくれた。それにしても気楽そうな、まあ、それがうちの姉の親しみやすい特徴なんだけど

ガチャ……

「遅れてすみません。時 七夜です」

第十八話 「ドアと居眠りと新しい世界」

コンコン…

ドアを二回ノックをする。

「どぞぞ」

ドアの向こう側から、許しを得た俺は、ドアを開け部屋に入ろうと足を運ぶばせようとするが…

正直一時間遅れといて、この部屋に集まってる俺以外の六人に睨まれるんじゃないかと… 心の中でネガティブに考えていたのだが…意を決して…

ガチャ…

自分に視線を全身から浴びるのかと思っていたが：姉以外誰も居ない。この誰も居ない空間に入った瞬間、緊張が解けた。余程怖いイメージを自分なり考えていたらしい。なんか無駄なエネルギーを使った気分

この部屋に入った時、真っ先に目に付いた七つのドア。一つだけ空いている。自分なりの直感だが、俺以外の六人は既にあのドアの向こう側にいるんじゃないかと！

「その推理… 正解」 教卓に肘をつけ組んだ指の上に、小顔を乗せ、いつも通りの笑みを浮かべた志恩の口から出た、不思議な言葉。これは人の心を読むことの出来る志恩の特技みたいなもの「あれっ？ どうしたの？なんで分かったの？って、顔してるね」おねえさんに隠し事は出来ないね、照れてるな、くんかわいいなあ」

ちよっとした茶化しを入れた志恩。に照れてる？というか呆れた

七夜

「当たり前…です。遅くなつてすみません。時 七夜です…」

「固くならなくていいわ！ いつも通りのな〜くんをでいいから」
「では、お言葉に甘えて… それと幾つか言わせてもらいますけど！
姉さん！！ どうしてこの校長になつたの！ こっちは何も聞かれされてないし！ 突然校長代わるし！ で訳の分からないものに俺の名前呼ばれるし！ それで、それでそれで… とにかく姉さんが俺の一日を無駄にした！」

この愚痴の大半を除いてみるとわかるのだが、七夜の怒りは最後の一言に全て込められている。いわゆる人のせいってやつです。

七夜の怒りを全て右から左に受け流した志恩はニコツと笑顔。

その変わることにない志恩の態度を見て、七夜は……………

「ねえさん……………」

怒る気力も無くなりカクリと下に頭を垂れていた

「ん？ なあに〜？」

やはり聞いていない様子だ。ケロツとした顔をしてる、呆れて言葉が出ない

「……………」

「どうして… 遅れたの？」

うつ… 聞かれたくないを！

「……………」

「どうして… 黙ってるの？」

いつもの優しい表情で…

「えーっと…」

七夜にしては、歯切れが悪い。いつもなら即答に答えられる内容も今の焦りからだとても悪い。

「まあ… いいわ〜おねいさんが、当・て・ち・ゃ・う・か・ら」

ドキドキ…心が、心拍数が早くなつてる。いや姉さんにそんな

スキルは… 無いはず… だから…大丈夫なはず…

「居眠りしてたでしょー！！」

「えっ!!」

ビクツと背筋が冷えた、けどその推理合ってなければただの思い過(し)っ!

「ほっぺ」

志恩は自らのほっぺに指を当て七夜に教える

「あっ／＼／＼／＼」

そう。犯人は証拠を残していたのだ! しかも二つも!!

一つ… ほっぺによだれ

二つ… 寝ていた時に付いた跡

証拠を見つけた七夜は、必死に拭くなり隠すなりするのだが…

ピロリン

遅かった!! 隠そうとする間に、志恩の携帯(写メ)に撮られてしまった

「なーくんの写メゲット」

「消してよ!／＼／＼」

と恥ずかしくなった七夜とレアモノを手に入れた志恩は、校長室の中を駆け回る。

走ること約20分…

「ハアハア…………… ハアハア……………」

二人とも息が上がっている

「さあ… 姉さん… 本題に入りましょうよ!」

「うん。そうだね」

志恩は完全に息を調べていた。恐るべき姉パワー!!(初めて言いました)

「で… 用件は?」

「言われなくても… はいこれ!!」

志恩は一枚の用紙を机の引き出しから取り出し、七夜の目の前に置く。紙を手元に持って内容を確認する。それにはこんなことが示してある

“魔法少女になりませんか？”と…

「なっ………… ヤダっ!!」

「えっ!! どうして？ なーくんなら絶対優秀な魔法少女になれるのに、運動神経や頭脳も優れてるんだし、ダメ？ダメ？」

志恩のおねだりかつ相手を褒め、そんな空気を作りやらせようという雰囲気。昔ながらこれには、弱かった… 人間は褒められるのが、とても弱いことを知り、そこを攻めてくるのが姉志恩の口テク「姉さんのその言葉には、毎回騙される。だけど、姉さん… 今回は事が違い過ぎる気がするんだ！ まずタイトルの“魔法少女になりませんか？”は男子対象じゃない、女子対象ではないでしょうか！ そもそも男子が女子になれるはずがありません!! 絶対に無理です!! もしそれが叶っても、俺は絶対にやりたくないですけど…!!」

と… 志恩に強い討論を試みるもまたしても志恩の表情は変わらず笑顔だった。少し口が緩みこんな事を述べた

「もし… 男の子が女の子になれちゃったら、どうしようか」

「さっきも言ったけど、俺は嫌だ!!」

激しく拒否をとる七夜、そんな強張った顔も一瞬で魔法少女になるべくを得ない事態が起こることはまだ七夜には分からなかった…

「じゃーん!! これなあーんだ」

七夜を一瞬で怯ませた武器それは、七夜の写メなのだ!! 内容は、普段の七夜からあんなところやこんなところのあらゆる情報を集め、秘めた特別なものなのだ!!

「っわ!!! 姉さんそれ……………」

「いやあ〜 大変でした」

「大変でした っじゃないよ!! いつの間に… こんな… さっ

きの写メ一枚かと思って油断していた… 今すぐそのフォルダー消してよ…!!」

「嫌よ」

再び志恩と七夜の校長室を駆け回る戦いが始まった!!

駆け回ること10分

「分かった… 分かった… おれ… やるよ…」

軽く泣きが入っている七夜に たいして

「それでこそ私のな〜くん!!」

「て… 俺は何をすればいいの？」

「用件はドアをくぐってる時に簡単に説明すれから、このドアくぐっちゃって もう先に皆行っちゃったから」

「……………」

「大丈夫! な〜くんはちゃんと帰ってくるから! 心配しないで

!!… ねっ」

「姉さんが… そこまで言うのなら、俺もちゃんと仕事こなしてくるよ」

「じゃあ行つてらっしゃい」

「うん… 行つてくる!!」

ワクワクしてるのはなんぞかな! まあ…魔法少女って響きは好きじゃないけど! どんなことするのかは案外楽しみにしてたり…

ふう… まあ、そんなことはその場その時に合わせて考えるかなっ!

ドアをくぐると周りは真っ白な景色。遠くには、抜け道みたいの

が見えるだけで、ほかなにもない。俺はとにかく出たい一心で、
抜け道を目指す。

『あーあーなーくん、聞こえてる？』

『聞こえてます、あれっ！俺口開けずに会話してる！…まさかこんな才能が、将来はこれでやってくか』

『なーくん… それは念話だよ！』

『念話？』

『そう。文字通りに考えてもらえると嬉しいんだけど、相手と念
を使って会話するって感じかな』

『へえ…』

姉に初めて説明された事に感激を受ける七夜。人生十数年姉に教
えてあげてばかりだった七夜が初めて説明を受けたとき、七夜の涙
腺が少しだけ緩んだ…

『なーくんどうして泣いてるの？』

『姉さんが初めて俺に説明してくれたから、つい』

『なーくん。それは酷いよ！！ おねいさんが逆に泣きたいくらい
よ！』

『話しが少しずれましたね… 本題に』

手の平で涙を拭い志恩に話しを振る

『では、話しは戻るけど今から二つなーくんに話しておきたい事があるの、一つ… なーくんには特別な力があって、今から向かう世界ではそれを必要としないの。向かっている世界では、魔法少女になるために“デバイス”という必要なものがあるの。』

けど、なーくんにはそれは必要ないの。どうしてって言われるとなーくんの魔法陣にほとんど備わってるの。本来はいろいろな式があったりするんだけど、ここでなーくんの式はオリジナルって分かるの。ここで何が言いたいので言われると、そこはおねいさんにはわからないの！ だって、まだ見たことがないのだから！だからおねいさんにその力を魅して欲しいの！！

二つ… あっちに行って見て見ぬフリをしてほしい事があるの。

それは、自分の容姿、なの…。 あっちだと時間の問題があったりするから、決して今の姿で旅をするのは難しいの。

だから、ちよつとの間我慢することを誓ってほしいの
以上だけど、質問あったりする？」

「一つだけ…。 いや二つ質問をしていいかな？」
『いいよ』

「一つ…。 俺の魔法陣の能力って分かる？」

『うん。 能力の方は、擬人分身って、言ったほうがいいかな。 まだよく分からないの私でも…』

『ありがと…。 あと一つ…。 今行こうとしてる世界では、姉さん達とかいるの？』

『うん…。 ここにいるだれかとは会えるはずだと思うけど』

『ありがと…。 あっ…。 もうそろそろ…。 違う世界に着くから、また何かあったら連絡して…。 じゃあ』

連絡を終え、今見える真っ白な世界に足を向かわせる七夜、もうすぐで違う世界に行くわけだし…。 ちよつとだけ気合を入れて行こう。 あと、一本、あと一本。 進まなくちゃあ…

「さあ…。 うわあ！！」

ここにて、足を滑らす。なんでこけたのかもわからないまま、下に急降下していく

「降下してる…。 このままじゃ、あの世行きか…。 ところで今どころへんにいるのかな俺。 確か…。 俺には、擬人分身っていう能力が…。 そうだ…。 それを使おう。 でも、やり方が分からない…。」
『なーくん死んじやだめ』

そんな言葉が脳裏で蘇る

「だよね…。 けど…。 どうやって、」

『今までで強いものを想像して具現化させてみては？』

「想像…。 やってみますか！」

第十九話 「魔法少女になりました！」（前書き）

ども！

魔法少女リリカルなのは〜この瞳で見る世界ともう一つの違うセカイ〜を書いてます！ 作者予耶です！

初めましての方もいれば、久しぶりにと見る方もいるかとおもいます。

えー…何故私がこうして表に出て話しているかと言いますと！

この後に見て貰いたいのですが、本編の話がほんの少し変わります。

やっとタイトル通りのお話になり、なのはやフェイトが沢山出てきます！（特にフェイトが）

が…いくらタイトル通りとなりましても、多分訳が解らなくなる人が出てくるくらい話が急展開しておりますので、どうぞご覧下さいまし！

第十九話 「魔法少女になりました！」

「想像… やってみますか！」

降下してる最中に、そんなことを口にする七夜。だが一つ彼なりに悩んでいたことが一つ、それはネタになるような知識が無かったのだ！ だから…

「うーん…」

悩みながら降下し続けても、答え（アイディア）が出てこない、それは自分の実力？というよりも知識が足りないだけなのだが…それでも彼は知恵を絞りだそうと無理に頭を使っているために意識が朦朧としてくる。それは本人も気づいている

「ヤバいなあ… 意識が… このまま逝っちゃうのかな…」

その刹那、脳裏に自分の知らないデータが入ってくる

「なにこれ… これになれってことかな？……………試してみよう」

《セットアップ》

無意識のうちに、俺は魔法少女になっていた。最初にセットアップしていたのは、“フェイト・T・テスタロツサ・ハラオウン”。StS・ストライカーズ・verアサルトフォームだったらしく、ちよつとの間寝ていた俺はそれに気づくはずもなく…

目覚めて初めて自分の変わった服装、髪型、容姿を見て驚いた。大体、こんな格好をして恥ずかしくないものか！っと ツツコミを入れたくなった。近頃の女の子は凄いなと笑ってごまかした…（心の中にて）

少しの間寝ていた俺が目覚めた場所は…

「あつ！！ よかった！！目を覚ました！！」

聞こえた声は、何処となく強そうな感じなのだが、ほんの少し弱く疲れているような感じがした

「本当だつ！！ すごいなあコイツ！！ あの酷い傷を三日でここまで治しやがった！！」

「アルフ、言葉遣い」

なにかごちゃごちゃ、言ってるけど、よく聞き取れないな…

視界に薄らげに映ったのは、金髪の少女とオレンジ色の髪の女性、今の状態からだとその姿した見えない。残念ながら、早く元気になつて二人にお礼を言わなくちゃ、“ありがとう”つて。

はは… また眠くなつちやつたな…

「はっ！！！！」

訳は分からないが、勢いよく起きてしまった。悪夢とかも見てないのに、寝汗が酷い
まず、ここは？

「駄目ですよ！ 急に起きるなんて！ 自殺行為ですよ！」

「そうだぞ！ 紫頭！」

「紫？ あたま？」

誰のことを指しているか全く分かっていない七夜。だからあちらこちら視線を向ける

「お前だよ！」

「俺？」

「はい、鏡」

「あつ！ すみません。えっと」

鏡に自分の顔を合わせる

「うわっ!!」

茫然自失 その反応に金髪の少女とオレンジ色の髪の女性が見つめあいお互い首を少し傾げる。それは困っているを表す行動だ

「すみません…」

「ねえ… 君は何者？」

真剣な表情でそう質問してきた。 もの凄い熱意に

「俺は、別世界から来たんだ。信じられないかもしれないけど…」

「私、信じるよ！ だって私たちも違う世界から来たんだから」

「そうだぞ！ なりより証拠は私だからね！」

話しに入ってきたオレンジ色の髪の女性は突然人と違う姿に変異する。

その姿は、狼

「アルフ！ いきなりその姿見せられたら、ビックリしちゃうよ！」

「そうかい？ あたしからすれば、ちよつとした挨拶みたいなもんなんだけど！」

「アルフとは、基準がちがうんだから！」

その姿を見た七夜は驚きを表しているが、違う反応を示している

「かつ… かわいい!!」 またもや、二人は見つめ合い首を傾げる

当の本人は、ヤバい引かかっていると勘違いしたせいか、話しを変え

「えっ… ところでここは？」

「あの… 今の件で引かれてるんじゃない、と思ってるんですけど… 大丈夫ですよ！ このようなことを言うのは、他の人からもよく

言われますし…」

「けど、かわいって言われたのは、初めてだけど！」

「そうですか？」

「ああ… さっきのここはどこですかは！ フェイトの隠れ家さ！ まあちよつとの間…この高層マンションを借りて、ある探しものを探してるのさ！ ここは眺めもいいし、広いしな」

窓の外を見ながら、そう語った。このとき俺は、タブーな質問

をってしまった

「ところで、ご両親は？」

一瞬、部屋に沈黙の時間が流れる。そして、二人の顔も暗くなる
「母さんは、ちょっと遠いところでお仕事してます。父さんは……」
「フェイト！！ 悪いが今の話しは、聞か無かったことにしてほしい」

「すみません」

「あなたは、悪くない。誰だって間違っしてっちゃう質問だってあるし……」

「あの…… 探しもの俺も手伝っていいですか？」

「…………… それは覚悟があつてのことか？」

「覚悟なら……………」

「…………… 生半可な気持ちなら、お断りだ！ これは命に関わることだから、素直に了承はできない」

「……………」

「なんだ…… 口だけかい？」

「わかりました！ 覚悟は何で表せばいいでしょうか？」

「待って！」

「フェイトは黙ってて……！」

フェイトは、すかさず黙る。それは、アルフの氣があまりにも本物だから

「面白い！ 私と勝負をしよう！ ほんのちよつと前に気付いたけど、お前！ 魔法少女だな！」

「如何にも！ 俺が魔法少女だ！」

「ああ…… 思った通りだ！ それと名を聞き忘れてたよ……」

「名など今の俺には、必要ない！」

正直言つと、いつの日以来から何かを忘れてるんじゃないかと思つたら……名前だ！

「先に言つとくが、アンタを殺す気にいるから……」

「そんぐらいのプレッシャーちよつどいいくらいですね……」

「余裕をこいていられるのも今のうちだけだ」

会話に参加できないフェイトは、ただ二人の会話を見て聞いているだけ？というよりも、怯えてる様子。小さな小動物的な感じですよ。フェイトの目線からすると、こんなアルフを見るのは久しぶりな様子。「その勝負、いつやるんです？」

「一週間後、時間と場所はこちらで決めさせて貰う！ いいな！」
「いいですよ！ 俺の覚悟ちゃんと見せますからね！」

七夜は、少し痛む体をベッドから下ろし、歩いて何処かに向かおうとする。

「何処、行くの？」

「えっ… 体を動かしに行くんだよ、あのオレンジに負けないように…」

「無茶だよ！」

「心配してくれるの？嬉しいね！ けど、まだこのシステムが分からない。だから、自分のものにする」

「……………」

「君、名前は？」

「フェイト・テストロッサ……………」

「いい名前だ…」

一度止めた足を再び動かし、前へ前へと進む

「ここらでいいかな！」

ここが何処だか分からない上、日もすっかり落ち、辺りは真っ暗そんな中で自分の身を潜ませるため公園に近づいていた。

「にしてもここ公園か？ 広すぎて、よくわからない… とにかく休憩できる場所を…」

重い身体を引きずりながら、休むことのできる場所を探す七夜。

ちようどいいところに、茂みが…そこで一休みをしよう

ドタツと、身体を滑らすかの様に横になり、目を閉じる。疲れていたせいかすぐに寝息を立て眠りにつく

チュンチュン…

小鳥の歌が目覚まし代わりに歌い続ける。

「ん… あさ… か」

半寝ぼけの七夜。こんな朝を過ごすのは、初めてだろう、が目覚めの方は良いはずだ。スカイブルーの海、静かに流れる雲、海から吹いてくる潮風… どれも心地好く感じられるものばかり
「さて… 運動する前に準備体操しないとの前に腹ごしらえ、と」と言い真つ先にコンビニへ向かう

「よし！ 食料も調達したし！ さあ、食べるぞ！」

ここは公園にあるベンチに座り大人しく朝食をとった。そんな時…
「ここに居たんですか？」

声の方に振り向くと、昨日の金髪の少女ことフェイトが立っていた
何のためにいるのかは、分からないが

「どうしてここに？」

「朝早くに目が覚めちゃって、だから散歩です」

「散歩ね… そんなオシヤレして？」

会話の途中で、海の方に目を向けた

「／／／／／／」

フェイトは恥ずかしさのあまり、顔を少し赤くしてスカートの裾を両手で握り絞める

「けど、なんだか安心したよ」

「えっ！」

「いや、なんでかな？」

「昨日の…… 件……？ ですか」

「ああ… そうかもね！」

「昨日の件はアルフが言ってた通りに、命に関わることなのです。下手したら死んじゃうかも…」

「つまりここに来た理由は、諦めると俺に言いに来たわけかい？」

「ちっ… 違います…。 貴方は、この件に関して関わる必要がないからだとは思って… その…」

「気を使いに来たわけか！ あのねフェイト… 俺の正確上、人が困つてると黙つてられないんだ！ だから助けたい… そう思ったんだ。だから死をも覚悟して、君を救いたい！ ただ今は目の前の君の探し物を探したい！ それだけ… かな！ なんか照れちゃうね！」

「解りました… 私貴方の力になります！」

フェイトはこれを言いたかった！ 力になりたい、と

「早速、フェイト教えて欲しいのが山ほどあるんだ！の前に… これ全部食べていい？」

「ふふふ…」

フェイトが笑った。 なんだいつもあんな暗そうな顔してるから笑わないのかと思つてたけど笑うとかわいいじゃん！

「さあ… 腹ごしらえも済んことだし、やろうか！」

「はい！」

やる気のあるフェイトは、バルディッシュを手に取り宙に向かって腕を振り上げる。

「セットアップ」

続いて、バルディッシュからも音声が、流れる

(Get Set Barrie jacket Set Up)

黄金の中で遂げる華麗な変身。次々とフェイトの周りに光が集束し、光がバリアジャケットへと変化する

変身をしたフェイトは七夜の前に行くなり、どうしたの？と質問をする

返答は…

「待ってね、今処理してるから…」

「はい… 待ちます」

素直に待つフェイト、処理に全力を懸ける七夜

「大体は、キャラクターの情報とデバイスについて…か」

ふと、まとめてみるとこんなにも魔法少女がいるとは、その中の一人フェイトか…

「よし！ これだな！」

初めてなのに、手慣れた手つきの七夜。

「掛け声って、セットアップ？ でいいのかな？」

「はい。セットアップか自分の言い慣れた呼び方でどうでしょうか」

「オッケー！ じゃあ…セットアップ！」

選択したのは、前回無意識に使ったフェイトのバリアジャケット。フェイトと殆ど構造が一緒なため、フェイトは驚いていた。二つの事に関して

「私と一緒に！」

「あはは… うちのデバイスを必要としないんだ！」

「じゃあ… どうやって？」

気になったフェイトは、七夜の周りを見て回ったがそれらしい変化に気づけなかった！

「種明かしをするよ！」

七夜は足元に人差し指を向ける。刹那、魔法陣が展開する。

これに指を指している

「魔法陣ですけど…」

「うん。うちのこれは、いろいろと備わってるらしいんだ…」。

普段は、相手のデバイスやバリアジャケットをコピーできる能力を持っていて戦闘時に使うことが可能なんだ。だからフェイトのバリアジャケットとデバイスだって、コピー出来るんだ！ どうせやるなら、フェイトと同じ物を付けた方がいいと思って！ ねっ

なんか姉さんみたいなこと言ってるな俺。 流石姉弟だけあって、

いざという時には和ませようとする力が働くらしい（まだ研究中ですが）

「それって、つまり私と同じ動きを盗りたいってことでいいんでしょうか？」

「うん。まあそんなとこかな！ フェイト、とるって漢字は盗むじやないからね！ そこ重要だから！」

「分かりました！」

「それとその敬語！ へんな壁が生まれるから、普通に話してお願い！ ねっ！」

「分かりました！」

「じーっ」

「分かり……………」

「じーっ」

「分かった……………」

「よしっ！ じゃあ、まずは… 何からやったらいいんだろ？」

出だしから、ややこけ気味だが、それは初心者だから仕方ないとみて

「空は飛べる？」

「いや… 俺は逆に墜ちてきた方だし…」

照れる動作をする七夜な訳だけど…ここは照れるという動作は入らない

「じゃあ、私が試しに空に上がってみるから。それを見て」

と、見本となるフェイトがゆっくり空に上昇していく。それを地上から見つめる七夜。

まさかと思い、身体に少し力を入れてみる。すると七夜は上昇

しフェイトのいる元に、向かう

「フェイト！！」

「えっ！ もうコソ掴んだの？」

「フェイトのバリアジャケットのおかげかな」

「／／／」

「照れ屋さんだな・フェイトは！」

「そんなこと／＼／」

「顔赤いよ」

「……………」

空に上がっても、七夜のおちよくりはフェイトを困らせる。その素直さがいじりかいがあるんだと七夜は思っている

「じゃあ… 軽く… そこら辺を回ろうか？」

「分かった！」

照れ気味のフェイトは、少し体温を冷やそうと七夜に軽く回ろうと提案する。七夜は二つ返事のOKと答える。とフェイトは自分の周ってるコースを周り始める

「いい感じ！ 次は右に行くよ！」

「うん」

最初は、手こずっていたが開始2分で習得し今フェイトと同じ速度で回っている

「どうだったかな？」

「んっ - 楽しかった！」 地上に下りフェイトの質問に対し七夜

は、伸びをしながら答える

「朝の運動って気持ちいいな - 」

「うん。そろそろ戻るうか？」

「えっ！！ 俺昨日家出たつもりなんだけど」

フェイトに言葉に対して慌てて返した

「その身体だと、長くはないはずだよ」

「大丈夫……………」

自分の発言と同時に地面に右足を落とした

「早く、横になった方が……………」

「横になつてゐる方が、身体が悪くな…りそ…うだよ…」
フェイト、ゴメン… また君に迷惑を…

薄らにフェイトの顔が映る。その表情は、泣いているように俺
の視界は確認した

第十九話 「魔法少女になりました！」（後書き）

再び、登場しました！

予耶です！

作品の方はどうだったでしょうか？

えー、特に解説するような所はないのですが…

感想の方待ってます！

第二十話 「君に支えられて」

意識を取り戻したのは、フェイトとオレンジ（アルフ）が住んでいる高層マンション。勿論…あの公園で倒れて、ここに運ばれたんだと俺は思うんだけど

で…俺が寝ていたのは、フェイトのベッド？。（と判断）別に嫌らしい意味はない。多分だけど、あつちから気を使ってくれているそれがとても嬉しかった…と言っても、俺の思いすごしなんだと思う…

少し寝たおかげか身体が楽になった、身体でも起こそうかな…

「ん…？」

左手に温かい何かを掴んでいた
フェイトの腕だ

知らぬ間に掴んでいたらしい

なんか…彼女に触れてるだけで安心する
なんでかな？

「これ以上…フェイトに触れるな…！」

罵声に驚き、振り向くそこには、怒りを表したアルフがいた
俺は………」

「口答えをするか…！」

犬歯を剥き出しにして、こちらを睨み続ける

「オレンジ、君は何かを誤解してる」

「誤解など……していない…！」

「君の頑なな精神がこんなことに…」

「なにを…」

やっぱり、落ち着きがないな…

「じゃあ…勝負をしようか」

「それって…」

「そう… 早く勝負がしたいって言うてるんだ！ いいだろうオレンジ？」

少しづつその気にさせていく七夜

もしオレンジが話に乗らないのなら冷静と考え、話に乗ったのなら冷静ではないと考える

「……………」

「どうした？怖じけづいて、返事すら出来ないか！」

「テメエ！！……………」

「それでいい… さあ、今すぐ殺し合いを… しよう」

七夜の目つきは、熱くかつ冷静のものだった

それを気に入らないアルフは…

「わかった。そんなに早く死にたいなら、すぐにあの世に送ってやるよ！」

「外に出ようか？」

簡単に釣られるな…オレンジ

このままだと、本当にあの世に逝ってしまいそうだ、俺は。ただ、一撃で倒せば話は簡単

それとここにはあのオレンジのリストもあるし

どこまで演技をしようか…な

「準備はいいか？ オレンジ？」

「いつでも構わない！」

「じゃあ… 始めよう…、合図は仕込んでおいた爆発物が爆発する

…それが合図」

ここは、シュミレーションを用いて作られたレイアー建造物のエリア。関係のない他人を巻き込まないために俺が用意したものだ。いくら壊しても大丈夫なように

後に二人の魔法少女の戦いで使用するであろうエリアを予め検索しておき、今この場で再現テスト及び、怒り状態のアルフの力を確認すること

今はこの二つが目的なところ

どこまでやれるかな？オレンジ

……………3……………2……………1

バアアアアン！！

始まりを告げる合図がエリア中に響く

「行くぞオ！」

始まりとともにアルフはこちらに前進する

七夜の今回のバリアジャケットも、もちろんフェイト・T・ハラオウン。それを見たアルフの反応は…

「フェイト！！？ いやあいつは！！！」

「流石に、髪色までは真似出来ないか…」

「貴様！！！」

努髪上指アルフの怒り頂点に、達する

七夜は笑う。思い通りに事が進み過ぎてることに

アルフが近づくと同時に、七夜もアルフから背を向け逃げるように飛んでゆく

「面と向かって戦え！」

「……………」

「待て！！！」

ビルの間、右、左と逃げ惑うふりをすること数分。アルフは完全に七夜を見逃す

「あの野郎… どこに行きやがった！！ ったく、逃げ足だけは速いな！」

周りをウロウロ見渡すアルフ

「そろそろ… 始めようか…」

チヨロチヨロ…

物陰に隠れた七夜らしき人物を見つけ突貫する

だが… たどり着くとそれらしき物影はない

アルフの方もあまり時間を掛けている暇はなさそうな様子

再び、チヨロチヨロ…

「そこか！！！」

動きの場所にいたものにパンチを繰り出すが…

「なにっ！！！」

確かにこの拳で殴ったはずなのに…

アルフの中では、混乱を招いた、“殴ったはずなのに、手応えもちゃんと”…

刹那、アルフの目の前に七夜が現れ、複数の姿が視界に入る

「ハッ…」

「……………」

「このおおおオ…！！！」

シュッ…

殴りにかかったアルフは、七夜をいきよよく通り抜ける。そのことは今から始まったことではない。ほんの数分前から

「チッイ！」

ブンっと、何度も、いるはずの七夜に向けて攻撃を仕掛けるが…

「……………」

…攻撃するたびに七夜は増える続ける。まるで…

「幻術…」

「はぁ…………っ！」

魔法陣を前に展開し、ある態勢をとる。それは…

“響け終焉の笛”

アルフを待ち構えていたのは、フェイトの姿をした七夜が8、そして新バリアジャケットに身を纏った七夜の“ティアナ”“はやて”が1ずつ

これに気付いた時、アルフに…

“ラグナロク”

一撃必殺をかます。ものの魔力の異常な消費により威力半減、そして放つ方向を大きく変え発射！

アルフの横に駆ける白い閃光。狙い通り当てることはなかったがひとつ、代わりに被害を受けたシュミレーションエリアもろとも大破していた。威力半減になったはずなただけ…

それを気にせずアルフは

「デエメええ！！ 何処狙ってたんだ！ ちゃんと私を向かって撃てよ！」

怒る意味はちゃんと理解してるけど、こういう意味があるんだよ、本当は

「オレンジ… 今の一撃貴女に当ててたら、フェイトが悲しむ…」

だから位置を変えた。けど、これが俺の今出来る最大限のことだ

！ だから… お願い、君達の力になりたいんだ！ 頼む！」

思いもよらない七夜の行動発言にアルフの反応は

「それは本気で口語ってるのか？」

まだアルフの表情・かお・には少しの疑いがある

「うん… フェイトを見てわかった… 彼女は誰より君を思ってる、大切にしてる。それはある日気付いたんだ」

「ある日？」

「そう。俺は貴女と喧嘩して出て行ったあの次の日にフェイトと会ってる。どっちからってなると彼女の方からだったけど、俺に言ってくれたんだよ。“アルフは優しくて、強い娘 - こ - ” って…」

「フェイト…」

「だから… あの日から俺は本当に貴女と戦っていいのか正直なところ分からなくなった」

「それって…」

「だから… 今さっき君に挑発をしたんだ勝負をしようって、けど本当はこれっぽっちもやりたいとは思ってなかったんだけれどね…」
「今までの自分の罪を吐きながら謝る七夜。その行動を見たアルフには…」

「……………ん！」

何かの気を感じたアルフ

急に表情が鋭く、いつもの表情に戻る

「おい！ 紫頭！ 名は？」

「あの日も言いましたけど、俺に名前なんてありません！」

「はあ…！ 何寝ぼけたこと言ってるんだ！ 早く言え！」

信じる動作もなく、名前を聞いてくる続けるアルフ

対応するのが少しだけ、めんどくさくなった七夜だった

「じゃあ… 後でフェイトと3人で考えましょうか？」

軽い冗談風にアルフに提案するが…

「後で考えようか！」

「「フェイト！！」」

「どうして、ここに？」

フェイトの存在に二人して大きく驚く

アルフはほんの少しだが、七夜を許そうとしていた。心の中で、本性はツンケンしてるけど

「アルフ、ジュエルシード見つかったんだね！」

「うん。場所は…」

ギョツと、話に割り込もうとする七夜

「俺も仲間に入れる！」

「お前は魔力がもうないだろうが！」

確かに魔力は無いけど…

「大丈夫大丈夫！！ 何とかなる！」

グラツと、体をふらつからせる

「だから言わんこつちやない！」

呆れて頭を掻いた

刹那、シュツ… ふらつからせた七夜は消えた

「えっ！まさか！」

「……………！」

無言に驚くフェイト。口では反応をとらなくとも顔がとても驚いている

「驚かしたりしてごめん！」

降下してくる一人魔法少女、それは七夜。だが、服装はフェイトではなく

「今まで何処に？」

「まあ…ずっと分身を…」

「お前少し許すのやめだ！」

ボソツと話した言葉は、二人の耳には入ることはなかった

「ん？… 何か言いました？」

「フェイトといくよ！ 早くしないとまたあの娘に取られちゃうよ！」

「うん」

「あの娘？… ああ、高町なのはね…」

七夜も二人について行こうと…

ガシツ！！

何かに捕まれた…

これはバインド？ 水色の、両腕両足身動きがとれなくなる
「くっ……………」

何処から掛けたのか探るべく辺りを見渡す
すると、二人の少女が空から降下して

「つつかまゝえた！」

「こいつがあの人の子か…」

七夜から見た二人の少女を客観的にとらえると

俺から右側、初めて俺に声を掛けた少女の容姿は才色兼備、長身
瘦躯で腰まで伸びた金髪が眩しい。くりくりとした緑眼。頭には、
オシャレかなにかで被っているリボンの着いたベレー帽。どこから
とつてもモデルと見間違えるほど

バリアジャケット（らしきもの）の方は、見える所は殆ど真っ白
で、下はロングスカートこれも真っ白。だが、その真っ白な服装に
合わないものが、幾つか見られる。

それは戦国時代に使われていたものと思われる、甲冑。それが、
両肩、両籠手、左腰の計5ヶ所の部位に装着されている。それでも
何故か服装に合っていることに疑問をもっている

デバイス、服装に寄らずロングバレルのライフルを両手に構えて
いる

最初、空から降りてきた時は天使か女神かと思間違えるほどだっ
たのに宝箱をひっくり返してみるとそれは墮天使とも言えるものだ
った。

“かわいい顔をした悪魔”とも言うべきか

続いて、俺から左側、そして訳の分からないことを口にした少女
の容姿は器量より気前。引っ込み思案的というよりもインドア派か
など第一印象をイメージ。それは、失礼なことだと思っけど片目を
隠していることに思ったこと。だけど中身はしっかりとしているよう
にも思う。それは右の人を見ればわかることかと…

服装の方は黒、影武者？ 全身黒ずつめ？ と次に展開をする
ことと発展することができないくらい

じゃあ… デバイス… あれ？ない…

結論、この人は解析不能。強いて一言、右は太陽で、左が月とい
うのが表しやすいかな？ 年齢の方もものすごいベテランに見えた
りするし…

以上、七夜の一人キャラクター分析でした

「何を分らないことを！」

「まあ… 私達と共に来てもらいますよ」

左側の少女が話している間は、七夜の眼は真剣。そして武器を構
えていた

「もし、嫌だと言ったら？」

…が、この状況を楽しむ様子の子の七夜

「力づくで連れていくまでです」

冷徹な言葉。笑わない顔をとる少女

「じゃあ… 捕まえてみな」

刹那、ティアナのフォームの七夜はフェイスシルエットで複数の
自分を作り、散らばらせる。自分も

場所は先程と同じレイアー建造物のエリア

「姉さんは、後方支援を頼みますよ」

「了解！！ クオンちゃん！！」

クオンと呼ばれる少女

「どうやって、戦おうか？ 魔力の方も結構ヤバいし…」

「さて… ン！ いいところに」

バコつと、軽く建造物を破壊し武器の素になるものを調達
……………」

破壊した素を横に振り武器を構成する

「自分で武器を作った！」

驚く七夜。試しに分身を一人、戦場に出して試す

「舐めているのか！」

ハッ！！ ブンっと、構成した武器を振りかざす

刹那、分身は消滅する。次々と見つけては倒してゆくクオン

「ここは… 近接で対抗しなくちゃ、ならないな！」

慌てて、接近戦を得意とするリストから選び取りチェンジする

シグナム

「シグナム？ あれをどう利用するの？ あっ！！！」

大切な事を思いだした七夜は迷わずシグナムへとバリアジャケット

トを替える

「ほんの少しだけど、相手してあげる！」

「こっちの台詞だ！」

第二十一話 「知りたいよ 君のこと、瞳の奥の本当のこと」

二人の魔法少女に対して七夜は……………こうこう言った

「数分だけ相手をしてあげるよ！ なんなら二人でかかってきなよ……………」

「そうか… だがシオン・姉さん・に戦わせるわけにはいかない」
お互い見つめあったまま動くことはなく、沈黙の時を過ごす。緊迫が二人の間で張り詰める

「……………」

何を思ったのだろうか構えを解き、七夜は鞘に刀身を収める

「どうした？ 怖じけづいたか！」

「いや… 俺以上に強い奴と判断しただけさ」

そうクオンに向けて吐いた七夜は、目を閉じ精神統一をする。気持ちの整理ができた七夜、居合いの形をとる。目は真剣かつ冷静な力を放出させている

「ハッ！！」

素早く刀身を抜き、少女に向かって剣圧を繰り出す

「空牙」

「ほう… そういうことか」

少女
剣圧だろうがなんだろうが、顔色を変えることもなく対応をとる

その技の名前は“空牙”シグナムの技リストに入っている技で、剣圧を放出し相手にワイドショットのダメージを与える

「ふん……………」

剣圧を作り出した武器で二つに叩き切る

「やっぱり、強い……」

ニコツと笑み浮かべる七夜。これが彼にスイッチを入れた

シュンッ……………

刹那、少女に正面突破を図る

「……」

(いつの間に、ガードが間に合わ……)

ザアアアアンン！！

ズバアツツ！！

コピーデバイス“レヴァンティン”を大きく振り上げ、少女の右斜めに振り落とす。守ろうと武器を構えるがそれすらを上回る力で破壊し、貫通ダメージを与え、吹き飛ばす。それはバリアジャケットのダメージを受けた場所から滲む血の量でわかる

「……………」

「……………」

勝負あったかのような目で少女の飛ばされた場所を見る七夜

まだ名前も教えてもらってない、よ……

「私はクオン…… お前を…… お前と仲間になるモノだ」

七夜の願いが届いたかのようにクオンと名乗る少女は吹き飛ばされた場所から立ち上がりそう言った。アルトボイスで

「っ……………」

突然、バランスを奪われた七夜は地面に落ち叩きつけられる

(こんな時に…… 体が……どうして……)

「勝負あり……か」

七夜の目に映った姿はほぼ無傷のバリアジャケットに身を纏ったクオン。先程までの痛々しい傷、血痕は見当たらない。鋭い視線でこちらを伺っている。その時

「ナイス！ クオンちゃん！！ でも… この娘すごくポロポロだし、連て帰っても、ね〜今日のところは一旦引こうか？ この戦いの決着はまたの機会に！ね！」

話し合いに急に入ってきて、次の戦いの予定まで組みこみ、観てるのが飽きたのだろうかこの場から出ようと提案するシオン

「でも… 姉さん…連れて帰らないと……………」

先程までの冷静なクオンではなく、オドオドしたクオンへと姿を変えていた。どうやらシオンって娘には敵わないらしい、さっきの会話を聞いて分かったけど。あのシオンと名乗る娘は人のリズムを崩すには最高かな…

「えー 私も戦いたいもん！ ここで捕まえたらもう戦えないと同様だよ！」

じゃあ俺は、君達のおもちやかっ！、とツッコミを入れたいところ。だが、力が入らないためリアクションも…

「くっ……………」

睨みつけ、威嚇。睨まれるクオン。その表情には、悲しみがあつた「君、どこでその力を入れた？」

声が先程までのアルトボイスとは違く、男性のテノールボイスに変わっていた。その条件は解らない

「君… 男？…女？…」

「君と同じだ！」

解答に七夜は、顔色を変えた

「俺と… 同じ…」

「ああ… 条件を満たしたから二つの意志が生まれた。ただそれだけ、と…なるわけだが俺にもあまり理解できていない…どうしてこ…うなったのか…すらも」

「条件？…と、理解できていない？」

驚きと疑問。それを自らを重ね合わせられた七夜

「ふっ……………この話はまたどこかで…」

「く……………わしく……………」

急に力が入らなくなり意識が朦朧とする。しばらくしないうちにバタツと、俯せの状態にて意識を落とす

「……………つまりこう言うことなのです」

「……………」

場所は地上ビル。そのビル壁に背中を預けている状態に変え話を聞いている。改めて事情説明を行うクオン。その説明より自分の体に微かに残る痛みの方が気になり話しに集中ができない。無言で俯く七夜

「傷の方が痛々しいですね？」

「どうして…この…」

体を触り、見つめる。痛々しい傷を。そこで、クオンは口を動かす

「俺が付けた！」

「馬鹿を…君はシオンと話してたんじゃない！」

嘘だ、嘘だ、と否定をする目

「これは、君に対しての油断を招くための演技だったんだ！」

血の気が一気に引いた。俺を騙す？

「だとしても！俺との距離もあつたはず…」

ありえない…

「一つ仮説をたてよう！もし俺が君の見ていないところで、デバイスを使用し分身を作る。それを消すように命令を下し、君の元へと寄りし切らす。…」

「はは…」

笑いが出てくる。やる考えが、自分がクオンならやってるだろう

な、と七夜は思う、と笑いが出てくる

「気が狂いましたか？」

「いや、元々おかしいからさー！」

「そうですか？」

「つい。同じことを考えているんだなあ…って…」

“ さようなら ”

なぜか、そう聞こえた。気がした…刹那背後に殺気を感じたクオンは振り向く

はああああああ、と猛スピードでクオンに突貫を計る黒い影。

マントらしき布を纏い、死神みたいに鎌を持ち、その鎌の刃先から魔力を放出させている。まるで…“ フェイト - 死神 - ”

「！！！」

武器を構える隙もなく、死神はクオンにダメージを与える

「ん……………！？」

目を閉じ、覚悟を決めたが…

「あれ？」

斬られた、と思ったクオンだが斬られていない。まさかと思いきる恐る目を開く。視界には死神はいない

「！！！」

周りを見渡す。ハッ、とクオンの第六感が働く

あの人は！と、見先を七夜へと向ける。その第六感は鋭い中をしてみせた

「いた！！！」

七夜を抱えながら、空を飛翔し続ける死神。それを追おうとした時……………

「破壊 - ゲームセット - 」

呟きが、カギだったらしく私が立っていたレイヤー建造物は、一瞬にて無くなった。私はそれに完全に嵌まっていた。視界が暗くな

るのはわかった

重い体を引きずりながら、高層マンションにたどり着く。けれど、フェイトとオレンジ（アルフ）の姿は無く、いるのはただ俺一人だけだった。いるはずもないのに何度も呼んでしまった。フェイト、フェイトと……

そういえば、ロストロギアの所だっけ？ フェイトならすぐ終わるかと思うけど、オレンジ（アルフ）もついでるだろうし。けど、高町なのはもそこに現れるだろうし、そうは簡単には倒せない…手に入れることも

あくまで感を使わせてもらうが、街中のヤツじゃないよな？
もし、あれだったらフェイトが危ない。けどこっちも危ない方だし、結局はここで大人しく帰りを待ってって事になる。今の俺は無力みたいなもんだし、動くことはできず、ただ待つのみしか…

フェイト達と離れて、ほんの一時間後“ 19時43分41秒
辺りは完全に日は沈み夜色に染まって、街灯や店の明かりだけが唯一の頼りとなる街中。人々は何ともないようないつものスタイルで歩いているが、一人だけ違う目的で歩いている少女がいる。それが高町なのは

茶髪のツインテール。服装は外出時に着ている服装を着用、中が赤く薄い長袖。それに合わせ外は白と薄い紫のラインと文字の入っ

た半袖。下のスカートは上の紫より、ほんの少し濃い色で纏まっている。ただ下だけでは足りないの、白いニーハイを付けたリボンの色を合わせてみたりしているのは彼女のおしゃれポイントなのかもしれない

「このあたりかと思うんだけど…」

周りを見渡しながら、念話をするのは

裏路上を駆ける小動物ことユーノ

うん…反応は確かに

「どうやら、二人は念話をし、情報を共有していたらしい。ロストログシアについて

そこで、もう一人ロストログシアを狙うものもいる。それがフェイトだ

「確かに このあたり…」 と高層ビルにてアルフと共にジュエルシードの場所を探すフェイト。彼女は細かい場所までは特定できないという

「すこし乱暴だけど、魔力流を撃ち込んで強制発動させるよ」

「大丈夫？」

「平気だよ……………」

愛機バルディッシュを前に突き出し

「わたし、強いんだから」

刹那、高層ビルから黄色い電光が放たれる。空へと直流

「「あつ……………」」

光の熱源反応を見つめる二人

月が見えていた空に急速に厚い雲がかかる

人々は呆然と見つめる

「こんな街中で、強制発動…!？」

“ 広域結界 ”

すかさず結界をはるユーノ

結界の中にいるのは、五人。なのは、フェイト、アルフ、ユーノ
「はあ…はあ…」

ジュエルシードの元へ駆け込むのは。すかさず

「レイジングハート…！」

首に掛けている待機モードのレイジングハートを取り、宙に向け
る。“お願い”と言葉をかけ

(Stand by Ready)

薄いピンク色の光に包まれ、なのははバリアジャケットへと、姿
を変える

ジュエルシードの強制発動により、雷があちこちに飛来している。
その中で、雷とは違う光が放たれるそれは、ジュエルシードの輝き

「見つけた…」

「あつちも気づいてる…フェイト！」

わかっている！とフェイトの表情・顔・にでている。軽く振りかぶり
バルディッシュをグレイヴフォームへと換装。それにはバルディ
ッシュも機会音声で反応する

なのは！あの子たちより先に封印を

現場のもとへと向かっている途中、なのはに念話をし、先に封印
するようにと告げるユーノ。なのはの答えは、うん

なのはの方も、止まりカノンモードへと換装。それに続かのように
位置に着くフェイト。お互い発射態勢へ

「あああ…っ！」

「ふ…っ！ふ…！」

デインバスターとスパークスマッシュャーを同時発射。目標は、
十字交差点に光り輝くジュエルシード。その夥しい力は一筋縄では
いかない

目標に二つの魔力砲がジュエルシードに命中

「うつつ、うつつ」

二人の威力が強く、力を入れなければ、直ぐに吹き飛ばれてしま
うほど

「ジユエルシード…」

「封印!!」

二人の掛け声と共に大きな規模の土地破壊。それは二人の力を表す
やった!なのは早く確保を…

現場に到着し、喜びの声をあげるユーノ。だが、なのはの息が上
がり少し間動くことができない

「させるかよっ!」

空から聞こえてくる力強い声ことアルフ。駆け寄るユーノに対し
邪魔を図る

瞬時に判断し“ハイプロテクション”で身を固める。

「君は…!?!」

「フェイトの邪魔は、させないよっ!」

刹那、戦闘態勢に入り、吠える。その鳴き声はフェイトの為とい
う気持ちが伝わる

「やっぱり、使い魔…!!」

驚くユーノ

レイジングハートを前に構える、だがなのはの瞳には戦意が感じ
られない。

対して、フェイトは鉄塔に立ち、なのはと同じく見つめる。ジユ
エルシードを…

勇気を持って足を前に進める。

「こないだは、自己紹介できなかったけど… なのは…高町なのは、
私立聖祥大付属小学校 三年生」

少しの動きはあったが、フェイトにはどう感じたのか…

(Scvthe Form)

戦意がないなのに対しフェイトは、忠告について喋りだす

「ジュエルシールドは諦めてって…言ったはずだよ」

「それを言うなら…私の質問にも答えてくれないよね？まだ名前も聞いてない」

フェイトの反応は無く、二人の間には風が吹く。少し目に力を入れていたが、解き俯く

なのはも同様だった

フェイトの中には、色々と迷いが出て、我を一時的に失いそうになるが、目的を思いだし我へ戻る。孤独な瞳に…

構え直し、数個の魔力弾を発生させる

反射的に構えるなのは

「なんでジュエルシールドを集める！？ あれは危険なものなんだ！」

「ごちゃごちゃうるさいっ！！」

アルフはユーノは追いかけて回す。ユーノは逃げつつアルフに説得を試みるが、まるで話を聞かない

街中を駆けるのはとフェイト。お互いに覚悟ができたのだろうか… 魔力弾を飛ばし合い。詰めたり、離れたり…

カノンモードへと換装し…

「シュートッ！！」

発射線上にフェイトがいる。だが、辛うじてシールドを張り防ぐ。上へ

「目的があるなら…ぶつかりあったり競い合うことになるのは…仕方がないかもしれない。だけど…何もわからないままぶつかりあうのは嫌だ！わたしも言うよ…だから教えて…どうしてジュエルシールドが必要なのか」

再びフェイトの中で、戸惑いが起きる

「わたしは…」

「フェイト！答えなくていい！」

止めるアルフ。まだ信じていない

「ジュエルシールドを持って帰るんだろうっ！？」

決断を決めたフェイトは、サイズモードからグレイヴモードへ代え

「なのは…！」

「大丈夫っ！」

フェイトはなのはに向けていたのを、背を向けジュエルシードのところへ降下をする。それに反射してなのはも降りる

ドクン……………ドクン……………

同タイミング。デバイスとデバイスがジュエルシードに触れる。

二つが同時に触れ合うことで、巨大な魔力が放出

「うっ…うっ…」

「くっ…！」

力に耐え切れずデバイスが…

「あっ」

「ハッ」

「きゃあああっ！」

なのは力に負け吹き飛ばされる。フェイトも同様。魔力は収まり煙りをあげている

「はあ…はあ…はあ… ごめん戻ってバルディッシュ…」

地に着き、ジュエルシードを見つめる。一步下がり、クラウチングの姿勢をとり、発進する。向かう先はジュエルシード

「フェイトッ…！」

「うっ…」

吹き飛ばされて、少しの間気を失っていたなのは。目を覚ましてみた光景は、フェイトがジュエルシードを封印しようとしているところ

ジュエルシードを両腕でしっかりと掴む

「フェイトッ…！ ダメだ危ないっ…！」

アルフの忠告を無視し…

「くっ… うっ…」

立っているのも一苦労。自分の魔法陣を展開

「止まれ…止まれ、止まれ…止まれ…止まれ…止まれ…」

フェイトの思いが届いたかのようにジュエルシードは暴走を止めた…が魔力が底をつきフラフラとよろけた動きをとる

「フェイトオオオ…！！」

獣状態から獣人状態へと姿を変えながら、フェイトの元へ向かうアルフ。倒れる前のフェイトを無事キャッチすることができた、がなのは達を睨みつけその場を去って行った

第二十二話 「気づかれない思いと届かない思い・または、信じたい思い、信

ども！ 作者予耶です。

いろいろあり、遅くなりました。

では、始まります

第二十二話 「気づかれない思いと届かない思い - または、信じたい思い、信

アルフとフエイトが去って行くところを言葉無く見送るなのは、
ユーノ（獣）。

先程の吹き飛ばされた影響と無謀なジュエルシードの封印について、
なのはの瞳は今にも泣きそうで虚ろな感じだった

そんな時、今までの事情を知らない一人の魔法少女が空から降り
てくる

「なのは…」

「白乃ちゃん…」

なのはの今までにない弱々しい声が耳につく。こんななのはを初めて
みる。なのはから目を離し辺りを見渡すと街の至る所が破壊さ
れていたりと、地割れで床が崩れているがこれがもし、固有結界を使
用してなければ今頃どうなっ…。見渡した後、なのはに再度目を
向ける。心配な表情で

「なのは、立てる?」

「ごめん…力が…」

その場から動くことができないなのはに…

「よつと!」

「にやつ…!」

なのはにとつては初めてのこともかもしれない。背もたれに手をつ
いでに太ももらへんを、と力を入れて持ち上げる。この体勢はおん
ぶではない。少女達の憧れである、お姫様だったなのだ

やるも初めてだし、やられるのも初めてなので、お互い少し頬が
ピンク色で照れている様子

「私って、重いでしょ?」

「全然!」

笑顔で答える

「本当？」

これがホントらしく、白乃にとって女の子とはこんなに軽いものなのかと疑問をもつくらいなのだ

「早く帰って治療しないとね！」

姉御肌つばいものを見せ付ける白乃、そんな優しさに触れながら家に帰宅するまでの時間、なのははちよっぴり変な感じをしながら帰宅するであつた

なのは宅にて、先程のジュエルシードの封印時、レイジングハートに付いたヒビを、じっと見つめるユーノ。そのレイジングハートには薄いピンク色の光が纏っている

コンコン、とノックをし自室に夜食を持ってきたなのは

「ユーノくん…レイジングハート、大丈夫？」

「うん。今 自動修復機能をフル活動させてるから…」

無言で自分に罪悪感を感じたなのはは椅子に座りレイジングハートに謝る

「ごめんね… レイジングハート…」

レイジングハートはしゃべることなく自動修復に励んだ

「ところで…白乃ちゃんは？」

「散歩に行くと、言ってたよ」

帰宅してから、一言しゃべることのないフェイト。心配した表情でフェイトをみるアルフ。シャマルにバリアジャケットを替え、クールヴィント（コピー）の力を使い傷を癒す七夜

「っ……………」

「ごめん… フェイト… ちょっと我慢して、痛いのはほんの一瞬だから」

「平気だよ… ありがとう、っ… 名前…」

黙り混んで、話すことのなかったフェイトだが、心配させないために顔を上げ名前を呼ぼうとはするが、名前が無いことに気づく

例え“アルフ”と読んでいても、アルフの表情は変わることはないだろう。アルフの表情は酷く落ち込んでいた。フェイトがどうしてここまで無理をするのだろうか。あの人はフェイトを……

「よしっ！ 治療終わり！ どう痛みの方は…？」

「うん… 大丈夫…」

フェイトは手の平をグー、パーを何度か繰り返す。動くこともできるし、痛い顔をするわけでもないので成功したと判断をする七夜。お次は…と、アルフに視線を向ける

「オレンジ（アルフ）は痛むカ所ある…？」

返事が返ってこない

「オレンジ？ オレンジ！オレンジ！」

「アルフ…！？」

心配するフェイト、七夜。だから、何度も呼ぶ。暗い顔に悩んでいる瞳。その顔で何かあると判断した七夜、そうだ！この際驚かすか！と悪戯・イタズラをしたくなった七夜。

「アルフ…」

オレンジをアルフと急に呼びだす七夜、暗い顔に徐々に近づく。悪戯心を駆り立てられた七夜は、シャマルからフェイトにバリアジャケットを替える。替える時は、一瞬七夜の体を包むカ所だけ光が纏わりバリアジャケットが替わる

…アルフの顔に近づくこと、鼻と鼻が当たりそうな距離、お互い

の吐息が感じられる。まだ気づかないのかな？このまま…だとホントに… 最後と呼んでみよう

「アルフ…」

最後のアルフ。気づけ…気づけ、気づけ！

ん…！ と誰かが呼んでいると遅い察知をしたアルフは、顔を慌てて上げ反応をする

「んっ…」

二人は、お互いの唇に温かい感触を覚える

見つめ合いながら、お互いジタバタする。離ればいいことを…。だが、急の出来事なので無理もない

「んっ… んっっ」

次第にアルフの顔が耳まで赤くなる。なぜなら、視界にフェイトの姿があったから。見るフェイトまでが赤面になっている。だが、アルフには一刻も早くこの誤解を…

トンツと、おもいつきし両肩に手をかけて離す（突き飛ばすでも可）。反動にて後ろに下がる。七夜は膝立ち状態からの後ろへの反動は尻餅をついた程度。アルフは普通に座ってて不意の七夜の攻撃を受け、恥ずかしさの力で容赦なく自分を後ろにもっていく。その反動でフェイト達が座っているソファから、バランスを崩し床に尻餅をする。それよりも恥ずかしさの方が何倍、何十倍も強かった（まさか、あんな奴とキスをするなんて…！！）

「な… なんで、なんでこんな… ことをノノノノ」

動揺を隠しきれない様子なアルフ。七夜は…

「オレンジの名前をなんべんも呼んでも、返事をしないから… 顔近づけたら、こんなことに…」

「こん、こんな…こと初めてしたんだ… ぞノノノノ」

「俺だつて…」

お互い胸に手を当て、心臓の鼓動を聞く。ドキドキと高まる一方、脈打つのも早く、顔が熱い。人生の中で今一番緊張しているのが分かる。そして目を合わせられない。

バタン！……………

二人の一部始終を見届けたフェイト。彼女には刺激が強すぎたの
だろう、フラツとソファーにて意識を落とす

「フェイト！！」

と息ピッタリの反応をする二人

「まずはフェイトを運ぼう」

「分かった！！って、フェイトのバリアジャケットを解け！！」

「はい…」

と、反省。フェイトを運ぶことに、バタバタとしていること数分
一段落して、二人はソファーにて、寛いでいる。ものの、お互い
さっきのことを思い出し中々しゃべりだすことができないままだっ
た。まるで、さっきのフェイトそのものだった

「このままじゃだめだよ… 意を決して！」

「オレンジ… いろいろとごめん…」

「……………えっと、こっちこそお前を、誤解をしたみたいだ…こ
つちも」

まず、したことと言えばお互い誤解や軽蔑などをしてたこと、
それについて謝る二人

「…って、ことは俺…」

「うん… 認める」

「ありがとう！！」

歓喜のあまり、アルフの手を両手でつかみ取る。アルフの目を見
つめる。その瞳はとても喜んでいて、顔が近かった

「あのさ、オレンジじゃない… 私の名前“アルフ”」

「あっ！ゴメン！アルフ」

ハツと、我に返った七夜は掴んでいたアルフの手を離れた後、手
を頭に乗せ、申し訳ないと言わんばかりの態度を示す

「ところでさ、さっきの鬨い有っただろ？その件んだけど、なん

「あのラグナ…ロク？だっけ？あれほどの大きな技をどうして私に当てなかった？」

照れた様子で答える

「えっ…と、あれはあくまで威嚇発砲で、当てる気はなかった…」

「あれを見た時は、ホントにびっくりした！今日で終わりじゃないかと、思った。ホントに…」

アルフの熱意は、本当に伝わった。俺もちゃんと考えていれば…
なんか俺が一番熱くなっていたのかな？

「でも、当たったところで、非殺傷設定はしてあったし死ぬというか、気絶程度で済むくらいだから…」

「でもな！ 本当にびっくりしたんだからな！」

「ごめん！！ホントにごめん！」

アルフの目の前でパンツと手を合わせて謝る

「いいけど…、謝まらなくちゃいけないのはこっちのほうもあるし…、あつ！それと、なぜあの後すぐこっちに来なかったんだ？」

ハッと、思い出すかの様に七夜に質問をする

質問の内容を聞いた瞬間、冷や汗が額をスーツと通るのが分かった
「フェイトには、内緒だけど俺は管理局と闘っていた。それで、初めて負けた… 手も足も出なかったし… こんな気持ちを味わったのも、初めて…」

「で… 大丈夫だったのか？」

「ここにいるってことは？」

胸にトンツと手をつけて、アルフに質問をする。屈託のない笑顔で…

「大丈夫でいいんだよな…？」

「うん… 管理局との戦闘後はとても体が怠かった。こんなに強いんだよな？って、考えちゃったくらい… 二人が帰ってくる前に慌てて、身体を癒したよ。でも、癒した後は意識がすぐになくしちゃったけど…。フェイト達が帰ってくる前に意識を取り戻せてよかった。もし、寝てるところを見られたら恥ずかしいから」

あはは…と、アルフは腹を抱えて笑っていた。こっちは、本気で悩んでるんだぞ！と口にしたかったが飲み込む
「それと、結果の方はオーライでいいのかな？」

「うん……………」

半泣き（笑い過ぎての）状態で反応した。目の回りには涙の雫が溜まっていた。そんなに面白かったかな？

真つ暗闇に染まる町並み、明かりがあるのはどこだろうか？

海鳴市の午前零時はどのような姿をしているだろうか？

一つの事件が幕を閉じ、海鳴市はいつもどおり廻りだす。そんな、薄暮暁闇逢魔が時、もう一つの事件が幕を開ける…

「すう……………」

息を吐く。だが、この呼吸は日常的に使っているものではない。

正座に純白の巫女服、自身の横には愛刀 ジーク・リンデ。そう彼女は、ここ海鳴市に建築された神社かつ自宅の一人娘なのである。

名前は丹下 - たんげ - 彩音 - あやね - 16歳

現在、この海鳴市で生活をしているごく普通の高校一年生なのだが、ある一つのことがかきつけかけで、彩音は小学三年生の身体になっ
てしまう。それは亡き父からの形見となる、細長い菱形の青色の光輝く宝石。それを首にかけた瞬間、元の身体より遥かに小さくなり、近くにあった家具が物凄く大きく見えた。どうしてと疑問を持ちな

がら、洗面台に向かうものの、これまた洗面台が大きく見えた。再び疑問を思った彩音は、母を呼ぶことに…。大きな声で母を呼ぶ、光りの速さで現れる、が私の姿を見た瞬間、どちらさま？言われた。彩音は彩音と真実を申し出るがお友達？やら同じ名前の子ね？なんて扱いを受けた。正直なところ、コントをしてりみたいだったとふて腐れしながら彩音はあの時のこと語っていた。

当時と今と変わることはない、ややつりめな目。瞳色は、淡いピンク色。この二つがかわいいとクール感を描いている

髪は綺麗な水色で肩を少し越した位置まで伸びている。でも、彼女は長い髪を二つに分け、結わいている。いわゆるツインテール。

元の身長は160？もあつたのだが、宝石の力によって、60？も縮まり100？になってしまった。これには彼女も驚きだった。発育の方だつて、今となればないんですけど…

家族構成は、母と二人。父は、通り魔に殺されて、ここにはいない。その事が原因で彩音は力が欲しいと欲を持つ。「誰にも負けない絶対の力が欲しい」、その怒り狂える瞳の奥に黒い影…

だが、父の仇となる通り魔らしき人がここつい最近警察に逮捕された。そのことが彩音の耳に入った時、彩音は大いに泣いた。（何もできなかつたと事に対し。）が…その犯人は、違う通り魔であることがわかつた。本物の犯人ではなかつたのだ

違うと知らされた彩音の中はぐちゃぐちゃで、通り魔への怒りがピークに達していた。ピークに達したのが、引き金になり、彩音は狂いだした。

彩音本人には、狂いだしていた事の記憶がない。そう… 狂いだした彩音を病院や精神科など盪回しにされ、今現在正常の心とこの巫女である自覚を持つ彼女しかない。けれど、この黒歴史はいつ戻るかも分からない、できるなら戻らないでと母は思い続けている。先程のこの呼吸は日常的に使っているものではない。と記されているが、これは丹下家代々伝わる丹下剣術の一つ、息吹奏者。文字

通り息使いの トレーニング方となっている。この息吹奏者が熟せなければ、次のステップにも進めないというリスクがある。でも、彩音はちゃんと熟している

ゆっくり目を開け、一息つく、自身の左側に構える愛刀 ジーク・リンデ を取り、何事もなかったかのように立ち上がる

何故？愛刀 ジーク・リンデ 等を持っているのか？それは彩音が望んだ事が現実になったから、この海鳴市に来る前に彩音はジーク・リンデを志恩と名乗る人から受け取っている。そこから、不思議なドアをくぐり抜けた先がここ海鳴市で、今こんな身体だが楽しく過ごしている。ここでの私の仕事は父の仇を取ること… それだけ。

「時間だ…」

自宅に設けられた、小さな剣道場。一人でやるのならこの位のスペースがあればいい、と思える程の狭さ。坪は十五ほど。その中で訓練といういろいろしてきた思い出の場所。父との…

さて、と小言を言いながら立ち上がる

日課となりつつあるとある犯人探しをするため身支度を行う彩音。床に並べられた物を次々と自分の愛用している所々色褪せたりユックサクに物を入れはじめ

「これはあつて、これは…あれっ！？ないなあ…家に忘れてきたちやっただかな？」

準備段階で無い物がある。彩音は思い当たる節々を探すが見当たらない。仕方ないため息を吐き、自宅に荷物を取りに行くため剣道場の玄関へと足を運ばせる

「はあ…」

ガラガラと、玄関を開け目と鼻の先にある自宅に向かう。足音を殺しながら

午前零時。さすがに真夜中というわけもあり、外での大きな音は厳禁なのだ

自宅、玄関前に今一つの小さな影がある。それは彩音。彼女は家

を前にしているが何故か入ることをしない。それは彼女の中で大きな問題を抱えているから

「うーん…どうしよう…」

こっそり、っといつも通りに…

「なに…やってるの？あ・や・ね…」

ドアに手をかけようとしたがまるで行動がわかっていたかのよう
にドアが開いた

暗い玄関。呼ばれる名前に、開いたドアから覗くあく…じゃなく
て母、紅葉 - もみじ - 。苦笑の彩音に容赦なく質問を乱射する

「どうして…こんな時間に外いるの？」

「どうして…家に入らないで玄関で待つてるの？」

「どうして…巫女服来て…私に怯えてるの？」

「そ・れ・で！私に内緒で…魔法少女になってるってどういうこと
かな！…！」

紅葉の態度、言葉に鋭い威圧。無意識に後ろに一歩足を下がら
し
ていた。それと同時に冷や汗が彩音の小さな顔に幾つか浮かんで、
ツーツと落ちるのがわかった

「……………」

「あれれ？鋭いこと言い過ぎたかな？もしかして凶星？」

えっ…。唐突すぎる、紅葉の笑うにも笑えない冗談に絶句するほ
かなかった

「でも…」

「……………つえ！？」

続く言葉に態度を変える紅葉。厳しかった表情には笑顔が浮かん
でいた。いつもの母の笑顔

「今回だけ見逃してあげる！」

驚きを隠せない彩音は目をパチクリさせていた

「でも！帰ってきたら、お話だよ！いい？彩音！」

「うん…！」

ただ、無意識にコクんと頷いていた

「まあ…私も昔はいち魔法少女だったんだよ！」

「えっ！」

本日何度目だろうか、脅かさればなしだ

「でも、嬉しいな…実の愛娘が私と同じ魔法少女になるなんて」

「母さん…家に入っていい？」

驚くやら脅かし等など、全て母と再開するところから位置が変わらないのだ。さぞかし、近所迷惑だっただろう。阿鼻叫喚、彩音は出掛ける前から激しく体力を消耗していた

「あっ！ご面倒、いいわ入っても…」

入ることをなんとも喜ばしい表情。まるで、新しいおもちゃを買ってもらったばかりの子供みたいに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6922t/>

魔法少女リリカルなのは～この瞳で見る世界ともう一つの違うセカイ～

2011年11月22日02時00分発行